

2017 年度春季短期研修報告書の発刊にあたって

国際教育センター長
森山 新

本報告書は、お茶の水女子大学の2017年度春季短期研修派遣プログラムにより、バリャドリッド大学(スペイン)、トムスク国立教育大学(ロシア)、マギル大学(カナダ)、サンパウロ大学(ブラジル)、オタゴ大学(ニュージーランド)、モナシュ大学(オーストラリア)、ハル大学(英国)、カリフォルニア大学リバーサイド校(米国)の8大学で研修を受けた計65名の学生の帰国報告をまとめたものです。

本学では、2004年より海外短期研修を開始しました。当初は英語語学研修プログラムのみでしたが、現在は、英語以外の言語の語学研修や、語学研修にインターンシップを加えたプログラム、派遣大学が開設する正規の専門科目の聴講等、様々な選択肢を備えた魅力的なプログラムを提供しています。また、本学が協定をもつ、英語圏の協定大学付属機関で英語の語学研修を受けたり、協定大学の正規授業を聴講したりすることで、本学の単位(コア科目英語)が4単位まで認定されることも、本学主催の短期研修の魅力です。さらに、2010年度春季プログラムから、「インターンシップ科目」1単位も認定されています。派遣先も毎年着実に増え、南米やスペインにも派遣先を確保、多様性も増し、参加者も着実に増加しています。

本学主催の短期研修のもうひとつの魅力は、国際教育センターが研修の質を保証できるプログラムを厳選して紹介していることです。研修の内容を精査した上で協定が結ばれた大学にのみ学生を派遣するという方針、渡航前オリエンテーションおよび「異文化適応」や「危機管理」に関する事前研修の提供、説明会に加え、前年度研修参加者との短期留学相談会を開催するなど、短期研修の効果を最大限に高める機会を提供しています。研修は比較的短期間ですが、事前準備から帰国後の振り返りまで、きめ細かく一貫したサポートをすることで、よりいっそう充実した研修を実現しています。

その結果、本学は短期語学研修が「Times Higher Education」(THE 世界大学ランキング 日本版 2018)において、本学は日本人学生の海外への留学比率が高い大学として国立大学の中では2位、国公立大学の中でも18位という高い評価を得ました。これは本学の短期留学が高く評価されたものです。

報告書を読むと、海外で実際に生活することで、さまざまな価値観に触れ、自身の視点の再考を求められることを実感し、確実にグローバルな視点や共生の姿勢を獲得して帰国した学生の姿が浮かびます。大学生活に留学を組み込むことを考えている学生のみなさんにもぜひ参考にさせていただきたいと思います。

本プログラムの企画・運営に国際携わる教育センターとしても、参加者に充実した体験を提供できたことを実感し、たいへんうれしく思います。この研修が学生一人一人の飛躍の機会として今後さらに充実、発展したものとなりますことを祈っております。

最後になりましたが、短期研修プログラムの推進に携わってこられた、松田デレク先生、井上貴恵先生、派遣担当の長塚尚子さん、お茶の水女子大学国際課職員の皆様など、関係者の皆様に、この場を借りて心から感謝いたします。

2018年9月吉日

目次

UCR（カリフォルニア大学リバーサイド校）：アメリカ合衆国	1
研修参加者からのアドバイス	22
バリャドリッド大学：スペイン	25
オタゴ大学：ニュージーランド	32
研修参加者からのアドバイス	41
サンパウロ大学：ブラジル	48
研修参加者からのアドバイス	55
トムスク国立教育大学：ロシア	57
研修参加者からのアドバイス	72
ハル大学：イギリス	78
研修参加者からのアドバイス	89
マギル大学：カナダ	99
研修参加者からのアドバイス	106
モナシュ大学：オーストラリア	108
研修参加者からのアドバイス	131

UNIVERSITY OF CALIFORNIA UC RIVERSIDE



カリフォルニア大学リバーサイド校 (アメリカ合衆国)

研修期間：2018年2月19日(月)～3月9日(金)

滞在：ホームステイ

参加費：約47万円

研修内容：理系英語短期研修

UCR での研修を終えて

理学部 化学科
1520324 吉原綾菜

授業内容

UCR では主に 2 種類の授業がありました。1 つ目は理系アカデミック英語を学ぶもので、物理や環境に関する文章を読んでペアで要点を話し合うほか、化学や数学に関する講義のビデオを観て理解を深める授業でした。日本の授業とは異なり、意見交換をする機会が多く、初めは慣れなかったものの、こなしていくうちに英語でのコミュニケーションが楽しくなりました。



2 つ目は最終プレゼンに向けての学習でした。3 人ずつのグループに分かれて、物理または生物についての実験を行い、原稿やスライドを作成して最終日に発表を行いました。このほかにも、UCR の学生とテーブルを囲んで、与えられたテーマについてディスカッションする時間が週に一度ありました。

宿題はほぼ毎日ありましたが、ホストファミリーに質問したり話し合ったりする課題がほとんどでした。日常会話以外でもファミリーと話す機会が得られ、為になったと思います。

課外活動

放課後は学校近くの映画館で映画を見たり、1 時間ほどバスに乗ってショッピングモールへ買い物をしに行ったりしました。最初の週末にはオプションツアーでディズニーカリフォルニアアドベンチャーに行きました。アトラクションやレストランのメニューの多くが、日本のディズニーランドとは異なり新鮮でした。

次の週末には、同じ学科の友人と、高速バスでラスベガスに行き、ホテルで 1 泊しました。テレビでしか見たことがなかった巨大なホテル群やショーなど、どれもきらびやかで規模の違いに圧倒されました。

また、電車で LA にも行きました。アカデミー賞の授賞式と被ったために通行規制されており、ハリウッドでは十分に観光できなかったのが心残りでした。サンタモニカでは栈橋から海辺の風景を楽しみました。

生活面

カリフォルニアに到着して 2 週間ほどはまだ寒い日が多く、朝晩は日本とあまり変わらない気温でした。最後の 1 週間は春のように暖かくて過ごしやすかったです。雨はほとんど降らず乾燥していたので、気温が上がっても快適でした。

ホームステイは 6 歳、7 歳、13 歳の 3 人の息子さんを持つ家庭でお世話になりました。1 人でのホームステイでしたが、長期留学をしている中国人の高校生がルームメイトにいました。

食事については、朝食と昼食は各自で用意する形式で、冷蔵庫やキッチンを自由に使って良いと言われました。朝食にはシリアルとヨーグルト、昼食にはサンドイッチとオレンジを食べることが多かったです。ホストファザーとマザーはメキシコ出身だったので、夕食にはアメリカ料理だけでなくトルティーヤなどメキシコの料理も出ました。

家にいるときは末っ子と庭でサッカーをしたり、家族揃って映画を見たり、ルームメイトと互いの国の食生活について話したりと楽しみました。次男の小学校の合唱の発表会にも連れて行ってもらうなど、本当の家族のように接して下さったのでとても嬉しかったです。ホストファミリーとの会話を通して、アメリカと日本の文化や生活習慣の相違点も学びました。あっという間の 3 週間でしたが、ホストファミリーや先生方のおかげで充実した日々を送ることができました。



UCR 理系短期研修

理学部 生物学科

1620421 古市萌

☆UCR での授業

授業はお茶大生のためのクラスで、留学生専用の UCR のキャンパスで行われました。理系科目の初歩的な(アメリカの小学生が学ぶレベルの)内容を、英語で説明したり話したりすることがメインでした。加減乗除の計算や物理・生物の実験などを英語で行ったり、短い動画を観てその内容を隣の席の人と英語で説明しあったりしました。

また、生物系の実験である population lab と物理系の実験である ball launcher lab の2つの実験を行いました。その後、3人ずつのグループを作って1つの実験を深め、最終日に英語でプレゼンテーションをしました。時間割は次のような感じでした。

月	9:00am~12:00am 授業	Free time
火	9:00am~12:00am 授業	1:00pm~3:00pm プレゼンテーションの準備 3:10pm~4:10pm UCR の学生とトークタイム
水	9:00am~12:00am 授業	学生団体のテント見学、桜部
木	9:00am~12:00am 授業	1:00pm~3:00pm プレゼンテーションの準備
金	9:00am~12:00am 授業	Free time
土	オプションツアー	
日	休日	

他にも、メインキャンパスに行って UCR の学生さんに質問をしたり、一緒に写真を撮ったりする scavenger hunt や UCR の学生さんに学校生活や勉強について質問をする時間もありました。そこで友達になった学生さんと研究室や botanical garden にも行きました。また、UCR には『桜部』という日本文化が好きな人たちの活動があり、そのサークルの集まりに参加させていただいてお話しもしました！



☆課外活動

土曜日は UCR 主催のオプションツアーが開催されました。私たちが滞在していた時は、ディズニーランドと Cabazon Outlet に行くことができました。事前予約制で、

お金も先に学校に支払います。当日はバスで目的地まで連れて行ってくれるので安心でした！日曜日はホストマザーが働いている教会と一緒に連れて行ってもらい、お祈りをしました。私がイメージしていた教会とは異なった現代的な教会で、歌うことで心の内を表現したり、ハグや握手によって気持ちを共有したりしていました。今まで宗教と縁がなかった私は、文化の違いに驚きましたが、教会の方はみんな私たちを受け入れてくださり、優しさに触れて感激しました。他の日には、LA 観光にも行きました。Uber やバスを使って移動することが多かったです。La La Land の舞台で有名なグリフィス天文台からの夜景やサンタモニカのビーチを楽しむことができ、観光も大満足でした！！

☆カリフォルニア リバーサイドでの生活

私のホームステイ先は、洗濯は1週間に2回まで、シャワーは1日5分間まで、などの決まりごとがありました。これは、カリフォルニアが砂漠地帯で水がとても貴重な場所だからで、どのお家も水をとても大切に生活していることを知りました。日本がいかにも水に恵まれた国であるかということに気付かされました。朝食はシリアルにローファットのミルクをかけて食べるのが定番でした。私と友人はチョコレートのシリアルがお気に入り、大きな箱を買ってもすぐに食べてしまったので、ホストマザーが驚いて笑っていました。また、昼食は薄めのパンにハムとチーズとピクルスを挟んでサンドイッチを作り、小ぶりのりんごとチップスとブラウニーを紙袋に入れて学校に持って行きました。サンドイッチのお弁当はアメリカの定番スタイルで、子供達は小学生の頃から毎日学校に持って行くそうです。夕食は、ホストマザーとホストマザーのお友達とレストランに食べに行ったり、一緒にお料理をしたりして食べました。リバーサイドは車社会で、毎日ホストマザーが家から学校までの送り迎えをしてくれました。ホストマザーは、私のたどたどしい英語にもじっくり耳を傾けて聞いてくれて、徐々に心を開いてくれたことが一番嬉しかったです。3週間支えてくれたホストファミリーにとっても感謝しています。

☆最後に...

私は中学生の頃から英語が大の苦手で、勉強をすることすら避けていました。しかし、大学生になり今まで以上に英語力の必要性を感じ、勇気を出してこのプログラムに参加しました。初めてのホームステイで出国時は不安しかありませんでしたが、UCR の先生や友達、ホストファミリーはみんな優しく、帰国時にはアメリカの大学に通いたいと思うようにまでなりました。英語力は3週間では身につかないと改めて実感しましたが、少しだけリスニング力が向上したと感じます。しかしそれ以上に、英語の勉強への意欲が高まったことや異文化理解は実際に行ってみないと分からないと肌で感じられたことに意味があったと思います。3週間はあっという間ですが、濃密で様々なことを考えさせられる短期研修でした。

UCR への 3 週間の理系プログラム

理学部 化学科

1520314 佐々木美織

① 大学での授業に関して

大学での授業はお茶大生のためのクラスで行われました。先生から課されるトピックに対してペアで話し合ったり、理科に関する講義映像を見て、少し専門性のある英単語や表現を学んだりといった形でした。また授業内で 2 回ほど単語テストがありました。そして、最終日にチームでのプレゼンテーションがあったのですが、それに向けて簡単な実験をし、パワーポイントや原稿などの準備も授業内で行いました。大学内のパソコンルームはあまり利用せず、自分のパソコンを持ってきている人がほとんどでした。USB も持って行った方が良いかもしれません。その他にも、メインキャンパス(授業は留学生専用のキャンパスです)を探索するイベントや、サイエンスライブラリーの施設見学などが授業内に行われたので、座学だけではなく、楽しめる授業もたくさんあったと思います。宿題はホストファミリーへのインタビュー形式のものがほとんどで、量は多くありませんでした。

② 課外活動に関して

授業が終わる時間は不規則で、早く終わる日も多く、放課後は様々なところへ行くことができました。キャンパスの目の前にレストランやスイーツのお店が何軒かありますし、映画館もすぐ近くにあるので、安く映画を見ることができます。お店でご飯を食べ、クレジットカードで支払う際のチップの払い方は独特なので予め知っておくと良いと思いました。

無料でバスに乗れるチケットを大学からもらったので、授業が早く終わった日は大学付近から出ているバスに乗り、そこからスーパーやダウンタウンなどにも足を伸ばしました。大学から提示された無料イベントとして、ダウンタウンで開催されるお祭りのようなものやジャズコンサートなどもあったので、参加すると一つの良い思い出になると思います。

また、大学が主催するオプションツアーでカリフォルニアアドベンチャーランドにも行きました。ツアーは他にもありましたが、申込締切が早いので要注意です。



他にも、友人達と日帰りで LA (ハリウッド、サンタモニカ)、一泊でラスベガスに行き



ました。21 歳以上の方はラスベガスに行くことを強くおすすめします。ホテルの予約等すべて自分で行う事になりますが、それでも行く価値が十分あると思いました。宿泊やカジノで遊ぶことを考えている方はパスポートを忘れずに持って行ってください。

③ 生活面に関して

大学への送り迎えはホストマザーが車でしてくれました。私がステイした家は大学から車で 15 分程の距離にありました。彼女は仕事をしているので帰りのお迎えは授業終了時刻によらず、毎日 17 時でした。

食事の量は日本より桁違いに多くて苦労しました。始めのうちは食事を残すことに抵抗があり、さらにとても美味しいので、無理やり全て食べていましたが、適度に断ることも大切だなと感じました。

洗濯は週に一度でした。下着類は 1 週間分持っていくのが無難かもしれません。私は靴下の枚数が足りなかったため、何枚か手洗いして使用していました。支払いはほとんどカードで済ませました。

VISA カードが使用できないお店はありませんでした。

お茶大から携帯をレンタルしなければならなかったのですが、使い勝手が非常に悪いので日常の連絡手段としては使わず、ポケット Wi-Fi を借りて自分のスマホを使用していました。外出時ファミリーとは messenger のアプリでやりとりをしていました。



カリフォルニアでの生活

理学部 生物学科

1720425 山本悠夏

① 大学での授業に関して

授業は Mr. Gilman と Mrs. Gilman の 2 名に主に担当していただいた。

Mr. Gilman の授業では数学や物理、化学を英語で学んだ。ネイティブが行う映像授業を短時間に区切り、何度も繰り返し視聴して、教授が何を説明しているのかを少しずつ把握していくという授業スタイルだった。動画の区切りでペアの相手と内容を説明し合うことで、理解の補強をし合った。また、授業の理解をしやすいように、動画を見る前には、その単元に関わる英単語を教えていただいた。

Mrs. Gilman の授業では、3 人のグループで 2 種類の簡単な研究を行った。1 つは生態系に関わる研究で、布の上に散りばめられた 10 色のドットを無作為に取り除いたのち残ったドットの数に 2 倍にする、という操作を繰り返した結果から、擬似的な生態系の中で起こった事象を生物学的な視点から考えるというものだった。もう 1 つは、指定された材料のみを使って、アルミホイールで作られたボールを遠くに飛ばす為にはどうすれば良いかという実験だった。グループでいずれか 1 つの実験研究を選び、最終日にプレゼンテーション発表を行った。

また両名の授業では、息抜きを兼ねた面白い動画を視聴した。3 分程度の動画の内容を、各々が英語で説明することで、英語で端的にまとめ説明する力を身につけることにつながった。



その他、Scavenger Hunt で大学のキャンパスで大学生に、UCR でのキャンパスライフをインタビューしたり、Talk Time に他の国から留学に来ている留学生と交流したりする時間が用意されていた。ここでは内気にならず、積極的にコミュニケーションをするように心がけた。このような時間に知り合った学生に研究室を紹介してもらったこともあった。

② 課外活動に関して

授業のない午後や週末には、積極的に出かけることにしていた。Disney Land では日本の Disney Land との共通点・相違点が多く目につき、とても有意義な時間を過ごすことが出来たと思う。特に興味深かったのは、どこでもピザの匂いがすることや、日本では大人気なラプンツェルよりもムーランやポカホンタスの方が歓声を浴びていた

ことである。

また、別の休日には、Hollywood へ行った。オスカーと日程が被ってしまったために、Chinese Theater 付近に近づけなかったり、その他目玉観光地に訪れることが出来なかったり、クレジットカードを拾い警察に届けたりといったハプニングがあったが、カリフォルニアの人たちがよく利用するという TRADER JOR'S へ行ったり、Aladdin のチケットを当日に購入することが出来たり、無計画ならではの経験をする事が出来た。



他にも、水族館やグリフィス天文台、ショッピングモール、パーティーグッズショップなどに行き、様々なカリフォルニアの断片に触れることが出来た。

移動は主に Uber やバスで行った。バスは公共交通網だったので、不安はなかったが、Uber は初めて使うときは非情に緊張した。しかしながら、運転手はみな優しく親切な方々ばかりで、快適な移動時間であった。日本ではあまり普及していない Uber を利用したのは、貴重な経験であったと思う。

③ 生活面に関して

ホストファミリーは、何十年も留学生の受け入れをしている方々で、不安なことが全くなかった。夕食中には、カリフォルニアの文化を色々お話ししてくださり、さらに日本のこと、それについてどう思うかを質問して下さるので、夕食の時間はとても充実した楽しいものだった。最初の 1 週間は、まだ家族と打ち解けられず、引っ込みがちだったが、滞在 2 週目からは、2 歳の女の子と 7 歳の男の子、家にいる犬や猫と一緒に遊んだり、テレビを見たり、とても打ち解けて家族のように生活を送ることができた。

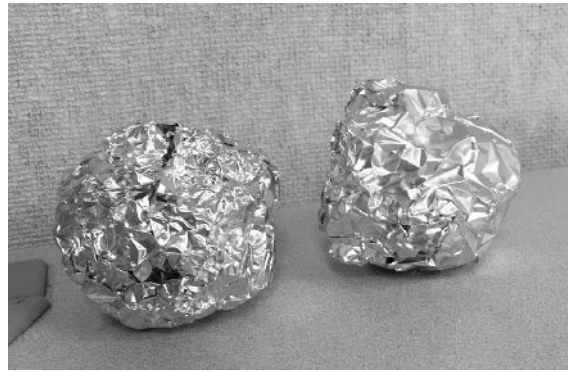
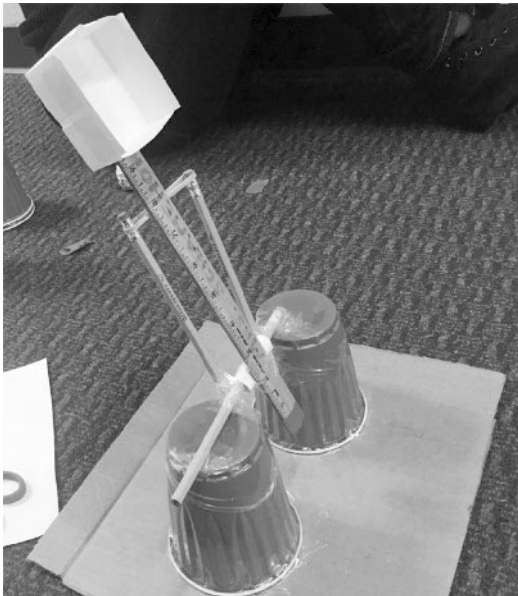
アメリカ人は、大きな冷蔵庫に 1 週間分の食料をため込んで週末に買いに行くものと思っていたのだが、すべての家庭がそのようにしている訳でもなく、適宜買いに行く場合もある、ということを知ったのが、ホームステイをしていて一番驚いたことである。いつも買い物に連れて行ってくれるので、アメリカのスーパーにはこんなものがあって、こんなものが無いということを知ることができたとても良い機会だった。

UCR 短期留学

理学部 物理学科
1520224 新井幸

① 大学での授業に関して

大学での講義は学部1年生から4年生まで、理学部の様々な学科の人がいるからか、全てにおいてかなり初歩的な内容だった。講義の中で物理分野か生物分野かを選択して、最後にプレゼンテーションを行った。私のグループは物理を選択し、プラスチックのコップや鉛筆を用いてボールを遠くまで飛ばす装置を作り、その精度や飛距離などを考察した。しかし自由時間は多いのに授業時間が少なく、発表準備をする時間にほとんど取られてしまって、物理的に考察する時間がほとんどなかった。もっといろいろと改良・実験を重ねたかった。



出発する前は実際に UCR のそれぞれの専門の授業に混ざれるのかと思っていたが、期待はずれだった。授業内容としては science のかなり基礎的な部分について英語で講義を受けた。さらにホストファミリーに質問する宿題が出たり、それについて英語で話し合う時間もあった。しかし一緒に講義を受けているのは全員お茶大生で、日本人同士で英語を話してもあまり意味がなかったなので、カリフォルニアに行く必要はないと思った。

現地の学生との交流の機会も少しはあったが、ほとんどが文系の学生で、理系だとしても生物分野の方しかおらず、自分の専門分野について英語で語れる機会も UCR でどんな研究が行われているのかも聞ける機会がなかった。サイエンスプログラムではあったが、専門的な交流はおろか、志を同じくする友達を作ることもできなかった。物理学的に学べたもの、得たものは何もなかった。

② 課外活動に関して

平日でも授業時間は少ないので放課後に映画を観に行ったり、ショッピングセンターに買い物に行ったり自由に過ごすことができた。さらに土日はフリーなのでハリウッド、サンタモニカ、ユニバーサルスタジオ、ディズニーランド、グリフィス天文台などカリフォルニアの観光地を訪れた。交通手段は **uber** というタクシーのようなシステム(日本ではあまり普及していない)や現地のバス、電車にも乗った。夜の公共交通機関は治安が悪いので **uber** の方が安心であると感じた。



③ 生活面に関して

ホームステイ先は 70 代の夫婦だったが、私たちと本当の娘(あるいは孫)のように接してくれて、3 週間本当に心の交流ができたと思う。夜はご飯を食べた後にみんなで一緒にテレビを観ながら会話をしたり、一緒にクッキーを作ったりした。日本の留学生を今までも多く受け入れているようで、家に日本のものが多数見られた。やはり留学生になれている様子で、頼みづらいこともホストマザーから言ってくれたり、私の拙い英語でもすぐに理解してくれたので、思ったよりいろいろ会話することができた。メキシコがルーツの方々であったので、スペイン語も話せるようだった。敬虔なクリスチャンであり、食事の前は必ずお祈りをした。夕飯には伝統的なメキシコ料理をふるまってくれた。帰国してからも連絡を取り続けて欲しいと言ってくれたのでこれからも何かと連絡をとろうと思っている。カリフォルニアにまた行くことがあったら会いに行きたい。



UCR 理系短期研修に参加して

理学部 化学科
1520309 大藤柚

大学での授業

今回参加したプログラムは理系の授業を中心とするものでした。講義では、数学、物理、生物、化学の基礎的なことを英語で教わりました。日本人同士ではありますが、英語で話し合う機会は多くありました。小テストが 2 回ありましたが、授業を受けていれば満点が取れるものです。宿題はホストファミリーにインタビューや、その日



の授業でやったことの延長など、簡単なものが多かったと思います。最終日にはプレゼンがありました。学科の異なる 3 人でチームとなり、2 週間ほどかけてプレゼンの準備をしました。テーマは生物か物理のどちらかで、私たちは生物の捕食関係についてのプレゼンをしました。とても興味深い内容で、他のグループも工夫を凝らしていてとても面白かったです。

課外活動

学校のオプションツアーとして休日に Disney California Adventure Park に行きました(こちらか Disney Land かのどちらかを選択)。行きも帰りも学校から現地までバスで行けるのでとても快適でした。中では自由行動でした。ショーの迫りに圧倒されました。とても楽しい思い出になりました。

また、一番印象に残っているのがラスベガスです。金曜日の学校(この日は12時終了)が終わってからバスで 5 時間かけてラスベガスに向かい、友達と 3 人で 1 泊 2 日しました。アメリカに行ってから計画したので、バスやホテルやショーは現地に着いてから自分たちで予約しました。本当に異世界で自分の世界観が変わった気がします。アメリカではお酒やカジノは 21 歳以上なので 21 歳以上の方は絶対行くべきです！パスポートは原本が必須です！本当に充実した 2 日間でした。



他には LA、ハリウッド、サンタモニカに電車で行きました。ハリウッドはたまたまアカデミー賞の日と被ってしまい、駅や道が閉鎖されていて、

目的の場所を観光できなかつたりして大変でした。サンタモニカはビーチで、他の場所とはまた違って行けてよかったです。

学校が早く終わった日には無料バスに乗ってショッピングモールに行ったり、映画を見たりしました。私はアメリカにいる間に色々な場所に行きたいと思い、毎日朝から晩まで予定を詰めていました。外出が好きな方はぜひ色んなところに行って様々な経験を試してみてください！（予定をハードにしすぎて最後に体調を崩したので体調管理には気をつけてください(笑)日本の風邪薬は必須です！私は風邪なんてひかないだろうと油断して持っていかなかったので友達にたくさんもらいました。）

生活面

食事は朝昼晩全てホストマザーが作ってくれました。一人暮らしのおばあちゃんだったので、本当に尽くしてくれ、感謝しきれないです。ご飯も全部美味しく、サラダやお米も出してくれたので、全く日本食が恋しくならなかったです。量はかなり多くて食べきれないこともありました。お昼は毎日ハンバーガーや手の込んだ特製サンドイッチと果物、ヨーグルト、クッキー、チップスを持たせてくれました。周りの友達は自分で作っている子も結構いました。部屋もかなり大きく、一人部屋なのにダブルベッドでした。勉強机やダンスなども全て揃っており、生活するのに何一つ困らなかったです。お風呂やトイレも清潔で、とても心地よかったです。毎日学校の送迎の車の中や、ご飯中などにアメリカの文化のことなどたくさんのことを教えてくれました。私にとって3週間の中で大きな部分を占めているのがホームステイ生活です。ホストマザーに出会えたことは私の人生の宝物と思えるくらい貴重な時間でした。帰国の前日の夜には一緒に号泣しました。帰国後も毎日連絡をとっています。



まとめ

アメリカで過ごした3週間は本当に刺激的でした。ホストマザーとの会話を通してアメリカ文化や生きていく上で必要なことなどたくさんを学び、語学力の向上だけでなく、自分自身の考え方も変わったと思います。1日1日がとても充実した貴重な時間でした。

UCR 理系プログラムに参加して

理学部 情報科学科

1720528 鶴岡篠

① 大学での授業に関して

大学での授業は基本的にお茶の水女子大学の学生のみで行われるが、教室内では日本語の使用が禁止されており、友達と喋るときにも英語を使っていた。授業内容は、初めて会った人との会話の仕方から始まり、だんだんと数学や生物、物理の講義を英語で受けたり、簡単な実験をしたりするようになった。また、隣の席の生徒に自分の意見を言ったり、ある物や映像を英語で相手に説明したりする練習をする機会が多く設けられた。宿題は、ホストファミリーにその日授業で習ったことに関連した質問をすることや実験のレポートを書くことになることが多く、難しい宿題が出ることはなかった。

最終日にはグループプレゼンテーションがあり、授業で行った実

験の中からプレゼンテーションのテーマとする実験を選んだ。私のグループでは、“Pitching Machine”というテーマで、定規、鉛筆、ゴムなど、ある特定の決められた材料を使ってボールを投げる装置を作らなければならないとき、どうすれば飛距離を伸ばすことができるのかを考えて発表した。プレゼンテーションもそうだが、授業中にも話す機会がたくさんあったので、以前から気にしていた英語を話すことに対する苦手意識を薄くすることができて良かったと思う。

② 課外活動に関して

プログラムにオプショントリップがついており、申し込むと2月24日にはディズニー



図1 実験の様子

ーランドまたはグリフィス天文台、3月3日にはカバゾンアウトレットに遊びに行くことができるようになっていた。私はディズニーランドのプランに参加して、日本のディズニーランドと似ている点や異なっている点をたくさん見つけることができ興味深いと思った。また、3月1日には月に1回開かれるという **Downtown Riverside Arts Walk** に参加した。その日は道に迷ってしまい、美術館には2ヶ所しか行くことができずあまりよく分からないまま終わってしまったので、特に外国で観光するときには下調べをすることが重要だと実感した。

③ 生活面に関して

ホストファミリーがとても温かい方たちで、ご飯とお味噌汁が恋しいと私が言ったところ次の夕食で実際にそれを用意してくれていたりと、私たちが快適に過ごせるようにしてくれたことを感謝している。食事は授業がある日のお昼ご飯も含めて、基本的にホストファミリーが用意してくれており、また、大学からの送り迎えなどもホストファミリーにしてもらっていた。平日の過ごし方は、朝大学へ送ってもらい授業を受けたあと、午前中で大学が終わる日はモールへ遊びに行ったりキャンパス内を散策したりしてから家に帰り、帰ってからは宿題をしたり、ホストファミリーとオリンピックや映画、バラエティを観たりして過ごしていた。休日はどこかへ出かけることが多く、ホストファミリーにカバゾンアウトレットや映画に連れて行ってもらったり、オプショントリップに参加したり、別の生徒がホームステイしていた近所の人に招待してもらってバーベキューをしに行ったり、友達とUberを呼んでハリウッドまで遊びに行ったりと、十分に楽しむことができ、大変満足のいく3週間の短期留学となった。



図2 日本へ帰る前日にホストファミリーと撮った写真

カリフォルニア大学リバーサイド校理系短期留学報告書

理学部 情報科学科

14205432 平賀郁子

<授業に関して>

授業は英語の授業と実験の2つがありました。英語の授業は最初に挨拶や自己紹介、アメリカ人に質問すべきことやすべきでないことを学び、徐々に理系の内容になっていきました。四則演算、電気回路、環境汚染など基礎的な科学にまつわるボキャブラリーを習得できました。実験の授業ではグループに分かれて3つの実験をしました。1つ目は生物の食物連鎖に関わるもので、2つ目は限られた材料でボール発射機を作る物理の実験で、3つ目はエレータでの体重計の変化に関する物理の実験でした。私は情報科学科なのでどの授業も専門とは関係がありませんでしたが、とても楽しかったです。下の写真はボール発射機を作っている私のチームの写真です。



授業時間にスキヤベンジャーハントというゲームをしたことがありました。これは3人のグループに分けられてUCR内で色々なミッションを課せられるゲームです。例えば「学校内にあるジムの前で忍者のポーズをして写真を撮れ」や「UCRの学生に〜という質問をしろ」というものがあり

ます。そしてその結果の写真を先生に送り面白かったチームが優勝というものです。UCRの学生にいきなり話しかけるのはとても緊張したけれど、みんな優しくとても楽しかったです。見事私たちのチームは優勝しました。UCRのロゴが入ったバッグとTシャツとカードホルダーを景品としてもらいました。右の写真はゲーム中に撮った写真の一部です。



<生活面に関して>

とても優しい70代の夫婦のホストファミリーでした。料理が得意なホストマザーと、ジョークを言うのが好きなホストファザーでした。カリフォルニアの空気は日本と違いとて

も乾燥していて、滞在 1 週間後から喉がとても腫れてしまい、帰国 2 日前には熱も出てしまいました。日本から持って来た薬は飲み干してしまい、ホストファミリーがくれたアメリカの薬でなんとか治すことができました。薬は、ホストファザーが夜遅くなのに薬局で買ってきてくれました。ホストマザーは風邪によいというチキンスープを作ってくれました。体がとても暖かくなって治すことができました。



右の写真はホストファミリーと別れる直前の写真です。別れの時、彼らは涙を流してくれました。本当にお世話になりました。またいつか会いに行きたいと思っています。

<課外活動について>

このプログラムで友達になった 3 人と一緒にサンタモニカビーチとハリウッドとグリフィス天文台に出かけました。Uber という個人タクシーのようなものが移動手段の主流でこちらを利用しました。最初は怖かったのですが、とても良い運転手で 1 時間半の間アメリカの音楽を色々聞かせてくれたりお話ししてくれたり楽しませてくれました。サンタモニカビーチはとても美しく、浜辺にはたくさんの国旗がありました。お土産も多く売っていたのでここで買いました。ハリウッドは、なんとアカデミー賞発表の日と知らずに行ってしまいました。そのため、チャイニーズシアターには近づけず多くの観光地もお休みでした。その代わりにたくさんのリムジンとレッドカーペットを少し見ることができました。右上はグリフィス天文台の写真です。とても夜景が綺麗でした。



UCR 研修報告書

理学部 情報科学科

1720538 本田華歩

1. 大学での授業に関して

我々のクラスの先生は 2 人いらっしゃって、どちらも理系の先生であった。男性の先生の授業では、英語で数学、物理を学んだ。また、英語でのコミュニケーションや、ディスクリプションの仕方についても多くを学ぶことができた。宿題は、大体がホストファミリーとのコミュニケーションのきっかけとなるもので、非常に有り難かった。世界のことわざや、ある議題について自分の考えを述べるという授業もあった。私は、ESS サークルに入っているため自分の考えを英語で述べる機会は比較的多いが、ことわざについて考える練習は役に立つと気付かされた。

女性の先生のもとで、グループに分かれプレゼンテーションを作成した。生物か物理か選ぶことができた。準備の際も英語でのコミュニケーションが義務付けられた。プレゼンといっても一から作るのではなく、授業内である実験をし、テーマは決まっている中で、自分たちなりにどこに注目するかなど、アウトラインを決めて進んでいった。そのため、自分の専門分野ではなくても意見を出しやすく、とてもやりがいがあった。



生物の実験の様子

2. 課外活動に関して

授業以外の活動では、主にトークタイムというものがあった。現地の UCR の生徒とコミュニケーションが取れる時間だった。堅苦しい雰囲気ではなく、先生が出して下さる話題に対して、みんなの考えをシェアすることができて楽しかった。また学校に来た 2 日目には、学校の本キャンパスの方をグループごとに回った。そこでもいくつか課題が設定され、現地の生徒に話しかけることもしたが、皆とても親切でよかった。

3. 生活面に関して

私は渡航前、生活面のことが一番不安であった。しかし、ホストファミリーに恵まれたということもあり、快適に過ごすことができた。ホストファミリーは老夫婦 2 人であったが、家には妹夫婦と 4 人で暮らしていらっしゃった。特にホストマザーとその妹は、積極的にいろんな話をしてくださった。困ったことがある時はホストファミリーとコミュニケ

ーションを取ることが大切だと思った。

食事に関しては、量は少し多いと感じたが美味しかったためたくさん食べてしまった。栄養面にも不安があったが、栄養バランスを考えた食事だったため、日本にいる時よりも健康になったと思う。

週末には、学校の企画でディズニーやアウトレットに行ったが、そのほかにも友達と計画してハリウッドにも行った。放課後もホストファミリーオススのモールや映画を見に行ったり、家の Netflix で映画を見たりして過ごした。

まとめ

様々な新しいことを見て体験することができた22日間だった。非常に有意義な時間を過ごせたとし、分からないことがあれば積極的に聞き、解決することができた。「楽しく学ぶ」ことができ、私にとってとても良い研修になった。



ホームステイ先で食べた食事

短期研修での学習

理学部 数学科
1720113 櫻井咲希

UCR での授業は、英語を母国語とする先生が英語で授業をするという点で今まで受けてきた AET の先生の授業や ACT の授業と似ていました。しかし、英語でコミュニケーションをする機会がとて多い点や遊びではなく探求を行える点で今までの授業とは大きく異なっていました。授業は 2 人の先生がそれぞれ行ってくださいました。どちらの授業も、教室内では英語しか話してはいけないという決まりがありました。Grant 先生の授業では、毎回物理や化学や数学の簡単な題材について学びました。先生が説明するだけでなくペアワークの時間もたくさんあり、授業で学んだ単語を話し合いで使えるため単語が身につけやすかったと思います。また、ホストファミリーにアメリカの文化などに関する質問する宿題もありました。Jennifer 先生の授業は、2 つの研究を行い、グループでそのどちらかの研究について最後の授業でプレゼンを行うというものでした。1 つ目の研究は Ecology and the Study of Populations で、色のついた布の上に 10 色の dot (色紙を切り取った小さな丸) をそれぞれ 10 枚置き、目に入ったものから dot が半分の数になるまで取り除き、残ったものを 2 倍する操作を繰り返し、何色の dot が多く残っているかを調べるものでした。この実験において、布は環境、それぞれの色の dot はその環境に生息するさまざまな生物を現しており、実験の結果は実際の自然における適者生存をよく表していると思いました。2 つ目の研究は、Ball Launch Challenge で、プラスチックコップや物差し、輪ゴムなど、決められた材料を使ってボールを飛ばす装置を作り、ボールの飛距離と材料のコストから点数が導かれるというものでした。装置の種類や、同じような装置でも材料を組み合わせる位置によってボールの飛距離が変わるので面白いと思いました。私たちのグループはこの Ball Launch Challenge について、装置の種類と最初にボールを置く位置を変えて飛距離のデータをとり考察をしてプレゼンを行いました。英語での話し合いは難しかったですが、コミュニケーションのスキルアップにつながったと思います。

課外活動には、Talk Time、UCR Campus Scavenger Hunt、Session、UCR Science Library Tour などがありました。Talk Time では UCR の学生たちと様々なレクリエーションを通して交流しました。カードに書かれた質問を聞いて回ったり、グループごとにお題について考えて発表したり、Apples to Apples というゲームで遊んだりしました。協力してくださった学生たちとたくさん会話ができました。Scavenger Hunt では、グループで大学内を回り、学生たちの協力を得ながら課題をクリアしました。課題には大学のことについて学生にインタビューしたり、学生といっしょに写真を撮ったりするものなどもありました。Session では数人の学生が来てくださり、実験や生活についてなど、

様々な質問に答えてくださいました。UCR Science Library Tour では、大学内の Science Library を案内してもらいました。図書館は、大きいだけでなく、画面が付いたディスカッションのできる席やプレゼンの練習室、Creat'R Lab (様々な道具がそろっていて創造活動ができる部屋)、さらに 3D プリンタなど、お茶大にはない様々な施設がそろっていてとても驚きました。また、オプションツアーではディズニーランドに行き、日本のディズニーランドとの違いなども見つけられました。いずれの課外活動も、大学の雰囲気や大学生活、そしてアメリカの文化について学ぶことができる良い機会でした。

生活面では日本との文化の違いに驚くことがたくさんありました。第一印象はやはり色々なものが日本と比べて大きいということです。アメリカに着いて初めての食事にホストマザーが早速ハンバーガーを買ってくださいましたが、大きすぎて食べ切れませんでした。他にも飲み物のボトルやスナック、食材などあらゆる物が大きいサイズで売られていて驚きました。アメリカでは共働きの家庭が多く 1 週間分などをまとめ買いをする人が多いと聞いたことがあり、食材のサイズが大きいこともこのような文化の違いの表れなのだと思います。もう1つの日本との大きな違いは食生活です。朝食はシリアルやドーナツなどで昼食はほとんどサンドイッチ、夕食はタコスやメキシコ風の料理や肉料理が多かったです。アメリカではほとんどの家庭でお弁当がサンドイッチとフルーツというのはどうしてなのか不思議に思いました。ただ私は、手間はかかるけれどバラエティに富んだ日本のお弁当は良い文化だと思います。食文化については日本の方が健康的で良いと思いました。逆にアメリカ文化で良いと思ったのは、人々が社会的であることです。授業で“Strangers are friends you haven't met”というアメリカのことわざを知りましたが、バスやお店などで近くに座った人同士で会話しているのを見かけると、このことわざはアメリカ人の性格をよく表していると思いました。

初めての海外で不安でしたが、ホストファミリーがとても親切な方でカリフォルニアでの生活を楽しむことができました。すべてが私にとって新しく貴重な経験でした。今後も機会があれば海外の新しい文化を学びたいと思います。



カリフォルニア大学リバーサイド校での生活

理学部 生物学科

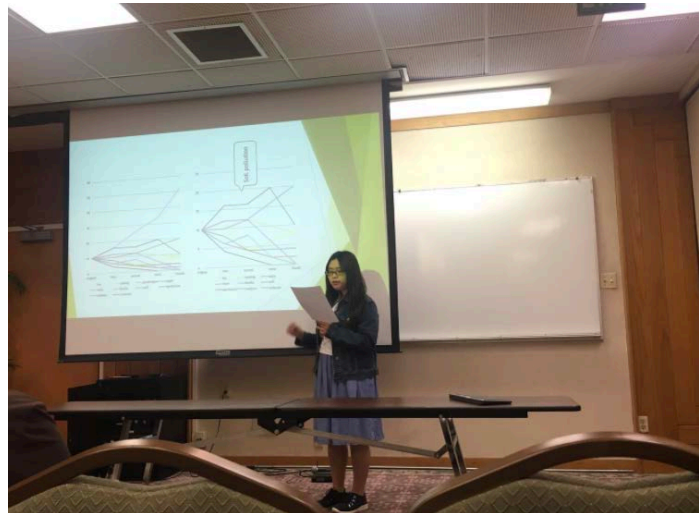
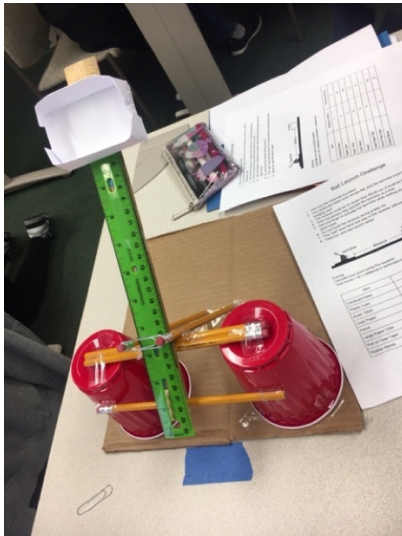
1720422 簗手香緒理

① 大学での授業に関して

大学の授業では、2人の先生に教えていただきました。小学校で習った算数を、単語を新たに学びながら英語で復習するところから始まり、中高レベルの数学や物理などで用いられる単語もたくさん覚えました。簡単な実験をやり、レポートを書き、実験結果をプレゼンしたりもしました。これまであまり触れてこなかった物理という科目をいきなり英語で学ぶのはそれなりに難しかったですが、日本語でも物理学用語を知らないなので、日本語にするとその単語はどういう意味かというのを全く考えずに英単語を覚えたのが不思議な感覚でした。

他にも、アメリカ人と初めて出会った時のコミュニケーションの取り方を教わりホームステイ先のご家族とのコミュニケーションに役立ち、ホームステイ先のご家族と会話をしていくという宿題も多く出たので、思っていた以上に短い期間で親しく話せるようになりました。

また、思わず笑ってしまうようなドッキリの映像や面白いテレビCMなども見せてくれました。その映像について隣の人に英語で伝えるということを何度もしたため、その場の状況を英語で伝えようとする能力も身につきました。



② 課外活動に関して

課外活動として1番印象に残ったのは、UCRの生徒さんに大学にある研究室や植物園につれていってもらったことです。主に分子生物学をやっている研究室を見せていただき、日本の授業でもよく使っている遠心分離機やピペットマンを見て不意に日本が懐かしくなりました。お茶の水女子大学よりも実験室や講義室は少し多かった気がします。植物園に関しては、大学のものということで大きいのだろうなと思っていましたが、山1つ分という想像を超える大きさでした。乾燥地帯だけあってサボテンがたくさんありとても楽しかったです。



③ 生活面に関して

アメリカでの生活は思っていた以上に快適でした。カリフォルニアの人たちは親切な人が多く、特に UCR では留学生を多く受け入れていることもあってか学生も皆とても親切にしてくれました。たとえ私たちの英語が拙くても理解してくれようとしているのがとても心強かったです。

以前カナダにホームステイしたことがあったのですが、それより 1 週間長いことや、学校の授業があることでその日に何を学んだかなど話すことも多かったことで以前よりさらにお別れが辛くなってしまいました。ホームステイ先のご家族も、また帰ってきてね、と言ってくださったので、またカリフォルニアに行けるように今後も英語の勉強を頑張っていこうと思えました。日曜日の教会での礼拝や、週に 1 度のスーパーでのお買い物などにも連れて行ってくださり、アメリカ人の生活スタイルを少し感じる事ができたかな、と思います。

また、授業が終わった後にバスに乗ってショッピングモールまで行って買い物をしたり、休日にウーバーを使ってロサンゼルスの方まで足を伸ばしたりと、かなり積極的に行動できたかなと思います。英語を話すのが怖いという感覚は元からそんなになかったですし、以前もホームステイをしたことがあったのでそれほど心配はしていなかったのですが、思っていた以上に積極性を持った生活ができて成長を感じました。

もしまた機会があれば海外に旅行や短期留学をしてみたいと思います。

UCR 短期研修を終えて

理学部 物理学科

1720211 佐藤優花

① 大学での授業に関して

大学での授業は、お茶大生だけで受ける授業でした。ネイティブの先生が、分かりやすく教えてください、質問も気軽にできました。平日の午前中は、英語や科学についての講義があり、午後は週に2日ほどプレゼンテーション準備の時間がありました。プレゼンテーションは最終日に発表しました。算数に関する英単語や、初めて会う人をより知るための質問など、日本語だと簡単そうなことも、英語で勉強すると新鮮で、面白く、ためになりました。3週間と短い研修なので、話す力はあまりつきませんが、聞く力はついたと思います。大学の授業は、数学化学物理生物と色々な分野を英語で学びました。最終的なプレゼンテーションは生物か物理かを選択し、グループになって行いました。ひとグループ3人で、他の学科の人となるように組んだので、自分が分からない分野のことも知恵を出し合って、プレゼンテーションの準備を進めることができました。普段他の学科の人と一緒に勉強する機会がないので、貴重な経験になりました。



② 課外活動に関して

週末には、ディズニー・カリフォルニア・アドベンチャー・パークに行ったり、アウトレットでお買い物したり、ハリウッドにお出かけしたりしました。ディズニーでは、日本と違うところがたくさんありとても楽しめました。また、ハリウッドに行った日は、たまたまアカ



デミー賞の表彰式が行われる日であったために、レッドカーペットを近くで見ることができ、貴重な経験になりました。

また、平日の放課後には近くのモールまでバスで行ってお買い物をしたり、学校のすぐそばにあるユニバーシティビレッジでランチしたりしました。日本にもあるお店があったり、

ゲームセンターがあつたりと、みて回るだけでも面白かったです。UCR 側は、色々なことを提案してくれました。ダウンタウン近くで行われたアートウォークでは、色々な芸術を見ることができました。名前から、美術館か何かだと思っていましたが、建物のベランダから音楽を奏でる人がいたり、絵を展示していたり、アクセサリーやピンを売っていたりと興味深いものでした。ある議題について話し合うトークタイムでは、他の大学の日本人大学生や現地の大学生と交流できました。

③ 生活面に関して

基本的に車がないと生活ができない環境でした。ホストファミリーはほとんど毎日送り迎えしてくれました。忙しいときには、Uber を使って送ってくれました。学校の近くを通るバスが何台かあったので、放課後の移動手段はそのバスでした。

家の中も靴で生活することには、あまり違和感を感じませんでした。お風呂で湯船に浸かれず、シャワーだけで済まさないといけないことが、個人的には辛かったです。行った時は珍しく涼しい気候だったため、持って行った服では肌寒く、大学に売ってるパーカーを買いました。寒い時でも、日差しは強かったのでサングラスは必需品でした。

食事については、基本家にあるものは自由に食べて良いというスタンスでした。ホストファミリーが忙しかったので、朝食は、好きなシリアルや果物をよそって食べる、昼食は置いてあるパンや野菜、お肉を使って自分でサンドイッチを作っていくという形でした。夕食は、いつも家で食べました。ホストマザーやホストファザーが作ってくれることもありましたが、テイクアウトしてきたものを食べることもありました。どの料理もとても美味しかったので、日本食が恋しくなることはありませんでした。最終日には、日本から持ってきていた蕎麦とお味噌汁を振る舞いました。口に合うか不安でしたが、美味しいといって食べてくれました。

ホストファミリーは、私たちが英語が得意でないことを理解してくれているので、いろいろな単語で言い換えながら説明してくれたり、ゆっくり話してくれたりしました。いつでも優しく接してくれたので、こちらも伝えたいことは伝えやすい環境でした。今までで一番濃い3週間をリバーサイドで過ごすことができました。



研修参加者からのアドバイス（カリフォルニア大学リバーサイド校）

1. 出発前に気を付けたほうがいいこと

- 行き先の気温などを前もって調べて、ちょうどいい服装を選ぶ。
- 大切な書類のコピーを取っておくなど、もしもの時に備える。
- 現地の気温のチェック。前回行った人と期間が異なる場合もあるので、報告書を鵜呑みにせず自分で調べた方が良い。私の代は想定よりも寒く、苦労している人が多かった。
- 現地の気温の確認、携帯の設定、薬の準備など。
- 現地ではSMSが主要な連絡手段なので、SMSが使えるように携帯の環境を整えておいたほうが良い。また、もともと海外でも使えるような機能が付いている機種もあるようなので、自分の携帯についてよく調べておくとう良い。
- チップについて最初は戸惑ってしまうので、少し勉強してから行く。

2. 研修先の授業

- 積極的に英語を話す。
- 先生がわかりやすくゆっくりと話してくれたので、英語が得意でないからといって心配する必要はない。
- お茶大生のためのクラス。週に一度、現地の大学生と一緒にディスカッションの授業を受けることができた。また、日本が好きな人が集まった現地のサークルがあり、その集まりに顔を出すこともできた。
- 積極的に英語を話す。
- お茶大生のための授業。簡単な理系科目（数学、生物、物理、化学など）を中心に学ぶ。
- 日本人同士の英語の会話がが多い。
- 先生は質問形式で教えてくれるので授業に参加しやすい。
- プレゼンなどでパソコンを使う機会があるので、荷物が重くなってしまっても持って行くほうが良い。
- 授業中分からない単語は辞書で調べず、先生に質問するように言われたので、辞書は必要ない（宿題をするときにあれば便利かもしれないが、スマホで十分）。

3. ホームステイ

- 洗濯など、どこまで自分たちでやらなくてはいけないのかを把握して準備する。
- ホストファミリーと積極的に話す。
- 車での送り迎え。私のホストマザーは、私たちに友好的で、遊びに行くときにも車で送り迎えしてくれたが、周りの子がステイしている家（特に子供がいる家）では個人でウーバーやバスで移動していることが多かった。
- 一人部屋で快適に過ごした。おばあちゃんの一人暮らしで、とても仲良くなり、アメリカの文化など色々なことを学んだ。ホームステイで本当によかった。ホームステイ費を忘れずに。
- 向こうで変圧器を使わずにこちらのドライヤーなどを使うと本当に壊れるそうなので、海外対応機種のドライヤーは必須。
- 日本ほどしょっちゅう洗濯をしないので、7日分くらいは洋服を持って行ったほうが良い。また、どんな気温にも対応できるような服を持って行くと尚良い。

4. 食事について

- 量が多いことがあるので、たくさん食べられないときは無理せず伝える。
- ホストファミリーが常に気にかけて口に合うかどうかを聞いてくれたので特に心配する必要はない。
- 量が多い。多くのお店でテイクアウトが出来るので、食べきれない分は無理して食べず、テイクアウトするのが無難。
- 朝、昼、晩、すべて豪華な料理を作ってくれて本当においしかった。サラダなども毎日出てきて、日本食が恋しくなることはなかった。（一応、インスタントお味噌汁は持って行った。）たまに外食をしたりした。
- 全体的にボリュームがあるので、あまり欲張りすぎないようにする。
- 結局使わなかったが、食生活が大分変わるので、念のため胃腸薬を持って行っておいた方が安心だと思う。

5. 現地学生・地域住民との交流

- 現地の学生とゲームやディスカッションをして交流する場があるので、進んで英語を話すようにする。
- とにかく楽しく英語を学ぶ！
- 日本が好きな人達によるサークルに行くことができた。そこで、漫画やアニメ、文化などの話をした。
- 授業で少し交流できる。

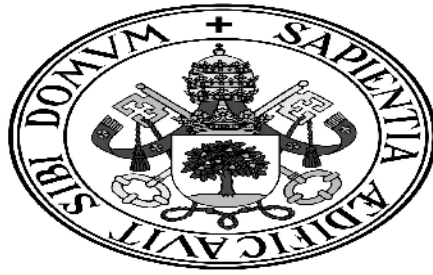
- 積極的に話してみる。

6. 経済面

- 多額の現金を持ち歩くのは危険なので、クレジットカードなどを使うといい。
- クレジットカードを使ったことが多かった。友達と一緒に色んなところをまわることになるはずなので、現金もある程度用意して割り勘に対応できるようにしておいたほうがいいと思った。
- ほとんどカードで支払い。友達とまとめて払ってお金のやりとりをするなら、少し現金は必要。持ちすぎに注意。
- あまり大きい紙幣は使おうとしてもお釣りがなかったりもするので、ある程度小さい単位で持って行った方が良い。クレジットカードを使うのもおすすめ。
- 治安が日本ほど良くないので、あまり大金を持ち歩かず、最低限の金額だけ持って、残りはホームステイ先に置いておく。

7. その他

- 現地の様子や新しい発見などがあれば、写真に収めておくと思い出にも残るし後の発表にも使える。
- カリフォルニアはのんびりした場所で穏やかに過ごすことができた。観光地もたくさんあるので、勉強だけでなく文化に触れることも多々あり、とてもよかった。
- とても充実した3週間で過ごしました！行くからには受け身になるのではなく、自分で充実させる留学にしてください。
- 日本のように、荷物だけ置いてテーブルなどから離れない。



Universidad de Valladolid



バリャドリッド大学（スペイン）

研修期間：2018年2月19日（月）～3月9日（金）

滞在：ホームステイ

参加費：約16万円

研修内容：スペイン語・スペイン文化短期研修

バリエドリッド大学短期研修

文教育学部 人文科学科

1710122 佐藤 春花

① 大学での授業に関して

私が通ったバリエドリッド大学 Miguel Delibes キャンパスはバリエドリッドの中心地から歩いて 20 分ほどのところに位置しています。周りはとても静かで良い環境だと思います。スペイン語の授業は、平日の 9:30-12:50 で、途中で 30 分ほどの休憩がありました。私はお茶大でスペイン語を受講していただけだったので、一番下のレベルの A1 のクラスに入りました。クラスはとても少人数で、私と一緒にきているお茶大の 2 人と、中国からの留学生 1 人(途中から 2 人になりました)でした。ただ、他のクラスは 10 人前後くらいだったので、私たちのクラスはとりわけ少人数だったと思います。先生はバリエドリッド出身の方で、ロンドンで 10 年ほど暮らしていたそうなので、私たちがスペイン語だけでは理解できないところは英語で補ってくれました。授業は教科書に基づいて進みました。文法はお茶大のスペイン語の授業でやった内容の復習のような感じでしたが、会話練習やリスニングもたくさんありました。何より先生が明るい方で授業中もとても楽しく、毎日授業に行くのをとても楽しみにしていました。また、週末にはサラマンカへの遠足や、中止になってしまったけれどオロボスへの遠足もありました。サラマンカへの遠足では、歴史ある街の中を歩きながら先生が簡単なスペイン語と英語で説明してくれました。



② スペインでの生活

私は大学付属の寮に住んでいました。寮は 2 人部屋でしたが、私の部屋は私 1 人でした。1 週間に 1 度掃除をしてくれるのと、近くにスーパーマーケットがあったので生活して行くのはそんなに大変ではありませんでした。また、管理人さんが 24 時間体制でいるので、困ったことがあれば助けてくれました。管理人さんはスペイン語しか話さないのが最初は戸惑いましたが、とても優しくサポートしていただきました。ただ、寮だとよくも悪くも 1 人で、家に帰ってスペイン語を話す機会が持てないので、せっかくだからホームステイでもよかったなと思いました。バリエドリッドは静かで穏やかな街という印象で、都会過ぎず田舎過ぎず、ちょうどいい大きさの街でした。夜に 1 人で

歩いている女性も見かけましたし、一度も危険な目には会いませんでした。とても暮らしやすい街だったと思います。ただ、ほとんどのお店が日曜日には閉まり、シエスタの時間にも閉まっていたことは、初めのうちはカルチャーショックでした。

③ 課外活動について

平日の午後や週末と一緒に研修に参加していた人と、スペインの様々な場所へ旅行しました。旅行を通し、地域によって風景や雰囲気が異なるスペインの奥深さを体験できました。印象に残っているのはトレドです。スペインのカトリックの総本山と言われる教会があり、世界遺産にも登録されている都市です。古くて荘厳な建物が多く、圧倒されました。バルセロナにも訪れましたが、バルセロナでは使われている言語が異なり、カタルーニャの旗が多く飾られていたのが印象的でした。カタルーニャの独立投票のニュースがあった後だったので、カタルーニャに対する誇りを垣間見た気がしました。また、友達とレストランやバルにも入りました。スペインは食べ物が美味しいと行く前から聞いていましたが、それは本当で、スペインで食べたもののほとんどが美味しかったです。スペイン語のコースの最終日にはクラスメイトとバルに行きました。その子と私たちが英語とスペイン語を両方使いながら話したのはとても良い経験になりました。今回スペインでは片言のスペイン語でも聞き取ろうとしてくれたり、列車の座席を案内してくれたりとても親切な人が多いと感じました。また、片言でも勉強したばかりの言語が通じる喜びがわかったので、これからもスペイン語の勉強を続けて行きたいと思いました。



充実した短期研修

理学部 化学科
1720309 坂本奈穂

① 大学での授業

月曜日、初めてクラスに行くと、クラス構成はお茶大生 3 人と中国人 1 人の計 4 人であった。想像していたより少ないと思ったが、少人数の方が 1 人 1 人しっかり学ぶことができると思ったので良いと思った。先生の Maria は、私たちが聞き取りやすいように話してくれた。文法などの演習は課題として出され、授業内ではゲームなどを通して会話の練習や意見を言う機会が多くあった。短いプレゼンテーションをする機会も何度もあった。私は意見を述べたり、人前に立ったりすることに苦手意識があったが、何度も機会を与えてもらって、少しずつ抵抗が薄れていったので良い経験ができたと思う。また、単語の意味が分からないとき、スペルが分からないときなどに尋ねるスペイン語の質問を最初に教えてもらい、すぐに、いつでも聞くようにと先生がおっしゃったので、質問を通して積極的、自発的に授業に参加することができた。スペイン語でスペイン語を学ぶということに最初は不安が大きかったが、先生がよく使うスペイン語を真似してみたり、知らない単語をすぐに調べたり、学べることがとても多かったと思う。意味を教えるときや、あまりにもスペイン語が理解できていないときは英語を使って説明してくださったので、英語を聞き取る力も少しだけ鍛えられた。この授業を通して、話す、読む、聞く、書く力をバランスよく伸ばすことができたと思う。

② 課外活動

授業は午前中のみで、平日の午後は博物館見学やスペイン語の映画を見るなどの大学が企画するアクティビティがあったが、先着順であったり、最低限のスペイン語レベルに達していなかったりしたので、アクティビティには参加できなかった。しかし、参加したかったができなかった博物館見学の博物館に、一緒に研修に行



った 2 人と研修期間の後半に行くことができた。学習して覚えた単語と英語からの推測と歴史の知識を組み合わせ、博物館の説明を 3 人で協力して読み進めていくことができた。読解に時間がかかり見学のスピードがあまりにも遅かったので、博物館の従業員から怪しまれているような視線を感じたが、スペイン語しかない博物館を少しずつスペイン語が分かるようになっていく実感ももちながら見学できたことは自信に

つなげることができた。ただ、頭をかなり働かせたので博物館から出たときは疲労感が凄まじかったことを強く覚えている。また、土曜日には遠足が計画されていて、1回は悪天で中止となったが、1回はサラマンカに行くことができた。ほかのクラスの人と一緒に、初めて交流する機会であった。バス旅は少々長かったが、自由時間などもあり先生のわかりやすいスペイン語での解説を聞きながら建物の見学ができて、とてもよかった。(写真はサラマンカにてクラスメイトと)

③ バリャドリッドでの生活

ホストファミリーは初日に駅まで出迎えてくださった。とても優しくしてくださり、私の都合にも柔軟に対応してくださった。しかし、私はスペイン語が話せず、家族は、日本語はもちろん英語も話さなかったのが、コミュニケーションを取るのはかなり苦労した。また家族が多かったのが、食事の会話は、家族だけでほぼ成り立っており、自分のスペイン語にも自信がなかったのが、なかなか話を切り出す勇気が持てなかった。私のゆっくりのスペイン語でもきちんと聞いてくださる優しい方たちだったので、少しずつ自分も話すように努力した。食事は、家庭内でも外食でも全ておいしかった。食事の時間が日本とは違って、昼食と夕食の時間が遅かったのが間食をすることが常であった。シエスタの時間なども教えてもらったが、私は結局1回もしないまま、昼間はほぼ毎日出歩いていた。町は静かで安全な町だったので気持ちよく生活ができた。町の店はシエスタの時間は閉まっていたし、日曜日は閉まっている店がほとんどで、日本は24時間営業もたくさんあるので全然違うなと思った。パンがとても安く、コーヒーもおいしかったので全く飽きずに町中のカフェに行って回った。外国人の友人があまりできなかったことだけ少し心残りであるが、つらくないスケジュールで大学に通って楽しい授業を受けて、昼からは自由な時間を安全で綺麗な町でおいしいものを食べながら過ごして、とても幸せだった。お茶大生3人でたくさん話してたくさん笑って過ごすことができ、充実したいい思い出ばかりの研修となった。



家庭での昼ご飯 Fideua

バリャドリッド大学春季短期研修を終えて

理学部 化学科

1720314 柘植亮子

① 大学での授業に関して

クラスは生徒4人に対して先生1人で構成され、密度の濃い授業が展開されました。生徒4人のうち3人はお茶大生で1人は中国出身の女子生徒でした。スペイン語初級のクラスだったため、授業はスペイン語の挨拶を学ぶことから始まりました。研修の1か月の間に教わった先生は1人だけでした。先生は、授業の間は基本的に全てスペイン語で指示を出しますが、どうしても私たちが理解できないときは英語で説明して下さることもありました。4人という少人数なので、わからないことがあればすぐに質問できる環境でした。1冊教科書を買って、その教科書に沿って授業は進められました。授業内ではスピーキング、リスニングに重点が置かれていましたが、もちろんわからない単語があれば授業内で先生に質問して解決し、文法も丁寧に解説してくださいました。宿題も毎日ありましたが、その日に勉強した文法事項の復習や、単語練習が主でした。次の日の発表に備えて下調べをし、簡単な発表原稿を準備していくこともありました。困ったことやわからないことがあればすぐに先生に質問できる環境にあつたので、スペイン語を話す力と聞く力を予想以上に付けることができたように感じました。はじめのうちは先生のスペイン語の指示すら理解が及びませんでした。1週間、2週間と日が経つにつれて、覚えた単語も増え、スムーズに授業が進むようになってきました。

② 課外活動に関して

大学の授業は9:30~12:50の3時間で、放課後と土日の時間は自由に使うことが出来ました。バリャドリッドは歴史が古く、美しく重要な建物も多くあるので、放課後には町の中を散策したり、博物館に行ったりしました。カフェも多くあるのでカフェに入ったり、また、バルに入ったりもして過ごしました。時には、遠出をして電車で1時間ほどにあるセゴビアという町に出かけて、世界遺産のローマ水道橋や、アルカサルなどを見学することもありました。また、ギターフラメンコの演奏を聴きに行くこともできました。週末には大学が開催する遠足に参加しました。クラスメイト以外の学生と交流が出来ました。土日の時間を使って、泊りがけでしか行けないようなグラナダ、バルセロナ、マドリッドにも足を運びました。自由に使うことのできる時間が多かったのですが、とても有意義に過ごすことが出来ました。

③ 生活面に関して

日本とスペインの生活リズムは大きく違いました。スペインでは食事の時間が昼食は2時から3時の間、夕食の時間が9時から10時の間で、私の日本での生活と比較すると大きな違いでした。私はホームステイだったので、昼食と夕食はホームステイ先の家族と一緒に食べました。朝食は好きな時間に起きて、用意していただいているものの中からパンやフルーツなどを頂きました。昼食がメインで夕食のほうが軽い印象でした。家族には、私と同世代の娘さんが2人いて、学校での出来事、音楽や国の文化、歴史などについて話すことが出来てとても楽しかったです。私のスペイン語が未熟なこともあり、英語を使うことも多かったですが、できるだけ授業で習ったスペイン語を使うことも意識しました。

④ 総括

留学、ホームステイとどちらも初めての事だったので不安もありましたが、実際に行ってみるとそんな不安も吹き飛び、充実した毎日を過ごすことが出来ました。「このことを伝えたい」という気持ちがあれば、言語の壁はあっても色々な方法を駆使して伝えることが出来るということ、身をもって体験することが出来ました。ホームステイを受け入れてくれた家族はとても暖かい方たちでしたし、学校でも同世代の人たちとの素敵な出会いがありました。スペインの文化や歴史、食べ物にたくさん触れることもできました。文化の違いを感じることも多々あり、それらはとても興味深く、印象に残っています。この留学は私にとってかけがえのない経験となりました。私にこの機会を与えて下さったすべての人々に、お礼を申し上げます。



ヴァリャドリッド大学短期研修

文教育学部人文科学科

1710122 佐藤 春花

① 大学での授業に関して

私が通ったヴァリャドリッド大学 Miguel Delibes キャンパスはヴァリャドリッドの中心地から歩いて 20 分ほどに位置するところにあります。周りはとても静かで良い環境だと思います。スペイン語の授業は平日の 9:30-12:50 で途中に 30 分ほどの休憩がありました。私はお茶大でスペイン語を受講していただけだったので一番下のレベルの A1 のクラスに入りました。クラスはとても少人数で私と一緒にきているお茶大の 2 人と中国からの留学生 1 人(途中から 2 人になりました)でした。ただ、他のクラスは 10 人前後くらいだったので私たちのクラスはとりわけ少人数だったと思います。先生はヴァリャドリッド出身の方で、ロンドンで 10 年ほど暮らしていたそうなので、私たちがスペイン語だけでは理解できないところは英語で補ってくれました。授業は教科書に基づいて進みました。文法はお茶大のスペイン語授業でやった復習のような内容でしたが、会話練習やリスニングもたくさんありました。何より先生が明るい方で授業中もとても楽しく毎日授業に行くのをとても楽しみにしていました。また、週末にはサラマンカへの遠足や、中止になってしまったけれどリオロボスへの遠足もありました。サラマンカへの遠足では歴史ある街の中を歩きながら先生が簡単なスペイン語と英語で説明してくれました。

② スペインでの生活

私は大学付属の寮に住んでいました。寮は 2 人部屋でしたが、私の部屋は私 1 人でした。1 週間に 1 度掃除してくれるのと、近くにスーパーマーケットがあったので生活して行くのはそんなに大変ではありませんでした。また、管理人さんが 24 時間体制でいるので



困ったことがあれば助けてくれました。管理人さんはスペイン語しか話さないの最初戸惑いでしたが、とても優しくサポートしていただきました。ただ、寮だとよくも悪くも 1 人で、家に帰ってスペイン語を話す機会が持てないのでせっかく行くのだからホームステイでもよかったなと思いました。ヴァリャドリッドは静かで穏やかな街という印象で、都会過ぎでもなく田舎過ぎでもなくちょうどいい大きさの街でした。夜に 1 人で歩いている女性も見かけましたし、1 度も危険な目には会いませんでした。とても暮らしやすい街だったと思います。ただ、ほとんどのお店が日

曜日には閉まり、シエスタの時間にも閉まっていたことが初めの方はカルチャーショックでした。

③ 課外活動について

平日の午後や週末と一緒に研修に参加していた人とスペインのいろいろなところに旅行しました。それによって地域によって風景や雰囲気異なるスペインの奥深さを体験できました。印象に残っているのはトレドです。スペインのカトリックの総本山と言われる教会があり、



世界遺産にも登録されている都市です。古くて荘厳な建物が多く、圧倒されました。バルセロナにも訪れましたが、バルセロナでは使われている言語が異なり、カタルーニャの旗が多く飾られていたのが印象的でした。カタルーニャの独立投票のニュースがあった後だったのでそのカタルーニャに対する誇りを垣間見た気がしました。また、友達とレストランやバルにも入りました。スペインは食べ物が美味しいと行く前から聞いていましたが、それは本当でスペインで食べたもののほとんどが美味しかったです。スペイン語のコース最終日にはクラスメイトとバルに行きました。その子と私たちが英語とスペイン語を両方使いながら話したのはとても良い経験になりました。今回スペインでは片言のスペイン語でも聞き取ろうとしてくれたり、列車の座席を案内してくれたりとても親切な人が多いと感じました。また、片言でも勉強したばかりの言語が通じる喜びがわかったのでこれからもスペイン語の勉強を続けて行きたいと思いました。



UNIVERSITY *of* OTAGO

TE WHARE WĀNANGA O OTĀGO



オタゴ大学（ニュージーランド）

研修期間：2018年2月10日（土）～3月26日（月）

滞在：ホームステイ

参加費：約68万円

研修内容：英語・インターンシップ研修

オタゴ大学短期語学研修を終えて

文教育学部 人間社会科学科

1610412 後藤里保

この研修期間は授業だけではなく様々な経験をし、充実した 6 週間を過ごすことができました。大きく 4 つの点に分けて述べていきます。

授業内容

はじめの 1 週間は Language Center の休みの時期だったので、お茶大から参加した 9 人のクラスで簡単な Speaking や Vocabulary の授業がありました。その後、クラス分けのテストをし、他の国や日本の他の大学から来た学生と混ざったクラスで、午前中は General English、午後は TOEIC/IELTS の授業を受けました。午前中の授業は、テキストに沿って行われましたが、先生がとても魅力的な授業をしてくれるおかげで、授業を受けているというよりも、ディスカッションや会話の中で、気づけば文法や Vocabulary も学べていました。ニュージーランドで話すときのコツや、受験英語だけでは知ることのできなかつた文法の意味なども教えてもらいました。クラスには、韓国・タイ・ドイツ・フランスなどの出身者がいて、ディスカッションやゲームを通して互いの文化を知ることができ、休み時間も英語で多くのことを話しながら過ごしていました。金曜日には簡単な復習テストがあり、その後クラスを超えての楽しいグループワークの時間がありました。クラスやクラスの外でも多くの友人ができることで、英語力向上のモチベーションにもつながりました。座学だけではなく、グループで動画を撮影したり、テントを張ったり、ロボットをプログラミングしたり、大学の講義を聴きに行ったりなど、形にとらわれない授業を多く取り入れてくれているのも印象的でした。



課外活動

Language Center 主催の Dunedin バスツアーや、Queenstown へのエクスカージョンに参加しました。観光名所を回ったり、壮大な景色を見たりと、盛りだくさんなツアーを企画してくれていました。その他に、オタゴ大学のダンスサークルに毎週水曜日参加させてもらっていました。

インターンシップ

インターンシップというよりもボランティアのようなものですが、様々なところで合計 32 時間行いました。市場のゴミ箱の前でゴミの分別のお願いをしたり、植物園でカモの餌を詰めて配ったり、オタゴ大学





の日本語のクラスでお手伝いをしたり、お店で洋服の整理をしたり、乗馬学校で馬の世話をしたり、Dunedin Curtain Bank というカーテンを寄付する団体でカーテンの紐をほどいたりしました。どのボランティアでも、ボランティアをしていくうちに初対面の人と英語で話すことに抵抗がなくなりました。ボランティアの仲介をしてくれたオタゴ大学の

の学生さんと様々なことを教えてもらったり楽しく話したりできたのも良い経験になりました。

生活

平日の放課後は、街の中心部で友人と買い物をしたりご飯を食べたり、Language Center に併設されているジムでバドミントンや卓球をしたりなどしてから、18 時頃帰宅していました。そこから 5 歳のホストブラザーと 2 歳のホストシスターと遊び、夕ご飯をいただき、また遊び、子どもたちが寝る頃から宿題を始めていました。休日はたいてい、ホストファミリーが出かけるのに一緒について行かせてもらっていました。ニュージーランドの盛大な誕生日パーティーに参加させてもらったり、ニュージーランドの子どもたちのラグビーの試合や自転車のレースを見に行ったりと、家族の一員として貴重な体験をたくさんさせてもらいました。子どもたちの英語もだんだんわかりコミュニケーションが取れるようになると、とても仲良くなり、3 週間目頃からずっと遊んでくれるようになりました。ホストマザーとファザーもとても優しく、相談に乗ってくれたり、ちょっとした話題で盛り上がってくれたりしたので、ホームステイでの生活はとても楽しく有意義なものになりました。グラントマザーのニュージーランドなまりの強い英語が聞き取れず、悲しくなった時もありましたが、ホストファミリーの親戚や知り合いと話す機会が多くあり、ニュージーランドのなまりにも慣れたからか、終わりの頃にはグラントマザーとも会話ができるようになっていました。



その他にも、ホストファミリーがビーチやペンギンツアーに連れて行ってくれたり、友人とチョコレート工場やビール工場に行ったり、Railway Trip に出かけたり、ラグビーの試合やバレエや映画を観に行ったりと、毎日スケジュールを詰め込んで、とても充実した生活を送ることができました。この留学を通して、自分で計画してそれを実行することや海外で生活することへの自信もつきました。

以上のように充実した生活を送ることができたのは、支えてくれた周りの人たちの存在のおかげです。この 6 週間で学んだことや感じたことを忘れずに、これからの生活や人生に活かしていきます。そして、もっと英語ができるようになりたいと思ったこの気持ちを忘れずに、精進していきたいです。

NZ での経験

生活科学部 食物栄養学科

1630128 細田優香

① 大学での授業に関して

授業は月曜から金曜日の平日に行われました。毎日 10 時から授業が開始され、午前中の授業は 12 時 50 分まで、昼休みを挟んで午後の授業は 14 時から始まりました。月曜と金曜は 14 時 50 分まで、火曜から木曜は 15 時 50 分まで授業がありました。

授業の内容については、午前中のクラスでは個人のレベル別のクラスに分かれてリーディングやリスニング、スピーキングやライティングを行いました。わたしのクラスは日本人のほかに中国、オマーン、タイ、アルゼンチン出身の人がいて、英語でコミュニケーションをとりながらペアワークなどを進めました。

午後のクラスは TOEIC と IELTS のクラスを選択することができ、わたしは TOEIC のクラスをとりました。TOEIC の授業では教科書を使ってリーディングやリスニングをしたり、TOEIC の模擬テストのようなものをやったりしました。

はじめの 3 週間ほどは日本人の短期留学生が多くクラスもたくさんありましたが、最後の 1~2 週間は日本人の人数が減り、クラスの数も減り、より多国籍の人で構成されたクラスで授業を受けることができました。

② 課外活動に関して

お茶大のプログラムでインターンシップをすることが必須となっていました。このインターンシップはニュージーランドに着いてからボランティアのサイトで応募して仕事を見つけなければならず、わたしは先方の都合が悪かったり連絡が来なかったりしたためスタートが遅れてしまいました。実際に行った仕事はファーマーズマーケットのゴミステーションでゴミの分別、ボタニカルガーデンで鴨のエサ詰め、カーテンバンクでカーテンの分解をすることなどでした。

オタゴ大学主催でクイーンズタウンへ 1 泊 2 日の旅行に行くプログラムがあり参加しました。1 日目はロープウェイに乗って山を登り、ルージュを体験しました。またハカのショーをみることもできました。2 日目は湖を船で移動し、移動先の牧場で羊の毛刈りをみました。自由時間も多のお土産を買ったりみんなでご飯を食べにレストランに行ったりしてとても充実した時間を過ごすことができました。

オタゴ大学の OUSA という施設ではスポーツなどのアクティビティやさまざまな体験教室が紹介されており、そこでわたしは地元のカフェでのコーヒーセミナーのようなものに参加しました。コーヒーショップでアルバイトをするわたしは現地のカフェに興味があり、実際にドリンクを作る体験もさせてもらえてとても良い経験となりました。



ランゲージセンターにはジムが併設しており体育館コートではバスケットボールやバドミントンができ、トレーニングルームにはランニングマシンやウエイトトレーニングマシンが完備されており、無料で気軽に体を動かすことができました。わたしは週に 2 回程度放課後にバドミントンをやっていました。日本人ではない生徒とも一緒に遊ぶことができ、英語でコミュニケーションをとれたことがとても良かったと思っています。

② 生活面に関して

わたしのホームステイ先はホストマザーが 1 人で、わたしのほかにクウェート出身の留学生の女の子と一緒にステイしていました。部屋の家具は問題なくそろっており、



初日に自分のものの配置を決めて散らかさないようにしました。食事については、朝はトースターでパンを焼いて食べ、お昼はサンドウィッチを作ってもらったり昨晚の残り物を持って行ったりしました。ランゲージセンターには電子レンジが数台完備されていたので冷凍のグラタンやラザニアをもたせてもらうこともありました。夜ご飯はチキンなどの肉が一

品と温野菜、マッシュポテトなどの組み合わせになることが多かったです。もう 1 人の留学生がベジタリアンであったため 3 人が別々のものを食べることも多々ありました。

通学はバスで 25 分程度でした。しかし、わたしはほぼ毎日ホストマザーの職場まで車に乗せていってもらっていました。職場から学校までは歩いて 25 分程度でしたが、バス代を節約するためにそうしていました。ホストマザーと会話する時間も増えて良かったと思っています。また、帰りも職場まで歩いて車に乗せてもらい、週に 1~2 回はスーパーマーケットと一緒に買い物に行きました。ホストマザーは左手が不自由であったため、日常生活に少しでも役に立てるように買い物は積極的に行くようにしていました。

③ その他問題が起きたとき

わたしは大学が委託した携帯会社から渡航先で使用できる携帯電話を借りていました。ホストマザーとはこの携帯のショートメールサービスを使って連絡を取っていたのですが留学開始 10 日後くらいからなぜか通信できなくなってしまいました。このときすぐに携帯会社に連絡するなど対応していれば良かったのですが、数日で改善するだろうと思い放っておきました。ですが携帯の通信状態は改善せず、夜ホストマザーに迎えにきてもらう約束をしていたときに連絡を取ることができず、危うく終バスを逃すということがありました。この後ようやく携帯会社に連絡を取り、メールで数回やりとりした後通信状態が改善されました。もっと早く対応をしていれば良かったです。なにか問題が起きたときはどうしたらよいか早めの判断をすることが大切だと痛感しました。

ニュージーランドでの素敵な出会い

理学部 化学科
1520323 山崎恵理

授業内容

普段は language center で、午前中 10 時~13 時で General English が、午後は 14 時~16 時で IELTS の授業がありました。クラスは最初にテストで分けられ、テキストに沿って授業が進められました。生徒どうしでの話し合いの時間が度々設けられ、自然と speaking の練習ができ、先生が feedback してくれました。テーマに合わせたビデオを観て discussion して writing をしたり、4 技能がバランスよく勉強できる環境でした。あるクラスでは自由にクラスメイトとゲームをしたり、一緒に DVD を観れる時間があり、日常英語で会話しながら楽しい時間を過ごせました。宿題ではかなりの量の reading が出され、毎週こなすうちに自然と reading の速読の能力が身につきました。インターナショナルなクラスで、様々な国からきた子と友達になり、話すうちに文化の違いなどの発見もありました。また聴講という形でオタゴ大学の正規の授業に幾つか行ってみました。English teaching、chemistry、biology、ASIA、Maori language の授業を聴講し、現地の授業を実際に体験でき、英語での表現の仕方や考え方の違った見方に触れ、面白かったです。先生が学生に意見を求める場面など、学生の意見を生で聴くことができ、とても刺激を受けました。

インターンシップ

ボランティアとして金曜日に 4 回小学校に行き、子供達と交流しました。実際に教育の現場に触れて、日本との違いを感じ、先生の生徒への接し方や教育スタイルに関心が湧きました。一度日本の文化を紹介する時間をいただき、パワポで紹介した後、折り紙で手裏剣の作り方を教えました。子供達が熱心に聞いて日本に興味を持ってくれたのが嬉しかったです。また現地の学生の日本語 lecture にアシスタントとして出席し、日本語を学ぶお手伝いをしました。日本語のあれこれを英語で聞かれて答えたり、日本の習慣を話したりしました。みんな日本語の上達が早く、驚きました。Farmer's market でのゴミの分別呼びかけ活動や Botanical Garden でのお手伝いも行いました。

課外活動

現地の学生と同様に大学の施設などが利用で



き、学生料金でいろいろな activity を楽しみました。いわゆるサークルのような形で行われるアルティメットに参加したり、空手の稽古に週2で参加させてもらったり、Hip Hop の lesson に毎週行ったり、クリスチャンの団体のミーティングにお邪魔させてもらったりしました。この activity を通して現地の学生と話したり交流する機会ができ、オスマのカフェなど教えてもらいました。自分で色々を探して参加することができたので人の和を広げることができたと思います。滞在中の 6 週間の中にラグビーの試合が3回あったのでパスを買って3回応援に行きました。Zooと呼ばれる area のパスで、現地の学生たちが大盛り上がりしている中一緒に応援し、現地の学生の雰囲気にとっぷりと浸かってきました。ノリがよく、一緒に写真をとって盛り上がったのがいい思い出です。ある週末には Language Center 主催の 1泊2日の Queens town の trip に行きました。ゴンドラに乗って絶景を眺めたり、Maori のショーを見たり、ship に乗ったり、かわいい街と自然を満喫しました。週末には自分たちで Dunedin の観光をしました。

Railway に乗って映画に出てくるような溪谷を眺め、ビール工場やチョコレート工場の見学に行き、バレエのコンサートや映画を観たり、博物館や歴史的な建物を訪れ、綺麗なビーチを歩いたり、日々充実していました。

ホームステイ

ホストファミリーはとても温かい家庭で、気持ちよく過ごせました。朝はホストマザーの車で city の方に出て、私は学校へ、マザーは職場へという形で送ってもらえました。帰りは基本バスを使用しました。帰りが遅くなる時は夜ご飯を取って置いてもらったり、夜遅い時は車で迎えに来てくれ、よくサポートしてくれました。私のファミリーは kiwi food だけでなく、いろいろな料理を作る家庭で、いつも夜ご飯が楽しみでした。夜ご飯の後はソファでファミリーとくつろぎながらその日の出来事などおしゃべりしながらゆっくり過ごしていました。ある週末にホストファミリーが Oamaru と Moeraki にドライブしながら連れて行ってくれました。とても有名なビーチで一緒にたくさん写真を撮りました。ある夜にペンギンツアーに行き、満点の星空の下、ビーチで寝ているアシカと、海から岸に上がってくるペンギンを実際に観ることができ、ニュージーランドの大自然を肌で感じました。

のどかな景色に囲まれた Dunedin での 6 週間はあっという間でした。自分から情報を集め、積極的に参加してみることで、大きな発見と出会いがありました。とても楽しく、充実した生活で、めぐり会えた人々に会いにまた Dunedin に行きたいです。



ニュージーランド研修 報告書

文教育学部 言語文化学科

1710207 池田百合香

1. 大学での授業に関して

University of Otago Language Centre にて月曜日から金曜日の週 5 日、10:00-16:00 (但し、月曜日と金曜日は 10:00-15:00) 午前中は General English、午後は IELTS のクラスを受講しました。授業を受けるクラスは、授業が始まる前の週にクラス分けテストが実施され、その結果により決まります。午後のクラスはこのクラス分けのテストの際に



IELTS もしくは TOEIC どちらかを自分で選択することができます。Language Centre には世界の様々な場所から、世代を問わず人が集まっており、私のクラスには、ブラジル、タイ、中国、アルゼンチン、オマーン出身の人がいました。また、Language Centre での授業が開始して数週間が経過した頃にはオタゴ大学の授業が始まり、大学で開講されている自分の興味があるレクチャーに参加することができました。私は、英語教育、ジェンダー、アジア文化、フランス語などのレクチャーに参加しました。授業中、先生が生徒に意見を求めることも多く、ディスカッションはほとんどの授業でありました。自分の意見を共有し、相手の意見を聞くことができることはとても良い経験だと思います。日本の大学とは異なりオタゴ大学での授業、Language Centre での授業は共に1コマは 50 分です。

2. 課外活動に関して

・インターンシップ

地元の小学校に毎週金曜日、基本的には 9:00-15:00 の間行っていました。その他には、オタゴ大学で行われている日本語クラスのアシスタント、ニュージーランドで最初に設立された Botanic Garden である Dunedin Botanic Garden での活



動など合計 34 時間行いました。小学校では、毎年上級生が学校から車で2時間ほど離れた場所で行われるキャンプが組まれており、私も一緒に参加してきました。ニュージーランドならではの自然を活かした活動が多く組まれており、新鮮な充実した2日間でした。

・その他

Language Centre の隣には Forsyth Barr Stadium というスタジアムがあり、そこで地元チーム HIGHLANDERS と BLUES のラグビーの開幕戦を、ラグビー観戦が趣味のホストファザーと共に観ました。このチームには、オールブラックスで活躍する選手も在籍しており試合の応援は皆、熱が入っていました。

普段学校が終わった後は同じく Language Centre の隣にある体育館でバドミントンなどのスポーツをして体を動かすことや、友人と街に出かけるなどして過ごしていました。また、週 2 日で流派は異なるのですが昔、空手を習っていたこともありオタゴ大学の空手チームの練習にも参加していました。



3. 生活面に関して

私のホームステイ先は学校から、バスで 15 分ほどの所にありました。新聞記者のファ



ザーと、雑誌編集者のマザー、9 歳と 7 歳の子どもがいる 4 人の素敵なファミリーでした。週末はホストファミリーと共に過ごす(一緒に街に行く、ファミリーの親戚のパーティーに参加する、一緒に映画を観る等)ことや、課外活動や授業のクラスを通じて出会った現地の人と一緒に街に出かける、友人のフラットで一緒にご飯を作ることなど、過ごし方は週により異なりま

した。第 2 週目の週末には、Queenstown という Dunedin から 6 時間ほど離れた街に 1 泊 2 日で旅行にも出かけました。ゴンドラから素敵な景色を眺めることや、美味しいものを食べることができたこと、Haka のショーを鑑賞することができたこと等、大変良い思い出です。



オタゴ大学短期研修を終えて

文教育学部 言語文化学科 英語圏言語文化コース

1510239 武井沙樹

1 大学での授業に関して

まず、オリエンテーションとクラス分けテストがありました。私のクラスは、前半は東大生が多く、後半で大半の日本人学生が帰国し、新たな外国人留学生が加わり、より国際色豊かなクラスになった印象でした。

午前中は一般英語の授業でした。題材は社会問題や学術的なものでした。先生は明るく気さくで、楽しく授業を受けることができました。この授業は、近くの人とペアやグループになって話し合うことが多かったです。私のクラスは、宿題が多めでした。



午後は TOEIC または IELTS の選択授業だったので、私は IELTS の対策授業を選びました。TOEIC と比較して、英語の 4 技能をバランス良く学べると思ったからです。まず、問題の形式や解き方のコツを学び、それを実践するスタイルだったので、IELTS 未受験の私でも問題なく授業についていけました。

先生からの問題やペア・グループでの話し合い等で、積極的に発言することを心がけました。初めは、先生の話を守るように発言する海外学生もいて、発言のタイミングを見失うこともありました。しかし、屈せず、自分の考えたことを述べたり、質問をしました。多少の文法ミスは気にせず、この留学の機会を最大限に生かし、英語力を向上できるように努めました。

自習室兼 PC 室にたくさん本や DVD、教材があり、授業内の自習の時間や空き時間などに自由に利用できました。貸出しもしてくれます。

オタゴ大学での講義聴講では、大学入学前の生徒用の生物の授業を、毎週聴講しました。また、1 回完結のオープンセミナーにも数回参加しました。

2 課外活動に関して

○インターンシップ

お茶大生 4 人で小学校に行き授業の補助などをしました。日本についての授業をする機会もあり、私は簡単な日本語講座をやりました。1 学年 20~30 人程度と、全校生徒の人数が少なく、日本の小学校とは違う、自由な雰囲気には驚きました。運動神経が

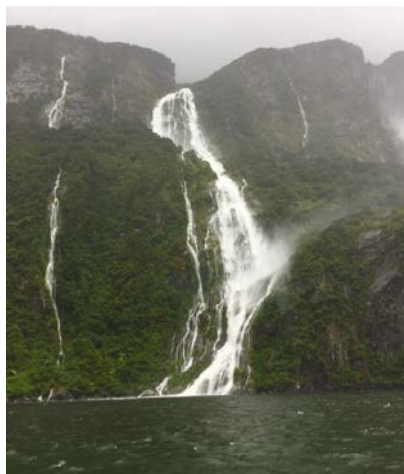
良く、活発な生徒が多かったです。子どもたちとのふれ合いは、とても楽しいものでした。

また、駅の近くで開かれる土曜市で、ゴミの分別を呼びかけるインターンシップもやりました。

○サークル

私は、大学の合唱サークルにアポをとり、練習に参加させてもらいました。年度始まりだったので、入りやすかったです。大学生だけでなく、院生、一般の社会人、年配の方まで、幅広い世代のメンバーと交流することができました。

○語学学校主催の1泊2日の旅行で、ミルフォードサウンドへ行き、大自然を満喫しました。



ミルフォードサウンドにて

3 生活面に関して

ホームステイ先は、ホストマザーと私の2人の生活でした。食事は、朝はシリアルかトースト、昼は自分で作ったサンドイッチか、晩ご飯の残りを利用したお弁当、夜はマザーが作ってくれたご飯を食べました。野菜が多めで、ご飯（タイ米系）もよく出てきました。ニュージーランドでは果物が豊富で、りんご、桃、梨、洋梨など、毎食時に果物を必ず1つ持って行きました。洗濯は、週2回、自分で洗濯機を回して干しました。お風呂は、シャワーを5分くらいで済ませました。マザーはお喋りが好きで、時間ができるとよく話をしてくれました。近くのビーチによく連れていってくれました。マザーの子どもたち家族との交流もありました。

主な移動手段はバスです。バスの乗り方等のシステムが、日本と異なっており、慣れるまで戸惑いました。日中も本数が少ない印象でしたが、夜の便はさらに少なかったです。

博物館、植物園、美術館など、文化に身近に触れられ、しかも無料の所が多かったです。

街中にカフェが多く、朝早くから15時頃までの営業がほとんどでした。

ニュージーランドで多国籍の人々と英語を通してふれ合うことができ、とても有意義な時を過ごすことができました。と同時に、英語のボキャブラリーの幅の必要性を痛感し、さらに語学力を高めたいと思いました。

この留学に際し、このような有意義な時間を与えていただいた皆様に感謝いたします。ありがとうございました。

オタゴ大学ランゲージセンターでの研修に参加して

理学部 物理学科
1620201 天谷鈴華

* 大学 (UOLCFY) での授業

2/10 に出国して、2/12 から大学で活動をしたが、最初の週はお茶生だけで、インターンシップについての説明をうけるなど、オリエンテーションが中心であった。その週にテストを受け、翌週からそれぞれのレベル別で General English の授業を朝 10 時から 50 分×3 コマ受け、午後は TOEIC/IELTS を選択して月金は 1 コマ、火水木は 2 コマ受けた。(初めの 1 ヶ月は、東大や上智などの生徒が多く、クラスに日本人がたくさんいて驚いたが、最後の 6 週目はお茶生や長期滞在の日本人しかないようになる。)

General English の授業では、文法や単語を英語で習うという貴重な体験をした。受験英語とは違う、細かい使い方やイメージを習い、実際に使ってみるアクティビティをたくさんした。スピーキングになると外国人の生徒たちは流暢に話し、意見を述べたり、議論をしたりして、終始圧倒されっぱなしであった。日本人には積極的に拙くても話し続ける努力が必要とされる活動であった。リスニングは PC を使ってやるものや、小テストのような形でやるものなどがあり、たくさん英語を注意して聞く機会が与えられた。毎週 vocabulary と grammar のテストがあった。また、それぞれのスキルに対してアセスメントがあり、それが成績評価において大切だったようだ。最終週にお茶生だけ、mid-term exam を受けた。

TOEIC の授業では、大部分は General English をし、数時間 TOEIC の問題を解くというような授業形式であった。ほとんど日本人でクラスは構成されていた。

* 課外活動 (放課後・インターンシップ)

ランゲージセンターに隣接している Unipol という体育館ではジム、ヨガ、バドミントン、卓球、バスケ、ビリヤードなどができ、ID カードを提示すれば無料で利用できた。(シャトルだけは 5 ドルした) 私はサークルでバドミントンをしているので、東大の他サークルの先輩方や韓国人の友達と放課後にバドミントンをした。英語でバドミントンをするなど思ってもいなかった経験ができ、また、バドミントンを通して友達も増えて、とても有意義であった。

週末や放課後に、ビール工場やチョコレート工場、友達の働いていた韓国料理屋など、ダニーデン観光をたくさんした。オクタゴンや大学から徒歩圏内にいろいろ

あり、最高の立地であった。また、スタジアムで HIGHLANDERS のラグビーの試合を観戦した。ZOO チケットでお祭り騒ぎのなか観戦できて、楽しかった。

インターンでは小学校とマーケットに行った。海外の小学校を実際に訪れ、一緒



に活動をしたり、私たちが日本を紹介したり、さまざまな経験をした。生徒たちは素直で優しくて、活動しやすく、ありがたかった。マーケットではゴミの分別を呼びかけた。合計で30時間以上インターンをしなればならず、それを現地で知らされて、とても焦った。言葉の壁がある国において自力で探したり、団体に登録したりと、サポートをして下さる先生と相談しながら30時間を6週間で授業を休んだりしながら確保するのがとても大変であった。

*生活面

まずは反省点から言うと、とにかく寒かった。夏だと思って荷造りをしたので後悔した。6度～23度に対応できる服装を用意する必要があった。雨も多く、スニーカーが大活躍で、サンダルを履くことはなかった。そして、物価が高いことにびっくりした。飲み物が日本の2倍以上の値段で売られていた。そして、カードはJCB以外を持っていくべきで、現金も交通費をチャージするのに必要なので、多少は持っていくべきだった。

ホームステイ先ではご飯も美味しく、いつも明るく話しかけて気遣ってくれた。シスターたちと映画を観たり、犬の散歩やビーチに出かけたり、楽しい時間を過ごした。なにか困ったことや疑問があったら、まずは友達に相談してホストファミリーに聞いてみるようにしていた。必ず力になってくれた。素晴らしいホストファミリーに恵まれたと思う。



オタゴ大学短期研修を終えて

理学部 情報科学科

1620535 松本奈紗

私は今回 6 週間のオタゴ大学の短期研修に参加しました。このプログラムでは、語学センターでの英語の授業やオタゴ大学の正規授業の聴講、課外活動、インターンシップ、ホームステイでの生活を体験しました。

授業内容



最初の一週間はオタ大生のみで授業を受け、リスニングやスピーキングを中心に勉強しました。次の週からはレベル別のクラスに分かれ、午前は General English のクラス、午後は TOEIC または IELTS クラスがあり、私は TOEIC クラスを選択しました。General English のクラスではテキストを使って単語や文法を学び、ペアワークで Discussion をすることが多く、スピーキングを中心に総合的な英語力の向上につながったと思います。クラスの人数は 18 人前後で、日本人、韓国人、タイ人、ドイツ人、フランス人、クウェート人など、様々な国籍の人と交流することができました。TOEIC クラスはほとんどが日本人で、TOEIC の問題集を解いたり、General English に似たようなテキストを使って Discussion をしたりすることもありました。先生はとても親切で、後述するインターンシップで授業を欠席する際も柔軟に対応してくれました。また、自分の専攻である情報科学に関するオタゴ大学の正規の講義を聴講し、オタゴ大学の講義の雰囲気を楽しむことができました。

課外活動

3 月の週末に語学センター主催の 1 泊 2 日のクイーンズタウンツアーに参加しました。山頂から見渡せる街の眺めはとても綺麗で印象に残っています。マオリ族の民族舞踊であるハカを見学したり、クルーズ船に乗って牧場に行ったりと、様々な体験をすることができました。ツアー以外にも週末にラグビー観戦、ラーナック城、ペンギンツアー、チョコレート工場見学、ビール工場見学、オルベストン邸見学など、自分たちで計画を立てて様々な場所へ観光に出かけました。また、Japanese Chat Time というオタゴ大学に在学する日本人や日本語を学んでいる外国人が日本語で交流する会にも参加し、様々



な方と知り合うことができました。

インターンシップ

このプログラムではインターンの単位取得のために最低でも30時間のインターンが必要とされており、私は Otago Farmers Market、地域の小学校、オタゴ大学の日本語の講義の3つのインターンに参加しました。Otago Farmers Market では毎週土曜日に2時間ゴミ箱の前に立ち、ゴミの分別の誘導をしつつ、Market に訪れる街の人と会話を行いました。小学校のインターンでは、毎週金曜日の6時間、子どもたちと一緒に過ごしました。また、小学校でのインターン3日目に日本の文化について紹介し、一緒に折り紙教室を開きました。子どもたちはみなフレンドリーで、とても楽しい時間を過ごすことができました。オタゴ大学の日本語の講義では毎週水曜日に1時間、日本語を学んでいる学生の質問に答えるなどのサポートをしました。渡航前に教育関係興味があることを伝えてあったため、小学校でのインターンに参加することができましたが、他の仕事は自分で探す必要があり、語学センターの先生や Unicrew という現地のボランティア活動を紹介してくれる施設の方に手伝ってもらいながら、現地で仕事を見つけることができました。

ホームステイ先での生活

私のホームステイ先にはファザー、マザー、8歳のブラザーの3人家族とドイツからの留学生がいました。ファザーとマザーは共働きで、夕食や夜に会話をしたり、一緒にテレビを見たりして過ごしました。毎週金曜日は家で作ったピザを食べ、お客さんも交えたホームパーティーが開かれ、様々な方と交流することができました。最終の週末にホストマザーが海に連れていってくれて、ブラザーや留学生と一緒に遊んだ後に、近くのお店でおいしいフィッシュアンドチップスを食べたことはとてもいい思い出です。ホームステイでは普段の学校の授業では学ぶことがあまりない、日常的な英会話に接することができ、とても良い経験になりました。ホストファミリーと生活する中で、以前よりも英語を聞き取れるようになり、会話の受け答えができるようになったと感じました。暖かく迎え入れてくれたホストファミリーに本当に感謝しています。

終わりに

この留学で様々な人と英語で会話をする環境に身を置き、以前よりも英語でコミュニケーションができるようになり、異文化への関心や英語学習へのモチベーションが上がりました。この経験を糧にして、これからも英語学習に励み、様々なことに挑戦していきたいと思います。

オタゴ大学研修

文教育学部 言語文化学科

1610231 五味真里奈

① 大学での授業に関して

最初にクラス分けテストがあり、5つのレベルに分けられる。授業は午前中に **General English** が3コマ、午後に **TOEIC** か **IELTS** にクラスが1コマか2コマある。私は **TOEIC** のクラスを選択したが、**TOEIC** の勉強をするのは週に1回ほどであった。それ以外は教科書を使って **speaking** や **listening** の練習をしていた。**TOEIC** クラスは日本人しかいないため、日本の大学の授業とさほど変わらなかった。一方で **General English** は各国から学生が来ており、自由に話せる活発なスタイルであった。授業で扱う文法や単語を練習しつつ、各国の学生や先生とラフに英語で話せる授業はとても楽しかった。ただし、クラスや先生による差がとても大きいので、どのような授業展開になるか、どのような雰囲気になるかは運次第といったところ。私の場合、最初の4週間はあまり活発なクラスではなく、クラスが変わった後半2週間はとて明るく、常に誰かが話し、笑っているクラスになった。また、最初の4週間はクラスの8割ほどが日本人であったが、後半2週間は日本人の割合が2,3割にまで減った。日本人以外には韓国、タイ、中国、ドイツ、フランス、クウェートなど本当に様々であり、彼らと話すことはとても楽しく、またとても良い勉強になった。



② インターンシップに関して

例年是一个の場所で30時間インターンをするプログラムだったようだが、今年から現地に行った後に自分でボランティア先を探す形になった。6週間で30時間というのは決まっていたが、それ以外は自由であり、自分の都合の良い時間に、自分の興味のある場所で、好きな時間だけボランティア活動をする事ができた。しかし、自由な分、ネットやキャリアサポートセンターなどを活用して自分でボランティア先を見つけなくてはならず、またメールなどのやりとりや、スケジュール管理などもすべて自分で行わなければならなかった(インターン活動を支援して下さる担当の先生や、ボランティア先をたくさん紹介して下さる現地学生さんはいるが)。私は様々な場所でニュージーランドの社会の様子を経験したかったため、ボランティアサイトとキャリアサポートセンターのシステムを活用して、多くのボランティア活動に申し込み、実際に様々な場所で活動させていただいた。具体的には、**Farmers Market**(土曜日にある朝市のようなもの)、**Curtain Bank**(カ

ーテンの寄付を行う団体)、Botanic Garden(植物園)、St Vincent(食べ物、衣服、小物等の寄付を行う団体)、日本語クラスアシスタント、DRDA(乗馬クラブ)でボランティア活動をした。英語を使ってボランティア先を見つけることは大変だった分、得るものが多く、また様々な場所でのボランティアを通してたくさんの貴重な経験をすることができた。

③ 生活面について

私のホームステイ先はホストマザーと12歳の男の子、11歳の女の子の家庭であった。ホストマザーは明るく、フレンドリーでとても話しやすい方だった。料理をしている間にキッチンで、晩御飯の席で、夕飯後にソファでお茶を飲みながら…など、毎日冗談を交えつつ楽しく話していたのが懐かしい。今回の研修を通して英語で話すことの抵抗を大きく減らせたのは、マザーの力が大きかったと思っている。子供たちもとても可愛く、優しく、家族3人とても暖かい家庭だった。この素敵な家庭での6週間はかけがえのない時間である。



④ 学校以外での活動

自分から動けば多くのことに挑戦できる環境であった。私は毎週火曜日にイラン人の先生のもとで行われる中東料理教室に通い、毎週水曜日にはHip-Hopクラスに参加していた。他にもラグビーの観戦、自然を満喫する観光列車、大学主催のクイーンズタウンツアー、ペンギン見学ツアー、ビール工場見学など特に週末は盛りだくさんであった。また、ビーチで行われるホーストレッキングに申し込み、プライベートレッスンを組んでもらうこともできた。



⑤ 終わりに

正直に言うと、当初私はアメリカの短期研修に参加するつもりであった。しかし、事情がありニュージーランドのプログラムに変更になったのだが、終わった今このプログラムに参加できて本当に良かったと思っている。ここでしかできなかったことがたくさんあり、ここでしか学べないことが山ほどあった。留学を後押ししてくださった方、支えてくださった方、本当にありがとうございました。

研修参加者からのアドバイス（オタゴ大学）

1. 出発前に気を付けたほうが良いこと

- 服装はインスタなどで検索してリアルタイムの情報を得るべき。
- 研修に参加することが確定してから何回も行われる事前研修会を通じて、異文化理解や国際協力について学ぶことのできる時間があるため、その時間は大切にしたい方が良いでしょう。また、課外活動として何を行いたいのか、インターンシップでやりたいことや分野があれば予め考えておくことをお勧めします。荷物に関しては、自分で普段使っている日用品や常備薬があれば必ず持って行くべきであると思います。当たり前ではありますが、日本で売っているものがニュージーランドでも売っているとは限らないので念頭に置かれた方が良いでしょう。
- お茶大の期末課題やレポートは、行く前になるべく終わらせましょう。
- Facebook と messenger のアプリを入れていない人は、インストールしたほうが良いと思います。Facebook で、現地で出会った人たちと帰国後も交流ができます。messenger は現地でメールの代わりに使い、ホストファミリーと連絡がとれます。
- 向こうの季節は夏の終わりから秋ですが、日本ほど暑くありませんでした。薄い長袖や上着など、重ね着で調節のきく服を用意したほうが良いと思います。
- ダニーデンは坂が多いので、歩きやすいスニーカーが必須です。
- 雨が多く、また、洗濯の頻度が家庭によって違うので、服・肌着類は 1 週間分用意しましょう。
- 現地の気候を調べておくといいと思います。ダニーデンは気候の変化が激しく、気温が 20 度を超えることもあれば、10 度を下回ることもありました。また、事前にホストファミリーに洗濯の頻度などを聞いておくと、持っていく服の量を把握できていいかもしれません。
- ホストファミリーと連絡を取り、日本らしいお土産を持って行くと会話のきっかけになるし、とても喜んでもらえた。
- 現地の気温と服装のチェック。半袖ばかり持って行ってしまって寒いことが多かったので長袖を多く持って行くべき。

2. 研修先の授業

- 英語だけでされるので、よく集中して聞かなくては、聞き逃してしまい自分も困るし、周囲も困る。

- 教科書が重くて大変かもしれない。
- University of Otago Language Centreにて月曜日から金曜日の週5日、10:00-16:00（但し、月曜日と金曜日は 10:00-15:00）午前中は General English、午後は IELTS のクラスを受講しました。授業を受けるクラスは、授業が始まる前の週にクラス分けテストが実施され、その結果により決まります。午後のクラスはこのクラス分けのテストの際に IELTS もしくは TOEIC どちらかを自分で選択することができます。Language Centre には世界の様々な場所から、世代を問わず人が集まっており、私のクラスには、ブラジル、タイ、中国、アルゼンチン、オマーン出身の人がいました。また、Language Centre での授業が開始して数週間が経過した頃にはオタゴ大学の授業が始まり、大学で開講されている自分の興味があるレクチャーに参加することができました。私は、英語教育、ジェンダー、アジア文化、マオリ文化、フランス語などのレクチャーに参加しました。日本の大学とは異なりオタゴ大学での授業、Language Centre での授業は共に1コマは50分です。
- どの授業でも、積極的に発言することを心がけました。
- 少しでも分からないことがあれば、先生方やスタッフの方々に何でも聞いてみるのが良いと思います。親身になって答えてくださいます。
- クラスによって、宿題の量が多少異なります。ためずに、コツコツやりましょう。
- 午後は、IELTS または TOEIC の対策授業があります。私は IELTS の授業をとりましたが、先生が問題形式や解き方を授業内で説明してくださるので、IELTS 未受験でも大丈夫でした。純粹にやりたいほうを選ぶのが良いと思います。
- 授業はテキストを使いながらディスカッションやグループワークをすることが多く、毎週金曜日にはその週で学んだ内容についての復習テストがありました。週の始めに出される課題の締め切りも金曜日だったので平日は忙しかったのですが、休日はゆっくり過ごせました。
- 午前中は General English、午後は IELTS の授業を受けた。生徒同士で意見を言い合ったりとスピーキングの機会が多く設けられていて自然と英語を使うことができた。
- 他の国から来ている学生がとても積極的に発言するのに刺激を受けて、自分も積極的に発言するように心掛けられた。
- 日本では習わないような微妙な言い回しの違いなども学ぶことができてよかった。

- 自習の時間が授業の一部として設けられており、クラスメートと一緒に映画を見たり、UNO をしたりと日常会話の英語を自然と使えたり、クラスメートとの仲を深められて楽しかった。

3. ホームステイ

- ホームステイは 1 人一部屋与えられるので安心できる。インターネット接続料が必要な家もあるので、30~50 ドルはその分として持っていくべき。バスの場合も歩きの場合もあるので、多めに紙幣を持っていくべき。(バスはゴーカードにチャージ式)。
- 私のホームステイ先は学校から、バスで 15 分ほどの所にありました。新聞記者のファザーと、雑誌編集者のマザー、9 歳と 7 歳の子どもがいる 4 人の素敵なファミリーでした。出発前にホストファミリーの情報を頂いていたため、事前に何度かメールのやり取りも行いました。学校が終わってからの時間や週末にホストファミリーと共に過ごすことも多く、一緒に博物館に出かける、街に行く、ファミリーの親戚のパーティーに参加する、一緒に映画鑑賞をする等をして時間を楽しみました。また、通っていた Language Centre の隣には Forsyth Barr Stadium というスタジアムがあり、そこで地元チーム HIGHLANDERS と BLUES のラグビーの開幕戦を、ラグビー観戦が趣味のホストファザーと共に観に行ったり、子ども達が参加しているフットサルチームの試合の応援に行くなどスポーツも共に楽しみました
- 家は基本土足でしたが、土足とスリッパ・裸足との境界が薄い印象を受けました。日本からスリッパを持参し、足を解放できました。
- なるべくリビングで過ごすようにし、ホストファミリーと沢山会話するよう心がけました。
- 私のホームステイ先では、洗濯は週に一回で休日にするが多かったです。食事は朝食はシリアル、昼食は自分で作ったサンドイッチとフルーツ、夕食はホストファミリーが作ってくれました。
- 何人も受け入れた経験のある家庭で、受け入れ慣れていたので何を教えなきゃいけないかをしっかり把握してきちんと前もって教えてくれたのですんなりと馴染むことができました。
- 本当の家族のように接してくれ、とても温かい家庭でくつろいで生活できた。
- 日本からのお土産として梅酒を持って行ったらとても喜んで、一緒に楽しく飲んでくれた。

4. 食事について

- 物価が高いので、外食は少なくなるかもしれないが、多くの多国籍レストランがあって巡るのは楽しい。
- 日本人の口に合う食事が多い。
- 家庭により様々であると思いますが、私のホームステイ先では朝食はイングリッシュブレックファースト、朝食はサンドイッチと果物、チップスなど、夕食はパスタやチキン、ラザニアなどのメニューが多かったです。毎日料理をするホストファミリーであったこともあり、基本的に料理に関して問題はありませんでした。滞在中、ホストファミリーに肉じゃがを振る舞った日があったのですが、とても喜んで食べてくれました。Dunedinのメインストリートにも日本食レストランがたくさん建ち並んでいるのですが、現地の人とお話しをする中でも日本食が好きという声はよく聞きました。もし時間に余裕があれば、作ってみるのも良いかもしれません。
- 水道水がそのまま飲めるのが有難かったです。日本から水筒を持参しました。
- 個人の好みや家庭にもよりますが、食事は馴染みやすいと感じました。
- ホストファミリーに、アレルギーや苦手なもの、お酒は飲めない等、事前に伝えておくと、配慮してくれると思います。
- 大学の近くにカフェやレストランがたくさんあり、様々な料理を食べることができました。語学学校の学生証を発行する場所でもらえる「RAD1」というカードを提示すると、学生割引になるお店もありました。
- 朝はトースト2枚と紅茶、たまにフルーツと少し少なめ。ニュージーランドではモーニングティーの時間にちょっとスナックをつまんだりするので、朝は軽めが当たり前。学校にクッキーやチョコのお菓子などちょっと持って行って、お腹が空いた時に食べられるようにしていた。
- お昼は、平日は毎日ホストマザーがサンドイッチか前日の夜ごはんの残りを持たせてくれた。よく果物を食べる文化があるようで、お昼に持って行ったりお腹空いた時に自由に食べていいよと言ってくれていた。
- 夜はホストファミリーが毎日美味しいご飯を作ってくれた。色々な料理を作って食べる家庭で、お米を使った料理、カレー、イギリス式料理など多彩だった。私のホストファミリーはスパシーな料理が好きで、よくチリソースを使っていた。量は毎回聞いてくれて、足りなかったらお代わりを勧めてくれたり、多かったら気にせず残してと言ってくれていたので自分の食べたい量に合わせて食べることが出来た。

5. 現地学生・地域住民との交流

- 体育館が自由に使えるので、バドミントンや卓球、バスケなどが楽しめる。そこで知り合うこともあった。
- 地元の小学校に毎週金曜日、9:00-15:00の間行っていました。その他には、オタゴ大学で行われている日本語クラスのアシスタント、ニュージーランドで最初に設立された Botanic Garden である Dunedin Botanic Garden での活動など合計 30 時間以上のインターンシップを通じて、地域の方との交流をしていました。また、大学のレクチャーを通じて知り合った現地の人と一緒に街に出かける、友人のフラットで一緒にご飯を作るなどして週末を過ごし、交流を深めました。金曜日に行っていた小学校では、毎年上級生が学校から車で2時間ほど離れた場所で行われるキャンプが組まれており、私の滞在中に開催されていたため学校側のご厚意もあり、子どもたちと一緒にキャンプに参加しました。ニュージーランドならではの自然を活かした活動が多く組まれており、新鮮な時間でした。平日には、空手をやっていたこともあり週2回オタゴ大学の空手クラブに参加していました。
- クラブ活動やイベントなど、機会を見つけて自分から行動するようにしました。
- こちらは留学生なので、文法を間違えても、言いたいことは向こうに通じます。臆することなく会話を楽しむ気持ちが重要だと思います。
- 語学学校には、様々な国籍の人がいました。授業以外にも、休み時間や昼食時などに、おしゃべりを通して交流できました。
- オタゴ大学の日本語の講義でインターンをしたときに、日本語を学んでいる現地の学生と交流する機会がありました。オタゴ大学のクラブ活動でも、現地の様々な人と交流できました。
- Language Center はとてもインターナショナルで、色々な国から来た学生と一緒に授業を受けていたので仲良くなり、休み時間にしゃべったり、休日に一緒に観光に行ったりした。
- ラグビーの試合の観戦に行った時には近くで応援していた現地学生が話しかけてくれて一緒に盛り上がり、写真を撮ったりして楽しかった。
- OUSA という学生生活活動サポートシステムを通じてクラブ活動を探し、空手の稽古、アルティメットの練習などに参加した。とてもオープンに受け入れてくれて、現地の学生や空手の先生とおしゃべりできたり、一緒に運動できて楽しかった。英語で空手を学ぶというのが面白い体験だった。

- インターンとして参加した、日本語会話の授業のアシスタントをさせていただき、日本語を学ぶ学生に日本のことを教えてあげたりした。
- ホストファミリーのお友達が家に遊びに来て一緒にご飯を食べておしゃべりしたり、ホストファミリーの兄弟のお家にお邪魔してお茶したりと現地の方と交流できる場がたくさんあって英語に浸かることができた。

6. 経済面

- 現金も数百ドルは持って行かなくては、割り勘などができない。また、カードはマスターカードかVISAを持っていくべき。
- 基本的に必要なお金以外は現金として持って行きませんでした。少額からでもクレジットカードが使える場所がほとんどであるため、それでも問題ないと思いますがカード会社によってはお店が取り扱いしていなく、使えない場合もあるため確認することをお勧めします。参考までに、VISAカードは基本的に大丈夫でした。また物価については日本と同じか、物によっては少し高いくらいだと思います。現金しか取り扱いがない場所として、バスが挙げられます。バスで学校まで通う場合、GO CARDと呼ばれる日本でいうパスモやスイカを購入することになると思うのですが、そこにお金をチャージする場合は現金でしかお金を入れることができません。どのくらいの距離バスに乗るかで金額に差が生じますが、私の場合、往復で約5ドルであったため週末に街に出る際に利用する場合と合わせると、週平均30ドルくらいが交通費として掛かっていました。
- カード社会ですが、屋台やバス代などで現金しか使えないときもあるので、クレジットカードと現金の両方を用意したほうが良いです。
- 現地ではクレジットカードを使っている人が多く、バスの支払いも現金のみでした。物価は日本よりも高めで、お菓子は安かったです。
- クレジットカード払いが主流。一度レストランで現金で払おうとしたらお釣りがあまりちゃんと用意されておらず、小銭をたくさんかき集めて返されそうになったのでクレジットカード払いに替えてもらったことがあり、クレジットカードは当たり前なのだと実感した。
- 現金しか使えないのはバスと週一で開かれるFarmer's Marketくらいだった。基本通学はバスで、片道\$2.28だった。
- 自分で観光したり、外でご飯を食べる時にお金を使った。物価は日本より少し高いくらいで、夜ご飯を外で食べようと思うと\$20~30くらいかかるのが普通くらい。

7. その他

- 滞在中に、Queenstown という Dunedin から6時間ほど離れた街に1泊2日で旅行に出かけました。ゴンドラから素敵な景色を眺めることや、Hakaのショーを鑑賞することができ、とても印象的でした。
- 1ヶ月半はとても短い間なので、是非色々なことを体験して素敵な時間を過ごしてください～！
- 天気が急が変わることが結構あったので、折りたたみ傘とサングラス・帽子は、毎日持ち歩きました。
- 日焼け止めと虫除けは、現地で買いました。日差しが強く、日焼け止めは毎日つけましたが、虫除けは結局ほとんどつけませんでした。
- 基本バス移動です。乗車時に、Go Cardというプリペイドカードを使います。バスのシステムや乗り方が日本と異なるので、ホストファミリーに聞いたほうが良いと思います。
- オタゴ大学の学生証をもらえるのですが、その手続きは、語学学校の授業初日に済ませたほうが良いと思います。語学学校のPCを使うときに、学生証にあるIDが必要です。また、バス代含め、学生証を使うと学生料金が適用されます。
- 学生が多い街だったので昼間は人通りが多く、治安も良かったです。
- 大学が用意してくれるプログラムだけでなく、自分からクラブ活動の情報をオンラインで集めてアポを取って活動に参加させてもらったりすることで、現地の学生と交流する機会を作れ、現地の生活を実際に身をもって体験できた。
- 少しお金はかかるが、大学が提供する少人数スクールのようなもので、ヒップホップを習うことができ、授業以外も毎日とても充実していた。
- 学生料金でさまざまな施設を利用でき、ラグビー観戦、バレエ公演の観賞、溪谷鉄道など、リーズナブルに楽しむことができた。
- 自分から情報を集め、人に聞いたりと進んで動くことで現地の人との交流が生まれ、文化を知ることができるのだと感じた。



Universidade de São Paulo



サンパウロ大学（ブラジル）

研修期間：2018年2月19日（月）～3月4日（日）

滞在：ホテル

参加費：約40万円

研修内容：ポルトガル語・日系社会短期研修

ブラジル サンパウロ大学研修を終えて

文教育学部 言語文化学科

1610283 横山智美

1. 大学での授業について

2 週間の研修でほぼ毎日サンパウロ大学でポルトガル語のレッスンを受けました。お茶大にはポルトガル語の授業はなく、私自身ポルトガル語のレッスンを受けるのはこれが初めてで、2 時間半の授業はとても濃い時間でした。授業は英語を交えながらも基本的にはポルトガル語で進められました。先生は私たちが本当にポルトガル語を知らないということに驚いていましたが、ゆっくり話してくださったり単語の成り立ちをわかりやすく教えてくださいたりするなど、親切に教えてくださいました。私は特に最初の 3 日間で、何を言われているのか全くわからない場面さえあって辛かったですが、日が経つにつれ「ポルトガル語と英語の単語は似ているものが多い」という先生の言葉がだんだんとわかるようになり、少しずつついていけることが増えていきました。語学だけでなくダンスを踊ってみたりサンパウロの歴史を校外で学んだり、文化も学べて楽しい授業でした。



知らないということに驚いていましたが、ゆっくり話してくださったり単語の成り立ちをわかりやすく教えてくださいたりするなど、親切に教えてくださいました。私は特に最初の 3 日間で、何を言われているのか全くわからない場面さえあって辛かったですが、日が経つにつれ「ポルトガル語と英語の単語は似ているものが多い」という先生の言葉がだんだんとわかるようになり、少しずつついていけることが増えていきました。語学だけでなくダンスを踊ってみたりサンパウロの歴史を校外で学んだり、文化も学べて楽しい授業でした。

2. 課外活動について

授業前の午前中には、毎日様々な団体を訪問・見学させていただきました。訪問先のテーマは①人の移動・移民、②海外で働くこと、③日本語教育の 3 つに大きく分かります。人の移動に関して、移民に関する資料館に行って案内もさせていただきました。また、日本人の方が作ったコミュニティである弓場農場にお邪魔しました。日本語が話されている場所で、自給自足を基本として生活されているところです。ブラジルはフルーツがとてもおいしいのですが、農場のフルーツは特においしかったです。とても素敵な場所でした。また、海外で働くというテーマのもとでは、JICA や国際交流基金といった機関でお話を聞きました。国際協力における日本の役割や、実際に何を行っているのか、携わっている方々とお会いすることができ、貴重な学びとなりました。

そしてテーマの 1 つでもある日本語教育については、私自身 2 年生になってから少しずつ勉強を始めていたので、本研修でこれに関する勉強もできると知り、楽しみにしていました。ブラジル日本語センターを訪問したり、センター主催の「日本語で話そ

うかい」に私たちも参加したり、さらに日本語の授業も複数の団体で見学しました。日伯文化連盟学校では初級のクラスを、国際交流基金では中級クラスを見学し、NIC-NIHONGO CLUB という子どもが学ぶ日本語教室も見学しました。

NIC-NIHONGO CLUB はいわゆる日本語のクラスとは異なり、自由な場所でした。教室での活動を通して子どもに日本語や日本を好きになってもらえるように努めるのが私の役目、と校長先生がおっしゃっていたことが印象に残っています。

3. 生活面や文化体験について

2 週間の滞在先はホテルでした。ホテルのスタッフでも英語がわからない人が多いということには驚きました。現地のビジネスマンが多く宿泊するホテルだったためかもしれませんが、ホテル以外でも街ではあまり英語が通じず、ポルトガル語が使えない私は特に買い物で本当に



苦労しました。しかしブラジル人は私のような客でも根気強く、優しく接して下さることが多く、そのおかげで最後には私も買い物を楽しむ余裕ができました。また日本料理店で食べたお寿司やお刺身は日本とそれほど変わらず、おいしかったです。また、ブラジルはおいしくて新鮮なフルーツがとても安いです。スターフルーツやグアバなど日本ではなかなか食べられないフレッシュなフルーツを食べることもできました。

研修全体を通して

人生の中で南米、ブラジルに行く機会はめったにない！と思って応募した研修で、出発前は治安や言葉など不安なことも多かったです。しかし行ってみると楽しかったという言葉ばかり出てしまうほど楽しかったし、貴重な学び、体験ができました。一緒に参加したお茶大生に助けてもらったことも多く、感謝しています。この研修に参加して本当に良かったです。引率して下さった先生にも本当に感謝しています。ありがとうございました。またいつか、ブラジルに行きたいです。

サンパウロでの研修を終えて

文教育学部 言語文化学科

1610219 笠井紫帆

実に3回目の参加となる短期研修。今回は2週間、ブラジルのサンパウロに行ってきました。サンパウロまではNY経由で片道24時間近くという超長旅で、日本から見て本当に地球の裏側だということを実感しました。今回の研修では、主にポルトガル語と日系人の文化について学習しました。ここでは「大学での授業」、「生活」、「課外活動」の3点について簡単に紹介したいと思います。

◆ 大学での授業



ポルトガル語の先生(左から3番目)と共に

サンパウロ大学にて、平日の14:00~16:30にポルトガル語の授業を受けていました。生徒はお茶大からの参加者5名のみで、テキストは先生が用意してくださった全てポルトガル語表記のものを使用、授業はほとんどポルトガル語で、たまに英語で解説が入る程度でした。また、毎日テキストから宿題が出されるのですが、まず問題の意味が分からず、意味が分かったとしても初めて学ぶ言語の授業で扱って

いない文法事項だとほとんど解けないこともあり、毎晩スマホを片手に必死で宿題をこなしていました。

ゼロベースで臨んだために最初は先生が何を言っているかも分からず苦しみましたが、ジェスチャーも交えて根気強く教えていただいたおかげで、先生の言葉が少しずつ理解できるようになりました。宿題は大変だったものの、先生はとてもセクシーで優しくチャーミングな方で、毎日楽しく2時間半の授業を受けることができました。

◆ 生活

現地では、比較的治安が良い地域のホテルに滞在していました。基本的に朝はホテルで食べ、昼食と夕食は各自で調達するというスタイルでした。ホテルから徒歩5分ほどのところにスーパーマーケットが入った大きなショッピングモールがあったため、普段の生活に困ることはありませんでした。

移動は主にUberという配車サービスを利用していました。交通渋滞がネックですが、現地ではメジャーな移動手段で、日本のタクシーに似たシステムながらそれよりもはるかに安価で、バスや地下鉄などの公共交通機関よりもはるかに快適に移動することが

できました。

街中を歩く際は、やはり日本と比べると治安面に不安があるため、「基本的にリュック等は前にかける」、「ポケットに物を入れない」、「街中であまり写真を撮らない」、「夜はあまり出歩かない」、といった点に注意して生活をしていました。

◆ 課外活動

主に午前中は、移民や日系人に関する資料館を訪れたり、日本語教育を行っている団体を視察したり、JICA にお邪魔してお話を伺ったりしていました。土曜日には、サンパウロから車で 7 時間ほどのミランドポリスというところにある日系人の共同体「弓場(ユバ)農場」を訪れ、そこに暮らす人々と交流しました。



弓場農場にて一子どもたちと共に

初めての南米、初めての英語圏以外への留学、初めての英語がほとんど通じない地域での研修を通して、何よりも語学の重要性を痛感しました。買い物さえ満足にできなかったような状態では、引率の先生がいらっしやなければ、きっと 2 週間生き延びることができていなかったと思います。しかし、そのような環境に身を置くことで、「生きるために」ポルトガル語学習のモチベーションを高いレベルで維持することができました。また、ポルトガル語だけではなく、移民や日系人について、現地での JICA の活動について、現地で行われている日本語教育についてなど、幅広い分野の様々な学びが得られました。

わずか 2 週間という短い期間ではありましたが、英語圏・先進国への留学とはまた違った経験ができ、非常に実り多い研修となりました。私たちがお茶大から南米への派遣第一号ということですので、今後もお茶大とサンパウロ大学との交流が続いていくことを願います。

大学生活最後の海外研修を終えて～ブラジル・サンパウロ大学～

文教育学部 人文科学科

1410159 吉川綾乃

1. 研修に参加した理由

私が4年生ながら、研修への参加を決断したのには大きく2つの理由があった。1つ目は「群馬県の出身であり、日系社会に興味があったから」だ。群馬県の太田市にはブラジルからの移民が集住しており、日本から遠く離れたブラジルにどこか親近感を抱いていた。しかしながら日系移民に関して学んだ経験は今までになく、この研修をきっかけに詳しくなれればと考えていた。

2つ目は純粋に、「大学を卒業して社会人になる前に、南米を訪れてみたかったから」だ。おそらく人生で最後になるだろう春休みに、何かしら自らの視野を広くしてくれる、新しい経験をしたいと考えていた。そんな時にこの研修を知り、参加を決めた。

2. 大学での授業について

大学では、平日に2時間半(14:00～16:30)、ポルトガル語の授業を受講した。この研修のために作成された教科書を用いて、挨拶から動詞の活用(現在、不完全過去、完全過去、現在完了)、助詞の使い方等を丁寧に学んだ。テキスト自体が文法を学びながら、ブラジルの文化や移民の歴史、サンパウロの歴史や現状を知ることができるように作成されており、それらについても詳しく理解することが出来た。

特に私が良かったと思う点は、先生が言語学を専門とされており、単語や発音の成り立ち等から教えてもらうことができた点だ。語学学校に通って外国語を学ぶ際にはそこまで踏み込むことはないだろう。海外研修ならではの経験であったと感じた。

3. 課外活動に関して

授業時間外には、全部で11の多様な課外活動をセッティングしていただいた。活動は「サンパウロにおける日本語教育」もしくは「ブラジルにおける日系人社会」に関連しており、自らの興味を広げるよい機会になった。

中でも印象に残っているのは、実際にブラジルに渡航された方に館内を説明していただいた、「ブラジル日本移民資料館」の見学である。渡航の理由、実際に待ち受けていた厳しい生活などを、体験談も含めて詳細に語っていただけたことが特に良かった。自分がそれまで抱えていた「日系移民」へのイメージが大きく変わり、是非、横浜の海外移住資料館にも足を運び、理解を深めたいと思った。



ブラジル日本移民資料館で説明を受ける様子

4. 生活に関して

出発前は様々な不安を抱いていたが、想像以上に楽しく充実した2週間のブラジル生活だった。ここでは、特に言葉と治安に関して、研修を終えて気付いたことを書くこととする。言語に関しては、ポルトガル語しか話せない人が多く、英語でのコミュニケーションはほぼ取れなかった。私は学習したばかりの拙いポルトガル



茶色い屋根の民家が立ち並ぶサンパウロの街並み

ル語を駆使して買い物をしていた。そんな私にも現地の人は皆優しく、こちらが言いたいことを理解しようという姿勢を持ってくれたのがとても印象的だった。

治安に関しては、心配していたほどではないが常に注意を配っていることが大切だと感じた。治安の悪さを肌で感じることもあり、外で鞆を開けたり、スマホを取り出して写真を撮ったりすることは難しかった。現地に住む方からは、家族が拳銃強盗に遭ったという話を聞き、常に危機感を持って行動することが重要であると思った。

5. 研修を通して学んだこと、感じたこと

この研修の中で得た学びや考えたことは数えきれない。1つ選ぶとすれば、「熱意と集中力をもって言語習得に臨めば、短期間でも基礎を学び終えることができる」ということである。もちろん今後も勉強を続けていかなければ忘れていってしまうが、2週間でポルトガル語の基礎を学べたことは、言語学習が苦手な私にとって大きな自信になった。これからポルトガル語をさらに伸ばすとともに、自分が今まで学んできた言語(英語、仏語、伊語)をもう一度集中して学び直したい。

6. おわりに

4年間という長いようで短いお茶大生活の中で、マンチェスター大学(英)への短期研修、サピエンザ大学(伊)への長期留学、そして今回のサンパウロ大学(伯)への短期研修に参加し、約1年1か月を海外で過ごした。4年生として後輩に何か伝えるとすれば、「思い込みや周りの意見に左右されることなく、積極的に海外研修にチャレンジしてほしい」ということに尽きる。言葉が通じないから、治安が悪いから、そのような理由で選択肢を狭めてしまうのはとてももったいないと思うし、実際に訪れなければわからないことがたくさんある。

最後に、今回のサンパウロ大学への短期研修をセッティングしてくださった関係者の皆さま、引率してくださった松田先生、共に2週間を過ごした参加メンバーのみんな、そして「最後まで綾乃のやりたいようにやりなさい」と背中を押してくれた家族に感謝の言葉を述べて、研修報告とさせていただきます。本当にありがとうございました！

サンパウロでの研修を終えて

文教育学部 言語文化学科

1610249 瀧口志穂

1. 大学での授業に関して

ポルトガル語のレッスンをサンパウロ大学(USP)にて、午後の 2 時間半を使って行った。基本的に授業はポルトガル語で行われ、初めはアルファベットの発音、日常的なやりとりなどからスタートし、次第に文法的な要素が入っていった。Be 動詞、WH 疑問文、道案内、一般動詞の時勢による活用(過去・未来・点過去/線過去)、品詞の変換、数字、気候、身体の部位など、短期間ながらかなりの要素を網羅した内容を、特製のテキストに沿って学んだ。文法を学ぶ際も、扱われる内容はブラジル文化の紹介や、サンパウロ市について(観光・交通・歴史)、ブラジルの各地域の特徴、ブラジル経済の原点(特産品)、ブラジルをめぐる移民の歴史といったように、文法のみならず内容面からも、ブラジル社会の基礎的部分を知る上で非常に有意義な学びができる構成にされていた。時には先生が Forró というブラジル特有のダンスを、実際に体を動かしながら私たちに教えてくださったこともあった。毎回の授業後には課題も出され、テキストの予習部分はその内容となることも多く難易度は少し高めであったが、次の授業内で先生が解説をしてくださるという流れになっていた。最終日には、課外授業ということで市の中心部にある博物館を訪れ、サンパウロの地域をめぐる人々の流入の歴史を、地形、民族、宗教的な角度から先生の解説と展示の内容を照らし合わせつつ学んだ。2 週間弱にわたって私たち向けにクラスが開講され、実際にポルトガル語を聞き、ポルトガル語で話すというスタイルが重視されていた。私は冠詞や前置詞の使い方などがなかなか掴みきれず、自信を持って発言することがあまりできなかったが、先生は常に親身になってつまづいている部分をサポートしてくださった。内容は難しかったものの、先生の解説はわかりやすく、私自身も大きな学びを得られたように感じている。

2. 課外活動に関して

平日の午前中は、主に①サンパウロ市内における日本機関、②日本語教室、③移民に関する資料館の見学を行った。①では、まず国際交流基金(JF)サンパウロ事務所にて、日本語を学ぶ人材育成を通して日本の理解者を増やすという目的のもとで活動されていること、そして、近年中南米という地域が外交面で重視されるようになった背景には、日系人の存在の重要性への気づきがあったことなどを教えていただいた。



また JICA 訪問の際には、今や中進国となったブラジルに対して、一方向的な援助対象としてではなく、パートナーとしての関わりが目指されている旨を伺った。多角的なアプローチの中には、日本の交番制

度がサンパウロ市内で取り入れられ、効果を上げているといった興味深い内容もあった。②日本語教室としては、まず前述の JF において、「まるごと」という JF 独自の日本語共通教科書を用いた JF 講座を見学した。また同じく「まるごと」が使用されていた施設としては、日伯文化連盟学校があり、こちらでは初心者向けのコースを見学した。ブラジル日本語センターでは、「日本語を話そうかい」に私たちも会話のパートナー役として参加させていただいた。NIC-NIHONGO CLUB では、より自由度の高い、ユニークな教授法がとられており、子どもの学習者が学ぶ姿を見ることができた。これら日本語教室の見学では、教科書内の工夫が授業内でどう生かされているのかを実感し、また教室によって雰囲気や教授法に各々個性があったことが興味深かった。③資料館としては、サンパウロ移民資料館と日系人資料館にて、人の移動の歴史を学んだ。特に日系人資料館では、実際にその歴史を体験された日系人の方がガイド役として館内を案内してくださり、当時の思いを交えた解説によって、各時代の転換点や実際の暮らしをより鮮明なものとして想像できた。これら以外に、休日の1日を使い、現在も日系人社会の縮図が見取れる地域として、サンパウロから車で7、8時間離れた場所にある「弓場農場」を訪れた。そこでは常に日本語が飛び交う環境のもと、自給自足の生活が営まれていた。私たちもそこで暮らす方々と一緒に昼食の席を囲み、餃子や味噌汁、煮物といった慣れ親しんだ味の日本食をいただいた。その後、周辺を案内していただき、多種多様な果物、野菜が栽培されている畑、手作りのチェロや焼き物など、想像以上に自立した生活が営まれていること、そしてステージもあり、そこでは各世代が演者として参加するイベントが行われるなど、充実した日々が過ごされていることを垣間見たような気がした。また、この農場の見学を通しては、子どもたちとの交流もあり、若い世代がどれほど生活しているのかは気になっていたが、実際に何人もの子どもたちがそこで暮らしていることを知り、若い家族たちをこの地に引きつける要因についても気になった。この弓場農場での1日は非常に印象的で、移住地を切り開き、それが現在まで受け継がれていく様を目の当たりにし、アリアンサという地、そして他の地域における日系人社会についてさらに関心を持つようになった。

3. 生活面に関して

やはり治安という面では渡航前から心配な部分ではあり、実際に私たちも治安が不安定な地域に足を運ぶこともあったため、夜間は出歩かず日中も荷物に注意を払うなど、基本的に引率していただく安心感もありつつも自分たち自身も日常的にかなり意識して過ごしていた。その結果、全日程を通して目立ったトラブルもなく安全に過ごすことができた。また free day には、他の実習で交流があった USP の学生さんとご家族が、サンパウロ市内を案内してくださった。特におすすめの場所として連れて行っていただいた Mercado(市場)では、多様なフルーツ、ココナッツウォーター、サトウキビのジュース、パステルというパイ生地に包まれた



料理など、日本では体験できないおいしさ、新鮮さを味わうことができた。その後も、カテドラルや地元の肉料理店などに案内していただき、アットホームな雰囲気のもと、サンパウロ観光を楽しむことができた。また別日にもレストランに連れて行っていただき、そこでも、例えば Mercado で気になっていた Palmito というたけのこに似た野菜を使ったバーガーなど、ブラジルならではのメニューを体験することができた。治安や土地勘といった面で、自分たちだけの観光は難しかったため、期間中何日にも渡って私たちをサポートしていただいたことで、サンパウロでの滞在が何倍も充実したものとなった。それ以外には、平日の昼食も、現地の日本食や Churrasco、ポルキロという量り売りのランチを食べたりと、ブラジルの多様な食文化に触れることができた。また交通面でもブラジルの日常を体験する機会があり、現地のバスや地下鉄にも乗った。乗り換えが複雑であったり、運賃支払いがバスの中央部にあったりと、日本と似ている部分、異なっている部分を肌で感じる貴重な経験であった。

サンパウロ研修を終えて

文教育学部 言語文化学科

1610210 今井梨夏子

① 大学での授業に関して

今回私たちが参加したサンパウロ研修は、この春開催された他の研修とは一線を画しており、ポルトガル語の語学留学というよりかは、日系人社会としてのサンパウロの文化を学ぶ側面がより濃かった印象を受ける。実際お茶大にはポルトガル語の授業が開講されていないため、今回研修に参加した5人は全員ポルトガル語の初学者で、日常生活は松田先生に頼る部分が大きかった。そんな私たちも現地ではブラジル1の大学とされるサンパウロ大学でポルトガル語を学んだのだが、いわば日本語を全く話せない学生が東大に突然来て日本語を学ぶようなもので、ポルトガル語の先生も初めはあまりの出来なさに頭を抱えたのではないかと思う。先生は英語が話せるというわけでもなく、共通言語がなかった私たちはポル語でポル語を学んだのだが、日本で外国語教育のやり方とはまた違った外国語教育を受けとても新鮮であった。たった2週間でペラペラになるなんてことはもちろんなかったが、それでもカタコトを話せるようには多少なったし、何よりポル語への関心が深まったことが一番の収穫だと思う。



(サンパウロ大学の時計台)

② 課外活動に関して

午前中には主に日系人に関わる勉強をした。ブラジル移民資料館や日系人資料館に行ったり、国際金融基金や JICA でお話を伺っ

たり、日本語教育の現場を見学したりと本当に多種

多様な側面から日本とブラジルの関係を学んだ。その中で、私は日本とブラジルの関係性においてさらなる進展の可能性を感じるように感じた。ブラジルは日本のちょうど裏側にあり、物理的距離が遠いこともあって“日本とは遠い存在の国”と思われがちで、日本の外交においても後回しにされてしまっている印象を受ける。しかし今回の研修で多様な方面からの日本とブラジルの関係を学ぶ中で、ブラジルには日系人という存在がいて、彼らが日本とブラジルの関係づくりにおいて非常に重要な存在になってくるということを感じた。というのも、実際に現在 JICA が行なっている事業の一つに日本の民間企業がブラジルに進出する第一歩を手助けするものがあるのだが、それに日系人が非常に大きく貢献しているのだそうだ。日本の民間企業にとって遠く離れた未知の地に進出することはハードルが高いものだが、日系社会のネットワークがあることでそのハードルは随分と下げられるとのことだった。また、ブラジルは親日

の国で、私自身国民の対日感情は良いように感じたのだが、これも過去の移住してきた人々の積み重ねによるものなのだとブラジル日本語センターの方がおっしゃっており、そんな貴重な人々をもっと重宝すべきではないかと私は思った。

③ 生活面に関して

ブラジルというと治安が悪いというイメージが先行してしまっている印象を受けるが、実際に行ってみると、人々は親切で温厚で、気候は暖かく、とても過ごしやすい街だった。もちろんだからといって安全な国というわけではないため、自分で気をつけることも大切だが、私はまた戻ってきたいと思うくらいに気に入った。ブラジルはBRICSと呼ばれる国の一つで、今回私たちが滞在したサンパウロは先進国のように発展していた。そのため近くのモールへ行けば必要な物は全て揃ったし、生活面に関して不自由することはほとんどなかった。むしろブラジルでは果物が非常に安くただ個人的な印象としては、英語は通じるものだと思っていたためいざ現地で全く使い物にならなかった時は驚いた。

最後に、今回の研修は決して治安が良いとはされない国に、全くポルトガル語をわからないまま参加した私たちを引率していただき、かつすべてのスケジュールをアレンジしていただい



(カテドラル・メトロポリターナ)

た松田先生には心から御礼申し上げます。そして、この研修へ参加させてくれた両親、および今回の研修に関わってくださった全ての方へ感謝の言葉を述べたいと思います。

ブラジルは物理的に日本から最も離れた国ですが、この研修を経て、私にとってはとても近い国になりました。

研修参加者からのアドバイス（サンパウロ大学）

1. 出発前に気を付けたほうがいいこと
 - VISA の申請は早めに済ませる。仲介サイトは多々あるが、大使館の HP からの申し込みが最も安全で確実かと思われる。
 - 現地ではほぼポルトガル語しか通じないため、渡航前にある程度勉強していくことをお勧めする。
 - 体調管理。フライトはトランジットなども含めて丸一日ほどかかる。飛行機の席が狭いなど、快適ではないかもしれないので、体調は万全にしておいた方がよい。

2. 研修先の授業
 - 先生はほぼポルトガル語しかできなかったため、授業はほぼ全てポルトガル語。たまに英語で解説が入る。
 - 辞書を持って行った方がよい。宿題が多い。
 - サンパウロ大学での授業は基本的に全てポルトガル語で行われる。英語は補助程度、単語の意味を理解するためにちょっと使ってくれる程度。
 - 用意できれば単語集など何か自分で用意しておくことと作文など課題をこなすときにも役立つと思う。

3. ホームステイ
 - ランドリールームはないが、ランドリーサービスを利用することができる。ポルトガル語しか話せないスタッフもいる。
 - 住環境はホテルだったので不自由はあまりないが、英語ができるスタッフは意外と少ない。

4. 食事について
 - 野菜が少ない。フルーツは安く、量も種類も多い。
 - 野菜があまり食べられないかもしれないが、その分フルーツが食べられる。

5. 現地学生・地域住民との交流
 - 日本語学校の先生や生徒の方々と交流する機会があった。
 - 夏休み期間中は、USP の学生にはあまり会わなかった。
 - 2 月上旬に行われた国際学生フォーラムで知り合った現地の大学生と再会し、市内やショッピングモールを案内してもらった。

- 大学での授業はお茶大生のみなので、サンパウロ大学に友達がいなければ現地の学生との交流はほぼない。何かお茶大内の国際的なイベントに参加してみるとブラジルの友達ができ、研修を楽しめるかもしれない。

6. 経済面

- カードが主流。クレジットカードやデビットカードが利用できるので、現金はあまり必要ない。バスを利用するときには現金が必要。
- 両替は日本で済ませておくと、現地で ATM を使わずに済むので安心だと思う。
- 支払うときに大きい額の紙幣だと嫌がられるので、なるべく細かいお金を用意しておくといい。

7. その他

- 日焼け止めは必須。できればサングラスもあった方がよい。
- 大抵の日用品は現地で買うことができる。
- リュック等につける鍵があれば安心。
- 持ち物の管理には十二分に気を付ける。
- 研修前からポルトガル語に触れておくといいと思う。



トムスク国立教育大学（ロシア）

研修期間：2018年2月12日（月）～3月3日（土）

滞在：学生寮

参加費：約10万円

研修内容：ロシア語研修・ロシア文化研究研修

トムスク国立教育大学を通じて

文教育学部 言語文化学科

1710202 安食礼子

1. 大学での授業に関して

平日の午前中に3時間程度のロシア語の授業が英語で行われた。ロシア語の授業は、事前にキリル文字の習得が課されていただけで、基本的に初歩的な部分から学習することができた。自分自身、1年生のうちにロシア語の授業を履修していたため授業を難しいと感じることはなかったが、日本では習うことのできない日常会話などをたくさん習得した。やはり毎日ロシア語に触れることができるから、自分のように既にロシア語を少し学んでいる者にとっても新しい気づきがあった。また小テストが3回程度(日本人の先生方によって)、最後に少し大きなテストが1回実施されるので授業内容を



をしっかりと理解しているかの確認にもなった。

さて、午後に1時間程度ロシアの文化の紹介や実際に人形などを作るワークショップが行われた。文化体験として、マトリョーシカをはじめとしたロシアの伝統人形の作成やボルシチを研修生皆で味わう時間などが設けられた。さらに、研修期間中に行われるマースレニツァという祭りや国際婦人デーなどロシア独自の

文化を先生から丁寧に紹介して頂けた。トムスクでの生活をどう楽しむか、そしてロシア人とは一体どのような人々なのかを理解する指針になったように感じている。

また、研修の最終目的として4分程度のロシア語でのプレゼンテーションが課されていた。事前に内容などを考えておき、英語や日本語で記した原稿を現地の日本語学習者に手伝ってもらった。学習者の日本語能力にばらつきがあり、日本語・英語・ロシア語を混ぜながらのコミュニケーションにはなってしまったが、お互いの言語能力向上のためにはとても良い経験となった。発表準備以外にも、ロシア人の考える日本のイメージや現地に暮らす人々の考えるロシア像を知ることができた。

2. 課外活動に関して

トムスクで実際に生活されている先生方からトムスク各所を案内して頂いた。様々な博物館やロシアの伝統的なサウナ体験、先述にあるマースレニツァへの参加など貴重な体験ができた。どの場所も自分で調べて行くには難しい場所であったので、その土地に詳しい人に案内してもらえることができとても感謝している。それだけでなく、街中心部の劇場にてオーケストラや演劇を鑑賞することもできた。いろいろな形でロ

シアとの文化を知り、吸収することができて大満足である。

それだけでなく、日本語学習者が企画して様々な場所へ連れて行ってしてくれた。その中でも特筆すべきは人形劇場を訪問したことである。(他にも、スキーやスノーボード、スケートなどにも自由に参加することができた。)人形劇の本編はロシア語が未熟なため理解するのは難しかったが、劇場の建物やその周辺の雰囲気が素朴でありかつ幻想的であった。今後、研修に行く予定のある人には是非とも行って頂きたい。他にも、現地の美味しいカフェやキャットスペースなど日本でも馴染みのあるお店であっても、ロシアらしさを随所に感じることができ楽しめた。



3. 生活面に関して

日本とは様々な点が異なり不便な点も多々あったが、その度に日本人の先生方に助けて頂いた。普段は教育大学のすぐ目の前にある寮で生活し、同じ建物に先生方がいたため、何か困ったことがあればすぐ相談できる環境にあった。また、研修の初めに街中心部や寮周辺の地図をもらえ、食事場所や生活用品を買うことのできる場所を把握できとても有難かった。ロシアでの食事は、油が多いものや甘いものがたくさんあり、適応できない者もいたようだが、もともと海外経験が少しあり特に苦にはならなかった。

それでもやはり、日本とはかけ離れた環境の中で不便だと感じた点も幾つかあった。まず、洗濯機が壊れていたため満足の行く形で衣類を洗濯できなかった点である。さら



に、日本ほどインターネット環境が整っていない点である。寮では有線回線しか使えず、大学の無線も日本ほど強いものとは言えなかった。また、ロシアは2・3月でもマイナス 20 度を下回る日があり、防寒対策に万全を期したつもりでも、日中外に出ているなどすると芯から体が冷えてしまった。日本に暮らしては経験も想像もできないような寒さなので、防寒対策には準備に準備を重ねるべきだったと後悔している。ただ、全体的にはロシア語を向上させるとともに、ロシア人を深く知るという自分の目標を達成でき、充実した研修になったと考えている。

トムスクでの研修を終えて

理学部 物理学科

1720221 新穂みちる

25 日間のトムスクでの滞在は、ロシアという国に対し自分が事前に持っていた印象を大きく塗り替えるものでした。そもそも私にとってロシアは、日本から地理的には大変近くにありながらもさほど多くの情報が入ってこないミステリアスな国でした。たとえば英語圏の国に関しては国際ニュースだけでなくその国のタイムリーな話題や若者文化にもインターネットを通じてアクセスできます。しかしその点ロシアは、私自身ロシア語がろくにわからないというのがありますが、たまにニュースでロシア国内の事件やプーチン氏の動向が話題に上がるくらいで、そのほかの情報にアクセスする機会はほとんどありませんでした。正直渡航前は現地の治安が心配で、緊張しながら研修準備を進めていました。しかしいざ研修がスタートすると、想像していたよりずっとロシアの方は親切で、大変充実した 25 日間を過ごせました。

平日は大学で、午前中に語学の授業が 30 分ほどの昼休みを挟んで、午後にはロシア文化に関する授業が行われました。語学の授業では主に英語を使い、アルファベットの発音から簡単な会話表現と文法を学びました。私は日本ですでに 4 月から 1 年間ロシア語の授業を受講していたので、学習事項も既知のものも多かったですが、



ネイティブの方の発音を聞きながら短期間で文法や単語の正しいウダレーニアを整理できたのはよかったです。一方、午後はおおよそ全てロシア語で授業が進みました。初めこそ戸惑いましたが、先生が敢えて簡単な表現を何度も使ってお話くださるので、日を重ねるごとにだんだん聞き取れる内容も増え、自分の成長を確かめられるよい時間だったと思います。放課後や休日は様々なアクティビティに参加しました。特に印象に残っているのはコンサートやロックオペラを市内

の大きなホールで鑑賞したことです。会場には多くの観客が集まり、その年齢も様々で、音楽鑑賞などの文化的な事柄に関心が高いロシア人の国民性を感じました。こういったコンサートのチケットは初め現地の先生にサポートしていただきながら購入していましたが、研修後半には自力で購入できるようになり、語学力の向上も確かめられました。また私は研修の中盤の祝日を利用して、電車で友人とノボシビルスクへ観光にも行きました。拙いロシア語を駆使してなんとか駅の窓口で切符を購入できたのはその後の大きな自信となりました。切符に書いてある自分の座席がどこかわからず当日戸惑うこともありましたが、駅員の方が親切に助けてくださってなんとか列車に乗り込み、完全自主的に企画した観光を無事スタートできました。その日は日本語通訳を

目指しているという現地の日本語の先生にサポートいただいて、観光は大変スムーズで充実したものになりました。(写真はノボシビルスクのニコライ礼拝堂)

さてロシアといえば日本でもロシア料理が有名ですが、研修中の私もロシアならではの料理を多く味わうことができました。まず朝は、スーパーで買っておいたブーブリク(厚みのある輪っか状のパン)にスメタナや甘みのつよいジャム、チーズなどをつけたものをよく食べていました。ロシアのスーパーマーケットにある乳製品は種類がとても多く、中には日本ではめったに見なかつたり聞いたこともなかつたりするものもあり、ときにはおそろおそろ口にしましたが、どれも食べやすく、とてもおいしかったです。

授業の休憩時間や昼休みには大学の売店でジュースを買ったり、大学から通りを1本挟んだ向かいにあるピロシキ屋で昼食をとったりしました。(写真は売店の写真)。ピロシキのプライスカードは手書きで、一瞥するだけでは中に何が入っているかわからないので、これも食べるときは1つ1つドキドキしながらかじっていました。また売店や他の多くの食堂もそうですが、購入にあたって値段は自分の耳で聞き取らなければならぬことがほとんどで、授業で学んだ数字の読み方の知識が早速日々の生活に生きていました。もっとも私たちがロシア語をよく聞き取れないと気づいてくれて、値段を紙に書いて見せてくれたり電卓に打ち込んで見せてくれたりする人もいて、ロシアの方の親切さに触れる機会でもありました。休日や平日の夕食は外食が多く、ブリヌイのチェーン店「シベリアのブリヌイ」や、寮から歩いていけるシャシュリク屋にもよく足を運びました。また、ロシアではおそらく物価が安いいためか、KFC等のアメリカ系のファストフード店よりウズベキスタン料理を提供する安い食堂の方が一般的で、現地で日本語を学ぶ友達に連れられて一緒にラマダン(ウズベキスタンの麺料理)を食べることもありました。トムスク市内には路面電車が走っていて、大学から簡単に市の中心部にも行くことができたので、土地勘がついてくると自力でいろいろな飲食店に足を運べるようになり、大変楽しかったです。



初めてのロシア滞在は戸惑うことも多かったです。親切な方にたくさん助けをいただけて、様々な経験をすることができました。現地の日本語クラスでできた友人だけでなく飲食店の店員や列車の駅員の方も私たちに積極的にサポートしてくださって、自分の予想を塗り替える優しい国民性を感じました。きっとこの気づきは実際にロシアに足を踏み入れなければ得られなかったものだと確信していますし、これこそがこの研修に参加した価値だと考えています。今後も機会があればまたロシアに行き、もっとロシアの国民性に触れ様々なことを感じたい、また他の国、例えば南米やアフリカなど日本でなかなか情報にアクセスする機会の少ない国々に行き、現地の人たちと交流したいと感じました。

トムスク海外短期研修報告書

生活科学部 人間生活学科

1630432 瀬古智美

① 大学での授業に関して

大学の授業は英語で行われました。文法だけでなく、実際に習った文法を使って実践的に話す機会もあり、かなりロシア語の能力が向上したと思います。最初はロシア語の発音から始まりましたが、徐々に複雑な文法も勉強し、無理なく力がついたと感じました。さらに習ったばかりのロシア語を、買い物や観光をする際に使うことができ、嬉しかったです。例えば、身の回りのものや食べ物についての単語を文法とともに覚えることで、スーパーでロシアの店員さんに場所を聞くことができました。このように、ロシア人の人と少しでもコミュニケーションが取れることが小さな喜びとなって勉強のモチベーションに繋がったのだなと思います。ロシアの文化を知る授業もありました。ロシアの伝統的な祭りや料理、おとぎ話について学びました。ロシアといえばピロシキ・ボルシチぐらいしか知りませんでした。ボルシチを作ってみたり、歴史を聞いたり、より深く知ることができました。

さらに、授業には中間テストと最終テスト、さらにロシア語でのプレゼンテーションもありました。中間テストや最終テストでは授業で習った文字や文法が範囲になっており、とてもやり甲斐がありました。毎日少しずつ勉強したおかげで最終テストは納得の行く点数を取ることができました。プレゼンテーションは日本に関するテーマについてロシア語で話すのですが、内容や発音に関して、日本語を学ぶロシア人の人に手伝ってもらいました。文法・発音ともに難しく大変でしたが、親切に教えてくれたおかげで発表までこぎつけることができました。日本語を学ぶロシア人はフレンドリーで優しくて、仲良くなれて嬉しかったです。

② 課外活動に関して



平日の授業の他に、平日の放課後や土日には課外活動を行いました。日本語を学ぶロシア人の人たちと一緒にスノーボード、スケートなど冬のロシアならではの遊びを楽しんだり、日本のような猫カフェ・カラオケにも行きました。この活動はとても楽しく、ロシア人だけではなく一緒にロシア語と文化を学びに来た広島大学生とも仲良くなることができ嬉しかったです。ロシアは冬になると日中でも氷点下になるので、雪も小さく氷も溶けません。だから、ロシアのスノーボードやスケートは日本とは一味違います。スケートは屋外にいくつもあるし、スノーボードも粉雪の上を滑ることができます。また、ロシアにも猫カフェ・カラオケがあることに驚きました。日本の文化がロシアにも伝わっていることを知る大切な機会でした。

さらに、日本人学生のみですが自主的にトムスクからシベリア鉄道に乗ってノボシビルスクという街に行きました。ノボシビルスクはロシアの第3の都市、シベリアの首都といわれる大きな街です。チケットを買うところから、訪れる場所まで自分たちで綿密に計画を立てていくことは大変でした。しかし、実際にチケットを買ってノボシビルスクに訪れることができとても達成感を感じました。

③生活面に関して

基本的にロシアの物価はとても安く食事ひとつで200円ほど、電車は32円ほどと安く物を購入したり、乗り物に乗ったりできます。だから、食堂ではロシアの伝統料理や上の写真のようなソ連時代の料理を食べたりと、様々な料理を食べることができました。生活をする上で必要になる洗剤・水などもロシアで安く買うことができました。



また、初めて会う人たちと共同生活を送るという経験をして多くを学ぶことができたと思います。私は実家で暮らしているので、自分で家事や自分の身の回りのことをすることがあまりありませんでした。しかし、寮で暮らすことで暮らす上で最低限に必要なものは何かについてよく考えることができましたし、どうしたら効率よく快適に暮らしていけるかについてもわかったと思います。また、暮らしていくには自分のことだけではなく一緒に暮らす人たち、一緒に学ぶ人たちとの助け合い、理解しあうことが大切だと思いました。ロシアという言葉もろくに通じない環境の中で情報を共有すること、互いが快適に暮らせるように配慮することはとても大切だと実感しました。

ロシアへの短期研修でロシア語や文化だけでなく、人と人とのつながりについてもよく学べたと思います。この研修で私は大いに成長することができました。

トムスク国立教育大学語学文化研修に参加して

文教育学部 人文科学科

1610105 池田奈緒美

私が今回このロシア語学文化研修プログラムに参加した理由は、ロシア美術に元来関心があり、卒業論文のテーマを選択する上で 1 つの選択肢としてロシア美術を考えていたためだ。今後の自分の進路を考える上で、今回のプログラムはとても有意義なものとなった。以下でその詳細を述べる。

1. 勉強面

まず、キリル文字をやっと書ける程度の語学力しか有していなかった私にとって、ロシア語はとても難解なもので、とりわけ発音には苦勞した。ロシア語は、少しでもウダレーニア(アクセント)を間違えると、頭の中で描いているスペルは間違っていなくても相手にはまったく分かってもらえない。実用会話の中では、正しい文法で間違った発音をするよりも、むしろ支離滅裂な文法ではあっても単語を正しく発音することが大切であるということを痛感した。

しかしながら、当初キリル文字を読むことさえもままならなかった私が、最終的には雀の涙ほどの語彙力をなんとか駆使し、最低限のコミュニケーションをとることができるようになった。これに関しては、私たちを担当してくださったアナスタシア先生及びマルガリータ先生の熱心で分かりやすいご指導のおかげであり、今後もこの成果を無駄にしないよう勉強を続けていきたいと強く思った。総括すると、「語学は短期集中」という教訓を、身をもって知った。

2. 生活面

3 週間のロシアでの生活は、とても便利なものではなかった。トムスクはモスクワやサンクトペテルブルクほど都会ではないため、基本的にどこへ行ってもトイレには便座もトイレトペーパーもない。また、生活する上で最も滞在時間が長かった寮では、コンロも洗濯機も使えない、少しの湯気で火災報知器は唸りだす、部屋の鍵は閉まらない、トイレは常に水漏れ、などなど日本では考えもしないアクシデントばかりに見舞われた。しかしこれらは現地の人々にはさして珍しいことではなく、ここで私は自分が今まで暮らしてきた環境がどれほど恵まれたものであるかを認識した。しかし、このような便利とは言えない環境だからこそ、現地の人々の親切さにはとても助けられた。英語こそほぼ全く通じないが、こちらの拙いロシア語とジェスチャーで困っていることを伝えると、老若男女関係なく必ず最後まで手伝ってくれる。今回そのように現地の人々

の優しさに触れ、私は今後日本で困っている外国人を見かけた際、最大限手伝おうと心に刻んだ。

3. 課外活動面

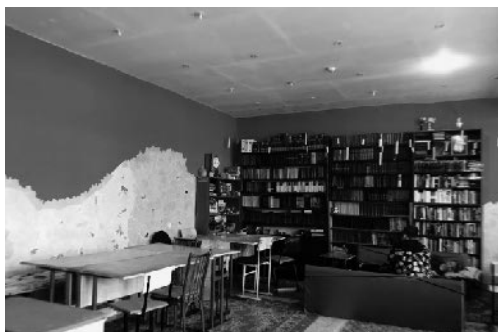
現地での課外活動は、プログラムに含まれるマトリョーシカ絵付け体験等を除くと、ほとんどロシア人の友人達と行動を共にしていた。プログラムの中にはロシア人の日本語学生との交流会が全4回ほどあり、そこで私は「美術」や「アニメ」といった共通の趣味を持つ友人を多く作ることができた。当初全く言葉の通じない国で、う



一番行動を共にした友人達と

まく動くこともできず寮にこもっていた私だが、彼女達がトムスクの様々な素敵な場所に連れて行ってくれたため、そこでまた新たなロシア人学生と知り合って少し英語で話してみるなど、交流の幅がうんと広がった。

そこで語学の壁の大きさを感じると共に、実際異なる言葉を話す者同士がコミュニケーションをとるにあたり、ジェスチャーや表情をめいっぱい使えばいくらでも意思の疎通は出来るという心強い実感も得た。特にこれを体感したのは、ある日ロシア人の友人に「アンチ・図書館」という場所に連れて



アンチ・図書館の内観抜粋 奥には寝そべる人も

て行ってもらった時である。そこは「アンチ」と銘打つように、私達が日頃利用している「静かにしなければいけない」ような図書館ではなく、本を読むのは勿論ソファに横たわって寝るもよし、ギターを弾いて歌うもよし、映画を観るも猫と戯れるもよしの自由で小さな私設図書館だった。

私は日本ではあまり見ないそういった施設に感動するとともに、そこで交流したロシア人の気さくさに驚いた。彼らは同世代なのに見知らぬ外国人にとっても温かく、私達が日本人と分かると「こんにちは」と声をかけてくれたり「日本人は漢字をどれくらい知っている？」とこちらに興味をもってくれたりした。もちろんロシアで3週間過ごす中では、このような楽しい経験ばかりではなかったが、異国の小さな図書館で過ごした温かい時間を私はきっと一生忘れないだろう。

総じてとても充実していた研修だった。今回の経験は必ず活けると私は考える。

トムスクで新たに得た経験

生活科学部 人間生活学科

1630437 竹谷智絵

私は2018年2月10日から3月4日まで、ロシアのトムスク国立教育大学の語学研修に参加した。以下は、その報告である。

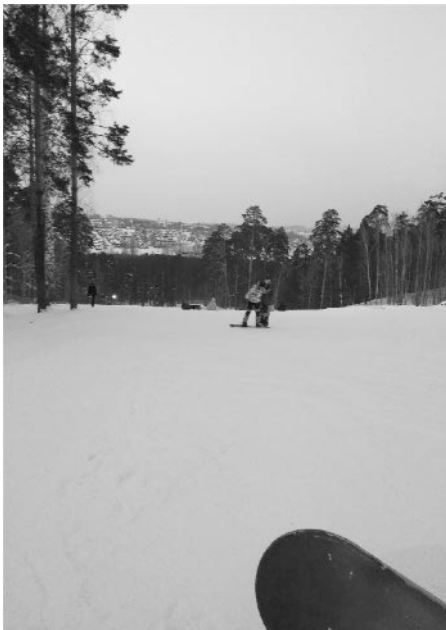
1. 大学での授業に関して

授業は午前3時間のロシア語文法・会話が行われた。全体でも20人に満たない少人数制であったため、きめ細やかな指導が行われ、担当教員から指名されて答える機会が数多くあった。

授業で私が満足した点は以下の2つである。まずは、担当教員のアナスタシア先生からネイティブの発音を生で学ぶことができた点である。私は授業中に先生の発音をよく聞いた上で、寮に帰っても発音練習ができるように、教科書で特に発音が難しいと思った部分は、授業の休み時間にスマホを片手に、発音の録音を頼むこともあった。お茶大でロシア語を学んでいて、発音に自信が持てていなかったのも、非常に為になった。次に、文法の整理が短期間でできた点である。アナスタシア先生の授業はわかりやすい上、その回の復習ができるような宿題が課され、次の授業で前の授業の復習をさらにやって下さったので、短期間でロシア語文法の基礎を固めることができた。そしてテストが週に1回あり、自分の学習状況を確認する良い機会となった。

2. 課外活動に関して

トムスクは積雪が多く、気温が低く雪が溶けにくいので、ウィンタースポーツを課外活動に行いとても楽しかった。特に今年は平昌五輪で日本人選手たちが華々しい成績を収めたこともあり、現地の人達とスケートやスノーボードを楽しみつつ、会話が弾んだ。私は生まれてこのかた、ウィンタースポーツに親しむことが無かったので、ロシアで初めて体験することができ、とても満足している。



また、2月末には自分でテーマを決めて簡単なプレゼンテーションを行うことになっており、トムスクで日本語を勉強している方々に教をを請いつつ発表を仕上げた。ちなみに私は日本の寿司について発表した。現地の日本食レストラン

を訪れたことは良い経験となった。



3. 生活面に関して

2人でワンルームをシェアする寮生活だった。人間関係で大きく行き詰ったことは特に無かった。しかし、現地の気候のせいもあって、野菜不足に陥り、炭水化物過多となった面や、ロシア料理の味に飽きることもあり、自炊を取り入れた。例えば、スーパーで冷凍野菜やペリメニ(ロシア伝統の水餃子)を買ってきてブイヨンで煮込んだり、鮭やイクラ、醤油、米を買いそろえて日本人向けの味付けで混ぜごはんを作ったりした。私は普段、実家暮らしで母に炊事を頼ってばかりだったので、自炊の機会が与えられたことは私にとって大きな意義があり、現地の食材をどのように調理するか考えるのは楽しかった。

トムスクでの移動は、路面電車かバスか歩きである。電車は16ルーブル、バスは18ルーブルとかなり安い。日本と同じくらい綺麗なバスや電車を想像してはならない。揺れはかなりひどいし、システムも切符がないので日本と違う。路線が複雑で最初の方は慣れなかったが、Google Mapを利用することでかなり助けられた。スマホやパソコンなどの何らかの通信環境は必須であろう。通信環境として予め留学用のWi-Fiを契約しておくことも有用であるが、私がおすすめしたいのは空港についてからプリペイドSIMカードを購入することである。1カ月5GBで1,000ルーブルと格安な上、通信も安定しておりデザリングも可能だ。ロシアの物価の安さを上手く利用して生活すると便利な生活が送れるであろう。

4. まとめ

以上、3項目についての報告である。今回のロシア留学は私にとってかけがえのない経験となった。ロシア語の勉強に励み、人の暖かさを感じ、自立について考える良い機会となった。今回出会った現地の方とは連絡を取り合って、またいつか会いにいける日が来ると良いと思う。

トムスクでの研修

理学部 化学科

1720315 中村珠子

①大学での授業に関して

大学での授業は、毎日平日の日中にお茶大と広島大と一緒に受けていました。

午前はロシア語の授業で、ロシア人の先生が英語で教えてくれました。初歩のクラスなので、キリル文字1つ1つの発音から始まりましたが、なかなか進度が速く、毎日始めから最後まで集中を切らすことができませんでした。しかし、つまずいた時には先生は親切に教えてくれましたし、近くの学生に助けてもらえたのでなんとか乗り越えられました。毎日必ず宿題が出たので、それをしっかりやっていたら、ちゃんとついていくことができました。授業をしてくれる先生とは別の日本人の先生方が企画した小テストが何回もあり、こちらは別に勉強をしていなければならなかったので少々きつかったです。

午後はロシアの文化を学ぶ授業でした。こちらはロシア語での説明でした。先生は英語も交えて話してくれましたが、それでもよくわからないことがありました。基本的には座学でしたが、ロシアの料理を食べたり、伝統的な人形を作ったり、ロシア語で劇をしたりする日もありました。どれも新鮮でとても楽しかったです。

この研修の一番大きな目標であるロシア語でのプレゼンですが、トムスクで日本語を学ぶロシア人の方々の手厚いサポートがあったので、大変ではありましたが無事終わることが出来ました。

②課外活動に関して

休日や平日の放課後に、日本人の先生方が企画してくれた課外活動がありました。春を祝うロシアのお祭りに行ったり、伝統的なサウナを体験したり、犬ぞり体験に行ったり...と3週間とちよつとの研修でしたが、盛りだくさんでした。



バレエの劇場

他にも色々な博物館にも連れて行ってもらいました。トムスクはたくさん博物館がある、とても文化的な街でした。現地で大人気の「ロックオペラ」を見に行った時は、言葉がわからないことを抜きにしても人気の理由がわからず、文化の違いを感じました。中でも一番印象に残っているのは、トムスクから4時間ほど電車に乗った先にある、ノボシビルスクという街にバレエを見に行ったことです。大きくて美しいホールで本場のバレエを見ることができて、とても良い思い出になりました。もう1つあげると、ロシア人

の友達とロシアの猫カフェに行ったことです。猫カフェは日本と同じようなシステムでした。ロシア人は猫好きが多いようで、一緒に猫をあやして、可愛がりました。あの瞬間は言葉を介さずに心が通じあっていたと思います。

③生活面に関して

研修に参加した学生全員が寮生活でした。基本的に4人で1つの部屋を使います。部屋はさらに3つに分かれていて、私たちお茶大1年生の部屋は、1人部屋、3人部屋、シャワー、トイレ、洗面台のある部屋、という感じでした。電気ケトル、電子レンジ、コンロは問題なく使えました。しかし、洗濯機が壊れていて使えず、下着などは毎日手洗いせざるを得なく、その点は大変でした。



ペリメニを調理した時の様子

毎日の食事は、朝はパンと、ハムとチーズなどをスーパーで買って食べていました。ロシアはパンがとても安く、食費がだいぶ節約できました。昼は学校の購買の菓子パンを食べていました。夜は外に食べに行くことが多かったです。名物のブリヌイやシャシュリク、ボルシチはもちろん、ピザやハンバーガーなども食べました。どれもとても美味しかったです。食事で一番困ったのは、野菜がなかなか取れないことでした。日本のようにコンビニやスーパーにサラダなどお惣菜があることもないので、野菜嫌いの私でも野菜が恋しくなりました。

生活面で一番大変だったのは、やはり、言葉が通じないことでした。これは日本にいただけでは感じる事のなかったストレスだと思います。ロシアでは若い人でない限り英語を話す人がいませんでした。買い物をするにしても、何を聞かれているのかわからず戸惑ってしまい、そういう時のロシア人の顔はなんとなく怖く見えてしまいました。しかし買い物は定期的にしなければいけないものだったので、少しずつではありましたが、慣れてきてスムーズに買い物できるまでに成長することができました。この研修を通じて得られたのは、こういった精神的な成長が多くあります。何事も恐れずやってみる勇気や、目の前の嫌なことから逃げない気持ち、などトムスクで3週間近く暮らさなければ得ることができなかつたと思います。大変なことはもちろん多かったです、たくさん忘れられない思い出もできて、行ってよかったと今では心から思えます。

トムスク研修

文教育学部 言語文化学科
1710267 波多江美奈

大学での授業

午前中はロシア語の授業である。授業は英語で行われ、キリル文字の発音からスタートし、過去形あたりまで進む。私はロシア語を学習したことがなかったが、しっかり復習をすれば授業についていけないことはなかった。しかしもう少し予習して行けば、もっと理解が深められたと思う。逆に、ロシア語をすでに学習したことのある人にとっては、少し物足りなかったかもしれない。実用的な内容が多く、街中で聞き取れる単語がだんだん増えていき、力が付いていることを実感できて嬉しかった。午後はロシアの文化についての授業である。授業は基本的にロシア語で行われ、たまに英語を使うといった感じで、初学者には聞き取れないことも多く、内容がわからないこともあったが、パワーポイントなどを使って説明してくれたのでなんとか理解できた。

課外活動

3週間の中で3回、向こうの大学で日本語を勉強する学生(といっても年齢層は幅広い)と交流する機会があった。そこで仲良くなった学生と猫カフェに行ったり、スケートやスキーに連れて行ってもらったりした。研修の最後に5分ほどのプレゼンをするが、それを手伝ってくれるパートナーもその交流会の中で決めた。ロシア語でプレゼン! ?と思う人もいるかもしれないが、パートナーがしっかり手伝ってくれるのでそこまで心配する必要はない。



プログラム自体にもたくさんイベントが組み込まれていて、授業後に博物館・美術館に行ったり、マトリョーシカの絵付け体験をした。中でもロシア式サウナであるバーニャや犬ぞりは、旅行ではなかなかできない貴重な経験でとても楽しかった。授業以外にも多くの課外活動があり、ロシアの文化を体験できるのがこのプログラムの良いところだと思う。

また、休日を利用して、私はトムスクから電車で4時間ほどのところにあるロシア第3の都市ノヴォシビルスクという街まで行き観光をした。ロシア人の友人に街を案内してもらった後、オペラバレエ劇場でクラシックバレエを観劇した。劇場内は大きく、豪華でとても美しい舞台だった。さすがロシアで一番大きい劇場である。念願のロシア

でのバレエ鑑賞が叶ってよかった。

トムスクでの生活

初めはロシアに対してマイナスのイメージを持っていて、スリが多いのではないか、あるいは冷たい人が多いのだろうと思っていたが、そんなことは全くなかった。確かにたまに冷たいお店の店員さんなどもいたが、多くのロシア人はみんな優しい人ばかりだった。基本的に、トムスクの町では英語が通じず、初めは買い物をするのにも苦労したが、分からないという旨を伝えると、どの人も私たちに分かるように丁寧に説明してくれた。ロシア人は日本人のように必要以上には笑わないが、だからと言って冷たい人間というわけではなかった。シベリアの田舎町というのもあるだろうが、治安も良く、とても暮らしやすい良い町だった。

研修を終えて

3週間という短い期間だったが、とても貴重な体験をすることができ行ってよかったと思う。学んだことのない言語の研修にきて思ったことは、現地に行っているいろんな人と交流することが一番の言語学習になるということ。また、どうしてもお互いの言語が通じない時に使



われるのは結局英語であり、世界共通語である英語は話せるべきであり自分はもっと頑張らなければいけないなと感じた。向こうの学生と交流し、彼らの言語能力と意欲に刺激を受けた。日本から遠く離れたシベリアの地にこんなに日本語を話せる人たちがいることに驚いた。自分も頑張ろうと思えた。

トムスク研修報告書

文教育学部 言語文化学科
1510209 岩尾恵美

①大学での授業に関して

ロシア人の先生が発音から丁寧に教えてくださいました。私は1、2年次にロシア語会話とロシア語文法の授業をとっていましたが、短期間に集中的に学ぶのは初めてでした。また、今までは文法や単語を覚えてもあまり遊ばないゲームのルールを覚えているような気持ちでしたが、今回の研修ではロシア語を、実際に使われている言語として学ぶことができたと思います。毎日の宿題は比較的軽く、放課後を十分ゆったりと過ごせました。

先生のプレゼンテーションを聞く授業ではロシアの文化を学ぶだけでなく、ブリヌイやボルシチ、伝統的な人形など紹介されたものを実際に食べたり作ったりして、本場のものを体感することが出来て良かったです。また、何日かかけて練習した短い劇や歌を発表する機会もあってそれも楽しかったです。

②課外活動に関して

博物館見学から犬ぞりまで、活動は多岐に渡っていて面白かったです。こんなに雪国ならではの体験ができるとは思っていませんでした。

ロシア語でのプレゼン作りでは一番得たものが大きかったと思います。ロシア語を使っての発表を、大学で日本語を学ぶロシア人に手伝ってもらうことになっていました。初めの交流会で自分の予定するプレゼンテーマに興味を持った人がサポートしてくれるのですが、私のテーマ「忍者」には2の方が手を挙げてくださいました。発音や簡単な言い回しの指導をしてくれてとても助かりました。また、授業外で打ち合わせをすために会ったり、遊びに連れて行ったりしてくれて、友人を作る機会になった点もよかったです。



③生活面に関して

ロシアはとても暮らしやすかったです。外は寒いですが着込めば良く、部屋のなかは暖かくて、寒くて何もしたくないと思うことはありませんでした。学校のまわりはスーパーやコンビニが十分あり生活に必要なものはほとんど揃えることができました。私は自炊をせず買って来たおかずとパンを食べていました。春祭で購入したはちみつが大変美味しく、2週間ほどはずっとはちみつバターパンが朝ごはんでした。昼ごはんは学食で食べました。利用する際も馴れないロシア語と身ぶりを使って注文するのが楽しかったです。

人々の習慣で感心したのが路面電車、バスの降り方です。ロシアでは、自分の降りる駅が近くなったら、混んでいるときは周りの人と目的地を聞きあいながら車内を移動し、バスが止まるころにはそこで降りる人が出口の近くにいるようにしていました。大学での授業で使っていたロシア語の教科書のコラムで知っていたことでしたが、実際に目にすると本当にスマートでよいシステムだと思いました。対して日本では、満員電車の中から目的の駅で降りようと思ったら、その駅に着いてから周りに声をかけて道を開けてもらいます。日本はただでさえ電車を利用する人数が多いので、このやり方が浸透したら乗り降りの苦労や遅延が減って利用者のストレスもより改善されるのではないかと思います。

少し苦労したのはネット環境の面です。私は日本でネットにたよりきった生活をしていたため、研修中はあまり画面の向こうに気をとられないようにしようと思っていたため、また寮、学内での

最低限のネット環境をあてにしていたためレンタルのルーターなどは用意していきませんでした。しかし寮内の Wi-Fi はほとんど繋がらず、学内でも常に安定して接続できるわけではありませんでした。一人旅であればそれでも構わなかったのですが、研修中の連絡は Facebook 上でされることもおおく、集団生活に身を置いているときほど周囲と同程度の備えをしておくことが必要だったなと思いました。

ロシアのサービスは、日本で受けるものよりは質が低いと言われるし、実際にそうだったかもしれない。生活をしているなかで、日本だったらこうなのに、と思うこともあり、日本のよさを実感することもあったと思います。しかし、接客業の人間がそれなりにサービスを提供してくれる国に住む日本人は、裏を返せばやはりロシアや他の国よりも少しお客様精神を強く持っているのかなと感じました。そして相手に求める気持ちは、何かを何らかの方法で打破しようとする向上心、意欲を弱めているのではないかとも思いました。悪く言うのは諦め、よく言えば郷に入るとは郷に従えという気持ちが大事だと学ぶ 3 週間でもありました。また、ロシアの感覚、習慣よりも他の日本人のそれに驚かされることも多く、真のカルチャーショックとはこういうことを指すのではないかなとも考えたりしました。



←教育大学のガルデロープ(クローク)です。ロシアではいろいろな施設の中にこのような場所が用意されていました、教室の中にコートを持っていくのはマナーが悪いという感覚は新鮮でした。また、私は日本にいる時に、外はとても寒いですが室内は T シャツでも問題ないという話を聞いていました。そのため外出するにはたくさん服を着なければならぬが、室内ではその脱いだ服を持っていなければならないのは不便だなと思っていたので、クロークの身近さを目の当たりにして、寒いところで生活するとはこういうことなのだなどと自分の発想の至らなさに呆れました。

研修参加者からのアドバイス（トムスク国立教育大学）

1. 出発前に気を付けたほうが良いこと

- 持っていく荷物は、厳選したほうが良いです。現地で調達できる、シャンプー、リンス、石鹸、トイレットペーパーはかさばるだけになってしまいます。逆に、日本でしか手に入らない、教科書類は必ず準備しましょう。
- ビザは早めにとる。
- しっかりした防寒具を用意する。シベリアなので、やはり日本とは桁違いの寒さだった。帽子マフラー手袋は必需品。しかし、部屋の中は結構暖かいので中に着込むのではなく、脱ぎ着しやすいものを重ね着すると良い。ちなみにホッカイロはほとんど使用しなかった。荷物になるので持っていく必要はないと思う。
- ロシア語の勉強はしておきましょう。しておけばしておくほど現地での学習がぐっと楽になります。
- キリル文字のブロック体と筆記体をかけるのが最低限です。最低限の会話なども自分でやっておくといいかもしれません。
- 『ロシアの歩き方（シベリア）』を読んでおくと役に立ちます。
- なるべく早めに、トムスクにいる日本人の先生とは連絡をとれるようにメールアドレスを送っておくとベターです。そうすると研修先の授業テキストのファイルをあらかじめ共有してもらえるため、自分で印刷できてコピー本に気兼ねなく書き込みながら授業に参加できます。また、Facebookの研修のグループアカウントができれば入って、寮の設備やロシアでの習慣、金銭についてなど気になることは質問しておきましょう。
- ロシアへ行く際、大使館でビザを取ることにになります。平日の 9:30～12:30 までしかビザを取り扱ってないですし、年末年始の休みもかなり長いので余裕を持って取りに行くようにしましょう。
- 金銭に関してですが、現金とクレジットカードの両方を用意しておくようにしましょう。授業代を大学で 10000 ルーブル現金支払いになるため、そのことも加味して現金を用意しましょう。
- 日本でドルに両替しておいて、ロシアでルーブルに両替するといいみたいです。
- ロシアでは小さい買い物に対して大きいお金を受け取ってくれなかったり、大きいお金が自販機に入らなかったりします。
- お金は細かくして持っておきましょう。
- クレジットカードは海外でのキャッシングができるかどうか、上限額は

丈夫か、など念入りに確認しておきましょう。

- 留学前に紹介されるカードで契約しておくのが最も安心かもしれません。
- 服装ですが、大きめのアウトドアショップで、寒さにも耐えられそうなものを買いました。スキーのようなウィンタースポーツを楽しむことも加味して服装を選びましょう。向こうでは、帽子は必須です(ないと心配されます…)。現地で買うのもアリですが日本から厚めの帽子を一つ持っていくと安心です。靴は暖かそうなものであればあまり滑り止めには気にしなくても大丈夫です。気温が低いので雪が溶けず、滑ることはありません。せっかく1か月弱過ごすのですから、テンションの上がる靴を履くと良いのでは？現地でブーツを買うととても安いです。
- 荷物はかなり大きくなるので、圧縮袋や大き目のスーツケースを駆使しました。
- タオルは多めに持っていったら食事を自分で用意するときに役立ちました。現地で捨てて帰りました。
- 荷物に余裕があれば、日本からお土産を持っていくと喜ばれます。私はココイチのレトルトカレーを持っていきました。他には中村屋のカレーや鍋ラーメンがオススメです。
- 何かわからないことがあったら、現地で日本語を教えている日本人の先生にメールで連絡を取るといい。親切に教えてくれる。

2. 研修先の授業

- 授業は全て英語です。でも、日常会話がわかるレベルであればついていけるので大丈夫です。
- ロシア語は発音が難しいので、先生の発音をくり返す練習をたくさんします。恥ずかしがらずにやることが上達のコツです。
- ロシア語を学習したことのない人でも参加できるプログラムだが、キリル文字は必ず読めるようにしていかないと授業についていけない。キリル文字だけでなく基本の文法だけでも学習していくと授業がわかりやすくなる。また、授業が英語で行われるのでわからなくなったところを確認するのに参考書を持っていくと便利。
- 授業は平日1日3時間のロシア語と1時間のロシア文化紹介でした。
- ロシア語の教科書は貸してもらえますが、自分で教科書のpdfを共有してもらい日本から印刷して持って行ってガシガシ書き込めるようにしたほうが授業を受けやすいです。
- 授業は基本英語ベースで進んでいきます。文法用語も英語です。

- ネイティブの先生に習ったことによって発音がかなり矯正された気がします。
- 最初はキリル文字が一通りかければ問題ない。
- 毎日の復習は必須。
- プレゼンの原稿やスライドは日本である程度作っていった方がよかったと思った。

3. ホームステイ

- 寮では、レンジとポット、トイレとシャワーは使えますが、コンロや洗濯機はほぼ使えません。食事は簡単なものを調理するぐらいです。また、下着類はシャワーで選択するなど、工夫が必用です。
- 留学中の滞在先は大学の寮。私の部屋は一つの扉の中に三つ扉があって、一つはシャワーとトイレの部屋、後の二つはそれぞれ3人部屋と1人部屋に分かれた4人部屋だった。キッチン各階に共用でついていて設備はイマイチで1回自炊しただけでほとんど利用しなかった。洗濯機はキッチンの中についていたが壊れていて、洗濯物は全て手洗いをした。ネット環境はあまり良くない。寮には有線のケーブルが一つあるだけでWi-Fiはない。大学にはFree Wi-Fiがあるが繋がりにくいことが多い。可能であれば、Wi-Fiのルーターを持っていくか現地でSIMカードを買うなどをした方がよい。
- 寮生活でした。運が良ければ1人部屋、多くても2人部屋でした。
- 1か月弱という長い期間を生活するにあたり、仲のいい友達や近い関係性の人よりも初対面の人と同部屋になった方がいいように感じました。どうしても価値観の相違が発生するため、仲間割れのリスクを減らすためです。帰国後も人間関係は良好な方がよいですから。
- ホームシックになった時のために何かしらの手段を確保しておくといいです。
- 割と長い間限られたコミュニティの中で過ごすため、ストレスが溜まります。例えば、彼氏や友達とボイスチャットや電話をするなどです。ですから、日本との関係性を一切断ち切ろうなどという心持では行かないで正解でした。あと、ある程度の配慮は共同生活である以上大事ですが、「自分のことは自分でやる」というポリシーは個々が持ったうえで行動しないと破綻のリスクが高まると感じました。例えば洗い物や掃除などです。割り勘もトラブル防止のために避けましょう。色々書きましたが、帰国してから現在も同部屋の人たちとは仲が良くて食事に行ったりします。

- 電子レンジ、湯沸かし器、冷蔵庫は部屋にあった。共用のキッチンにはコンロがあった。風呂はなく、シャワーのみ。
- 洗濯機が使えなかったので、毎日手洗いで洗濯し部屋干ししていた。
- 寮の中は暖かいが、支給される掛け布団が薄かったので夜はコートを布団の上にかけて寝た。

4. 食事について

- ロシアの食事は、もちろん日本と違います。大学食堂で食べる料理はシンプルな、ボルシチ、ライス、ジュース、肉魚などですがロシアの文化をしっかりと感じられます。
- 大学の中には食堂と購買、寮の近くにはコンビニもスーパーもあったので、食料調達に困ることはなかった。部屋の中にポットと電子レンジが設備されていたので、スーパーなどで買ったものを温めて食べるが多かった。近くには外食できるお店もたくさんあった。物価も安いのでたくさん買ってとても安く済んだ。
- 基本野菜がありません。寒すぎて育たないのでしょうかね。野菜といえば、じゃがいも、人参、玉ねぎ、固めのキャベツ、ビーツ、トマトぐらいです。
- 自炊の機会をたまに設けないと野菜が不足します。
- 味は微妙ですが冷凍野菜などを買うといいかもしれません。
- 授業がある日の昼は大学の食堂でいただきました。
- コスパがいいです。
- ピロシキ屋さんや日本料理店なども行って店を開拓していきました。
- ロシアのマックは日本より美味しくて良いですが、バーガーキングは高すぎてダメです。
- ストローやおしぼりを別料金で取ってくるところが多いので注意してください。
- 野菜が取りづらいので、野菜を取れるようなものを日本から持っていった方がいいかもしれない。

5. 現地学生・地域住民との交流

- 日本語を学ぶロシアの人たちと仲良くなれます。日本の文化にももちろん興味をもっているなので、すぐ仲良くなれます。互いに、ロシア語と日本語を話して会話の練習をしたり、おいしいお店にいたり楽しく過ごせました。
- プログラムの最後に行うプレゼンのパートナーが一对一で付く。彼らはこ

こちらの大学で日本語を学んでいる人達だが、人によって日本語レベルの差が激しく、とても堪能な人もいればほとんど話せない人もいた。私達もロシア語を話すことができないので、コミュニケーションに英語を使うことが多かった。

- 現地の学生さんとは現在でもメッセージャーで交流が続いていて、楽しくコミュニケーションを取っています。
- 連絡手段は基本メッセージャーですので通知などがちゃんと来るようにしっかり設定しておきましょう。
- プレゼンを課外課題として出されるのですが、一緒に原稿を書いたり、発音練習をしたりしてとても充実していました。
- 一緒にウィンタースポーツを楽しみましたし、交流が深まったと思います。
- 交流会で関わる学生は、日本語か英語が上手な人ばかりなのでロシア語が話せなくても心配いらなと思う。

6. 経済面

- 金銭面で気を付けたいのは、現金をもっていくこと、そして現金を引き出せるカードを持つことです。ロシアには ATM がそこかしこにあるのでいざというときに助かります。クレジットカード対応のお店もたくさんあります。また、物価が安いので。パンひとつ 50 円ほどで買えるので、あまり多くの現金をもたなくても生活していけます。
- 研修費の 1 万ルーブルの他に渡航費は往復 1 3 万円程度。
- 生活費は博物館などのチケット代や食費全て合わせて 4 万 5 千円。物価は日本と比べてかなり安い。クレジットカードはコンビニ・レストランなど多くの場所で使えるが電車・バス、食堂など現金でしか支払えないところもある。両替は円・ルーブル間だとレートが悪いので一度ドルに変えてから両替すると良い。また、向こうで日本円を両替できる場所は少なく、あってもレートが悪い。
- お金はリスク分散のために、色々手段を分けて持っておくことをオススメします。
- まずはある程度日本でルーブルに両替した現金と、ドル。そして海外でキャッシングのできるクレジットカードです。
- 10 万あれば足りましたが、散在するとどうなるかわかりません。
- ロシアはクレジット文化なため、少額でもクレジットで払うことが多いです。慣れないお金の計算をしなくていいので楽です。
- 現地で使えるクレジットカードがあると便利。

7. その他

- 授業でも、インターネットを使う機会はよくあるので必須だと思います。
(PCも)
- 今回お茶大生は、往復の飛行機の予約をJTBにお願いしたのでただ行って帰るだけだったが、広島大学の人たちはプログラム終了後モスクワや他の国を観光して帰っていた。ロシアは来るのにビザが必要で、なかなか来ることができないので、私たちも他の都市を回って帰ればよかったと思った。
- コンビニやスーパーで買い物をすると必ず、レジ袋は有料です。エコバッグを持っていくことをオススメします。
- 粉類や砂糖など包装が簡素なもの（紙袋一丁のみ）が多いです。黒パンの素を買って、スーツケースに入れて持って帰ったら悲惨なことになりました。注意しましょう。
- 寮や大学のネット環境が良くないので、日本でWi-Fiをレンタルしていか、現地でSIMカードを発行するのがいいと思う。
- 長く外にいる日以外はそこまで防寒しなくてもなんとかなる。カイロを日数分持っていったが、ほぼ使わなかった。
- Wi-Fiは現地のSIMをつかうか、ルーターを借りたほうがよいです。

UNIVERSITY OF **Hull**



ハル大学（イギリス）

研修期間：2018年2月10日（土）～3月25日（日）

滞在：学生寮

参加費：約53万円

研修内容：英語・英国文化研修

ハル大学研修を終えて

生活科学部 人間・環境科学科

1730211 駒月 史子

はじめに

私がこの研修に参加しようと思ったきっかけは、英語が好きであり、英語力を上達させたいという思いから、実際に英語圏の国に少しの間でも住んでみたいと思ったからです。そんな動機から始まったこの研修では、ここに書ききれないくらいのたくさんの経験ができ、その経験の数々は私を大きく成長させてくれました。



ハルにあるミュージアム

大学の授業について

大学へは週 5 日通い、およそ週 20 時間の授業を受けました。主な先生は 3 人おり、リスニング、スピーキング、ライティングなどの英語のベーシックスキルをメインに学びました。課題についてですが、毎週末に少し出たほか、最終週までに 1500～2000 語のエッセイの提出がありました。エッセイでは、共通のテーマである「都市化」に沿って、各々が題材を決めるところから取り組みました。

印象に残ったことは、授業スタイルが日本での授業とは大きく違ったことです。このことは私自身にとっては珍しいため、とても良い経験であったと思います。先生が一方的に話す授業ではなく、先生と生徒が共に授業を作り上げている印象を受けました。授業内では生徒の発言の場が多く設けられます。毎回の授業で先生が生徒に意見を求め、そこからトピックをさらに発展させるのです。ですので、自分の意見を持つことが求められました。授業内のペアワークでも同じことが言えます。相手の意見を汲み取ると同時に、自らの意見も英語で伝えることは最初は大変でしたが、私は英語を話すことが好きなので、慣れてくるととても楽しかったです。

課外活動について

授業が終わった後や休日は、毎日のように予定がありました。Japanese Society の方々が、放課後、休日の予定をよく企画してくれました。Japanese Society とは、日本のことが好きな人々が集まる、ハル大学内のサークルのようなものです。彼らは本当に親切で、滞在中はずっとお世話になりました。休日には、電車で行く日帰りの旅行も計画してくれました。また、研修中のシステムの1つとして、Language Exchange Partner がお茶大生 1 人につき 4～5 人、割り当てられました。ハル大学で日本語を

学んでいる学生とペアを組み、お互いの言語を教えあうというシステムです。図書館やカフェで会ってお話したり、一緒にご飯を食べに行ったり、交流の仕方は人によって様々です。私自身、4人のパートナーがおり、全員に均等に会うことはできませんでしたが、帰国後も連絡をとるほど仲良くなった友達もでき、充実した文化交流の機会となりました。



Exchange partner として仲良くなった友達

生活面について

この研修中は寮での生活でした。同じフロアには、この研修に参加したお茶大生 10 人と、その他の国の方が数人住んでいました。そのフロアでは、1人部屋が与えられ、キッチン、シャワー、トイレは共有です。今年度は、Japanese Society の方々が基本的なキッチン用品は揃えてくださり、とても助かりました。来年もあるとは限らないのですが、近くにショッピングモールは 3 つあり、お店はたくさんあるので、その他の日用品も現地で買い揃えることができます。特に大きなトラブルもなく生活でき、フラットメイトともたまにお話することで、良い異文化交流ができたのではないかと思います。

最後に

1ヶ月半もの間、自分の知らない環境に身を置くことは初めてだったので、毎日が新鮮なものばかりで、得られたものがたくさんあります。何より、英語に対するモチベーションが上がりました。私の研修での目標のひとつに、スピーキング力の向上がありました。自ら話しかけることを意識したことで、6週間という短い期間でしたが、言葉が出て来やすくなったと思います。また、仲良くなった友達と SNS で頻繁に会話をすることで、文章を考えるのも早くなりました。このこともスピーキング力の向上に関わってくると思うので、今後も連絡を取り続けたいと思います。そして、次回彼らと会う時までには、見違えるほどの英語力を身に付けたいです。

イギリスでの研修を終えて

文教育学部 言語文化学科

1710270 原田翠

① 大学での授業に関して

大学での授業では **urbanisation** をテーマに講義を受け、ディスカッションをしたり、エッセイ(1500~2000words)を書いたりしました。英語教育の先生3名の授業と、教育実習生による授業、ネイティブの学生とディスカッションをする授業がありました。英語教育の先生方はとても優しく、英語が苦手でも話そうとしていることを汲み取ってくださいます。英語教育の授業では、中国やインドネシア、モロッコ、サウジアラビアからの留学生と一緒に授業を受けました。6週間経った頃にはみんなとかなり仲良くなりました。課題や授業中にパソコンを使う機会が多いです。私は持ち運びやすいパソコンを所持していなかったので、イギリスに行く前に新しくパソコンを買いました。パソコンやノート等を入れる大学用のカバンがあったので通学が楽でした。

② 課外活動に関して

ジャパニーズソサエティというハル大学の学生と卒業生等で構成される組合と遊びに行ったり、旅行したり、ご飯を食べたりしました。大学や寮の近くにアミューズメント施設があるので、暇なときに遊びに行きました。旅行先では、大聖堂を見たり、ショッピングをしたり、現地の食事を食べたり、マーケットに行ったりしました。また、タンデムパートナーという語学交流も行いました。ハル大学の日本語担当の先生の担当の学生の4~5人とそれぞれパートナーになり、課題や暮らして困ったことがあったら聞いたり、一緒に出かけたりしていました。タンデムパートナーとは別に、週に一度、現地の日本語初心者の学生の質問に答える時間が2時間ありました。お茶大生のみでマンチェスターやロンドンにも行きました。



大英博物館



ロンドン塔

③ 生活面に関して

事前研修の一部として、ハル大学の学生とのビデオ会議を行った際に、「毎食 1500 円ほどかかる」と現地の学生から言われていたのでお金を多めに換金していましたが、外食ではなくテスコというスーパーや大学生協の食事、大学の食堂やパブやカフェで食事をしていたら、一食 150 円から 1000 円ほどに抑えることができました。しかし、安いものは基本的に美味しくないので、多少のお金を支払い、美味しいものを食べたほうがいいです。大学の近くに美味しいカフェ等が多い通りがあるので、散策すると楽しいです。雨が降ることが多いので、汚れてもいい靴があるといいです。手袋、マフラー等の防寒具もないと辛いことが多いです。持って行ってよかったものは、除菌シート(外食した際に手を拭く)、ファブリーズやリセッシュ等(洗えないものに強い匂いがついてしまった時、寮のベッドに使う)、カイロ(普段の生活では必要ありませんが、旅行や散歩をするときにあるといい)、水筒(寮に電気ケトルがあるのでお茶等を大学に持っていく)、インスタントの日本食(麺類、お味噌汁、お米等。イギリスで使い切ったり、現地の学生にあげたりする)、ポストンバッグと圧縮袋(帰りはみんなお土産等で荷物が増える。イギリスで捨てることのできる服を行きの荷物に多めに詰めるのも良い)です。また、寮で他の学生と話すといいと思います。何か苦情を言いたい時に言いやすくなります。寮の管理人さんに部屋や共有スペースの不具合を連絡することもあるので、事務室や管理人さんのアドレスを確認しておくとう便利です。生活面ではあまり不満を感じることなく過ごせました。



大学の学食のヨークシャーピング



大学近くの Dancing Goat の
アフターヌーンティー

ハル大学研修を終えて

文教育学部 言語文化学科

1610270 堀江彩花

● 大学での授業に関して

ハル大学では1コマ1時間45分の授業が週に10コマほどありました。お茶大生の入ったクラスには基本的に3名の先生がつき、それぞれリーディング、ライティング、リスニング&スピーキングに特化して教えてくださったので、英語の能力を満遍なく伸ばすことが出来ました。ただし今回はハル大学の先生方が、短期間ではありますガストライキをしてしまったため、先生によっては何日も休講になってしまった授業もありました。授業には他の留学生も参加していて、中国・インドネシア・モロッコ・サウジアラビアなど、様々なバックグラウンドを持つクラスメイトたちとの交流も楽しめました。また、もしハル大学で自分の専門ないしは興味のある分野の講義が開講されていれば、聴講することも出来ます。

課題については、多くもなく少なくもなくという印象でした。宿題がコンスタントに課されるので、それをこなすことももちろん大切でしたが、何より重要だったのは最終課題のエッセイでした。

「Urbanization(都市化)」をテーマに1500wordsから2000wordsほどの分量を書くことと、そのために英語の書籍や論文等を読むこと、そして適切な引用方法で先行研究を活用することが求められました。難しい課題でしたが、毎週1コマはこのエッセイのためのワークショップにあてられ、トピックの決め方や資料の探し方を授業中に学べたので、無理のないスケジュールで書きあげることが出来たと思います。



● 課外活動に関して

ハル大学には Japanese Society というサークルがあり、そのメンバーたちが放課後や週末はハル市内に限らず様々なところへ連れて行ってくれました。もちろん彼らとコミュニケーションを取る際は基本的に英語なので、最初は意思の疎通がなかなか出来なかったのですが、次第に自分の言いたいことをどのように英語で表現するのかのコツが掴めてきて、拙くも何とか会話が出来るようになったと思います。

また、Language Exchange Partner という制度で知り合った方々にも大変お世話になりました。これはお茶大生1人につき現地の学生が4人から5人ほど選出され、お互いに英語や日本語を教え合うという制度ですが、その交流の度合いは人によって

様々でした。週に何回も会って勉強会をする人もいれば、最初の挨拶以降全く連絡を取り合わない人もいました。人間関係が広がるかどうかは自分の積極性にかかっているのだと改めて感じました。

- 生活面に関して

まず寮の設備については、正直なところあまり良くありませんでした。10名全員が1人部屋を持つことが出来ましたが、約半数の部屋の暖房器具は最初から壊れており、使用できるものをお茶大生同士で融通しあうこともありました。他にも様々な問題がありましたが、寮の管理人の方に直接もしくはメールで相談することで改善していただくこともありました。

他にも不便を感じた点としては、どこのお店も営業時間が日本に比べれば各段に短いこと、治安があまり良くないため気を配らなければならないことなどがあります。逆に便利だと感じたのは、Wi-Fi が大体どこでも使えること、学生割引が色々なお店で使えることなどです。食生活についてはあまり困ることはありませんでした。



春季ハル大学短期研修報告書

文教育学部 人文学科
学籍番号 1610159 柳 陽乃香

はじめに

私は「特に苦手である speaking と listening の力をつける」「自分の専攻である美術史の知識を深める」という 2 つの目標を持っていたので、他の研修より課題が多く、かつ美術作品が豊富なイギリス・ハル大学の研修に参加することを決めた。本報告書では授業について、課外活動について、生活について紹介し、研修内容を総括したい。



授業について

1 コマ 2 時間・週 10 コマ、今年は“urbanization”というテーマの授業が行われた。Listening/Speaking の授業ではグループディスカッションや隣の人とのペアワークなどが重視され、週末にはリスニングの宿題も出された。Extended Writing の授業ではこの研修の最大課題である 1500～2000 字のレポートを完成させるためのレポートの書き方やレファレンスの調べ方などを教わった。Reading/Writing の授業は先生のストライキによりあまり授業数がなかったが、グループワーク中心で最後にショートエッセイの課題が出された。どの授業も総じて発言することが重要視されており、日本の授業形態との違いを感じた。先生方は優しく、分かりやすい英語でゆっくり授業を進めてくださった。

課外活動について

自由な時間が多く、たくさんの経験をしたが、特に思い出深かったのが「仲良くなった友達とのご飯会」、「ロンドン旅行」、「日本語を学んでいる友達のテスト勉強のサポート」である。滞在の間にギリシャ人・英国人・中国人の友達ができ、毎週のようにお家に招いてもらっては料理をつくってもらった。どの料理もとても美味しかったし、その交流のときに各国の風土に基づいた考え方やジェスチャーなども体験できて大変勉強になった。ロンドン旅行は完全に私たちお茶大生だけの企画で、我々でホテルや電車の予約を行うなどとても緊張したが、大変充実した 1 泊 2 日の旅になった。特にナショナル・ギャラリーは名作揃いで、美術史を専攻している私にとっては興奮する経験となり、今後の学習へのモチベーションに繋がった。また、日本語を学んでいる方と友達になり、彼女に日本語オーラルテストのチェックをお願いされて一緒に練習した

ことも大切な思い出である。特に「程度・頻度」を表す日本語を英語で説明するのが大変難しく、普段何気なく使っている母語を考え直すきっかけとなった。そして日本語を教える楽しさに気がつき、帰国した今も友達のエッセイの確認など行い、日本語学習を通じてハルの友達と交流が保てていることが至上の喜びである。



生活について

ハルは海沿いの街なので海風が大変強く、乾燥がひどかった。それに加えて栄養のある食事がとれないので、アトピー肌の私は後半週から肌の調子がかかなり危険な状態になってしまった。また、寮に関してはそこまで汚いと思わなかったが、備え付けのヒーターが初日から壊れて極寒のイギリスの冬の夜を数日体験したのは辛かった。そのたびに何度も何度も管理人さんにメールして、なんとか持ち運び用のヒーターをいただいた。自分から連絡すれば解決する問題であるし、英語の勉強になったので今となってはいい思い出である。また、スーパーのご飯は美味しくなかったので基本的にまだ美味しさが保障されている外食で済ませていた。ハルは小規模な街ながらもヨーロッパらしい街並みで、立派な大聖堂や厳めしい市役所、博物館や美術館があり、過ごしていて飽きが来なかった。

総括

6週間のハル大学短期研修を通して、冒頭に挙げた2つの目標を完全に達成できたとは言えないが、コミュニケーション重視の授業やネイティブの友達との交流のおかげで確実に **speaking** の力はついたと実感している。特に、行く前までは **speaking** と **listening** が弱いと思っていたが、実際は **listening** のほうがよっぽどできないことに気がつけたので、今後の英語学習の指針が固まったという点で大収穫であったといえる。また、大学の美術史関連の授業を聴講することはできなかったが、芸術的な建築物に囲まれて生活し、ナショナル・ギャラリーを始めハルの美術館にも訪れたので美術作品に十分触れることができた。

反省点としては「英語が早く理解できなかったときにすぐに質問できなかったこと」「空き時間にもっとネイティブの友達と交流すればよかったこと」の2点を挙げたい。しかしハル大学の友達との交流は続いているし、その友達のうちの何人かは日本に来てくれる予定があるので、今後の交流でこのたびの反省点をカバーしていきたい。

ハル大学短期研修を終えて

文教育学部 人文科学科

1610149 廣田舞

2月10日から3月25日までの44日間、イギリス・ハルにて短期研修を行いました。大学生という比較的長期の休みが取れる時期に海外での生活を体験しておこうと思い、この研修に参加しました。以下、44日間の生活を振り返ってみたいと思います。

【大学での授業】

研修先となるハル大学では、週 20 時間の英語の授業がありました。その内訳は、リ



ーディング、ライティング、リスニング・スピーキングです。また、大学の正規の授業を聴講する機会もありました。中国、サウジアラビア、インドネシア、モロッコ出身の学生と一緒に授業を受けました。ライティングの授業では「都市化」というテーマの下、アカデミック・ライティングに必要なスキルについて学びました。この授業では 1500 字から 2000 字のエッセイを書くという最終課題が

課されていました。私自身このような長い英語の文章を書くのは初めてだったので大変でしたが、この課題を通してパラフレーズやリファレンスの書き方など、今後の参考になるようなことをたくさん吸収できたと思います。リスニング・スピーキングの授業で印象に残っているのはディスカッションの練習です。どのようにすれば自分の意見を英語で効果的に伝えるのか、良い訓練になりました。また、ディスカッションの様子は録画されたので、客観的に自分の欠点を見つけることができました。途中、先生方がストライキをして授業がなくなるという事態もありました。日本ではまず起こらないことなので、貴重な異文化体験になりました。

【ハルでの生活】

まずハルの気候についてですが、緯度が高く海に近いこともあり、非常に寒かったです。雪も結構降りました。研修中は寮に滞在していました。キッチン、バス、トイレが共用です。同じフロアには私たちお茶大生 10 人の他に数名の学生がいました。個人的にはとても快適な寮生活でしたが、部屋によっては暖房がなく寒い思いをしたり、Wi-Fi がつながりにくかったりしたようです。共用キッチンがあまりきれいではなかったので、料理は全くしませんでした。駅のそばにあるテスコというショッピングセンターで

買って食べるか、外食するかのどちらかでした。昨年の報告書にはイギリスの料理はまずくなかったと書かれていましたが、それは「美味しいものを選べば」の話だと思います。中華、イタリアンは美味しいです。“Taste of Japan”と書かれた食べ物で何度も失敗しました。

【Japanese Society との交流】

ハル大学には日本や日本の文化に興味がある人が集う **Japanese Society** というグループがあります。彼らが私たちの生活面を全面的にサポートしてくれました。彼らがいれたからこそ、ハルでの 44 日間は楽しく充実したものになったと言っても過言ではありません。皆さんとても優しく、私の拙い英語にも真摯に向き合ってくれました。休日には彼らと近くの都市に遊びに行きました。また、**Language Exchange** という制度がありました。これは私たちが日本語を教える代わりに英語を教えてもらう制度です。お茶大生 1 人につき 4、5 人のパートナーが割り当てられました。毎週のようにパートナーと会って交流している人もいましたが、私はそれほど頻繁には会いませんでした。パートナーという枠にはまらず、自由に **Society** メンバーと交流していました。私が特に仲良くしていたメンバーとは定期的にあって一緒に夜ご飯を食べました。毎回ローテーションで夜ご飯を振る舞うのですが、国際色豊かな面々だったのでイギリスにいながらギリシャ料理、中華料理を堪能できました。私たちは日本代表として、肉じゃががやすき焼きを作りました。彼らと共に過ごした時間はかけがえのない思い出です。

ハルで過ごした期間は本当にあっという間の 6 週間でしたが、非常に密度の濃いものになりました。



ハル大学短期研修

文教育学部 言語文化学科

1710276 村松 莉緒

私は、今年2月10日から3月25日までの44日間という日程で行われたハル大学の短期研修に参加しました。授業は月曜日から金曜日まで、週20時間というプログラムでした。ここからは、授業や普段の生活について少し詳しく記したいと思います。

① 大学での授業に関して

授業は Reading&Writing、Listening&Speaking、Extended Writing の3つがメインで、現地大学の授業の聴講と教育実習生による授業が週に1コマずつありました。基本的な授業はハル大学へ留学に来ているノンネイティブの学生たちと一緒に受けました。1クラス15人程度で、先生方も一人一人を細かく気にかけてくださいました。プログラム中にイギリスで大規模なストライキがあり、Reading&Writingの授業は計3回しか行われませんでした。日本との違いに戸惑いましたが、事前の知識があると良かったと思います。Reading&WritingとExtended Writingの授業ではそれぞれエッセイの課題が出ました。前者は2,3人のグループで350語程度、後者はミニマム1500語のロングエッセイでした。資料を集め、読み、自分の言葉で表現する過程でかなり力がついたと感じます。基本的なエッセイの構造や規則も学びました。

Listening&Speakingの授業ではグループディスカッションをしました。その場面に合わせて考えながら話すというのはとても実践的で難しいことですが、今までにあまり経験のないことだったので非常に有意義だったと思います。同じクラスだった他国からの留学生の方々とも仲良くなり、とても楽しい授業でした。

② 課外活動に関して

ハル大学にはジャパニーズソサエティというグループがあります。今回は事前研修の段階でzoomというアプリを使って、現地の先生方とソサエティの方々とのビデオ会議がありました。ソサエティは、初日の買い出しや毎週水曜日のイベント、金曜日の食事会、週末の日帰り旅行などを企画してくださいました。研修で一番関わることが多かったのはソサエティのメンバーでした。ドロップインセッションはプログラムの内の3週間、毎週火曜日と水曜日に行われました。1日2時間、ソサエティのメンバーや現地で日本語を学んでいる学生さんたちと交流ができます。タンデムパートナーという制度では、日本人1人に対して4,5人の現地学生がついてくれました。彼らと関わることは、英語力の向上のために非常に助けになると思います。タンデムパートナーとは、待ち合わせをしてお茶を飲みながら話したり、休日と一緒に出かけられることもありま

した。時間が空いている日には、積極的にタンデムパートナーと会うと、英語に触れる機会が増え、研修がより充実したものになると思います。

③ 生活面に関して

イギリスでは、パシフィックコートという寮で暮らしていました。大学からバスと徒歩で大体 40 分です。帰り道にいくつかショッピングモールがあったので買い物はいつもそこでしていました。ハルは田舎なので、平日には5時をすぎると飲食店以外はほとんどのお店が閉まっていたのですが、駅前に 24 時間営業の大型スーパーがあるので特に不便はありません。食事は出ませんでした。朝はフレークやパンを食べ、昼は大学の購買で買ったり、時間がある日には周辺のカフェに行ったりしていました。夜は外食も多かったです。寮に共有のキッチンがあったので、自炊をすることもありました。学生向けの寮だったので、ハル大学に通う学生が多く住んでいました。みんな優しくしてくれたので、毎日楽しく過ごせました。洗濯機やトイレ、シャワーも共有でした。暖房設備が不十分で、人によっては部屋が寒いということもありました。そういう場合には、寮の管理人さんと交渉をすれば点検をしてくれたり、ヒーターを貸してくれたりします。すぐに対処してほしい問題がある場合には、直接話しに行くのが一番良いと思います。

44 日間という期間、はじめの一週間は、正直長いと思っていました。しかし振り返るとあっというまだったと感じます。もっといろんなことができたのではないかと、もっと多くの人と関わったのではないかと、思うこともあります。研修に行く方は、悔いのないように、1日1日を大切に、楽しく過ごしてほしいです。慣れない土地で、不安や緊張も大きいですが、自分から働きかければ相手は応じてくれるものです。何もせずにいるのはもったいないです。もっと積極的になろう、この研修が私にそう思わせてくれました。この 44 日間は本当に楽しくて、とても大切な思い出です。この先、一生忘れることはないと思います。出会った方々、サポートしてくださった方々に心から感謝しています。ありがとうございました。



ハル大学研修について

文教育学部 言語文化学科

1710251 須田貴子

①大学での授業に関して

大学の授業は留学生向けのコースなので臆することなく、発言し意見の交換をすることが大切だと思います。お茶大生のほかにも、元から在籍している学生が何人かいるので自然とディスカッションに参加できます。ただ元からの在籍生はもちろん留学生なので、英語を母語としているわけではなく少し英語が聞き取りづらいこともあります。しかし、だからこそ相手の理解力だけを頼みの綱とせず、持ちうる英語力でどれだけのことを伝えられるかが試されます。留学生向けのプログラムということで、英語のスピーキング、ライティング、リーディングのスキルにフィーチャーした授業が行われます。主に3つのコースに分かれていて、それぞれに課題が出されます。その課題を基に授業を行うこともあるので一つ一つの課題にしっかりと取り組み、授業内で発言できるよう関係のあるボキャブラリーを抑えておくことが必要です。そこまで重い課題は出されないなので、開いた時間は②に記載する課外活動に充てることが出来るかと思います。

②課外活動に関して

大学の授業ではディスカッションがメインとなり、日常会話をする機会は十分に得られませんが、ハル大学研修では Language Exchange や Drop in Session という授業外の活動が設定されており、これらの活動によってスピーキング力の更なる向上を図ることができるようになっていきます。Language Exchange とはハル大学の学生と一対一で英語、日本語を教えあうものです。私は毎日のように Language Exchange をすることができ、大変有意義な時間を過ごすことが出来、また素晴らしい友好関係を築くことが出来ましたが、中にはパートナーが忙しく、そこまで高い頻度で Exchange の機会を設けることが出来ない人もいたようです。しかし、学生との交流の機会はこれらの他にもたくさんあり、大人数で集まりご飯を作ったり近くの施設に遊びに行ったりし、そこでコミュニケーションを取ることが出来ます。直接会って話す機会が少なくても、ハル大学の学生と SNS やメールでやり取りをするだけでも十分英語の勉強になります。特に、こういったコミュニケーションを在英中に取っておくと日本に帰って来てからも繋がりが保たれ、定期的に英語でのコミュニケーションを取ることが出来、効果的かと思います。日本では LINE が主流であることを知っていて LINE のアカウントを持っている学生もいますが、そうではない学生も当然います。海外では、Facebook のアカウントを用いた Messenger が主流なので、事前にインストールしておくことでスムーズにコンタクトが取れるかと思います。Drop in Session とは、Language Exchange とは別に、日本語を学んでいる学生の日本語の学習を手伝うものです。自分の母語を学んでくれている人がいるというのは嬉しいものです。日本語の

スピーキングの相手役をしたり、文法を直したりするのが主な活動です。日本に興味のある学生と交流できる貴重な機会であり、日本の文化などについて話すことも多いです。

写真はハル大学の学生が作ってくれた料理と、Language Exchange Partner が誘ってくださったオーケストラコンサートのホールです。



③生活面に関して

イギリスと聞いて皆さんが心配するであろう料理に関しては、そこそこの金額を出せばまずくはないです、といったところでしょうか。日本が衛生面も安全面もしっかりとしている分、その状況に慣れてしまっていると少し困るかもしれません。しかし、スリッパやウエットティッシュを日本から持っていくなどといった、自分の工夫次第では快適に過ごすことが出来ると思います。ハル大学の研修では、泊まるのは寮なのでどの部屋になるかは運次第ですが、私の部屋は写真の通り窓が大きく日光が部屋によく差し込み、更に近くの住人が夜中まで起きていたため、よく眠れず朝も日光に起こされてしまいました。そこでハルに着いた翌日にはアイマスクと耳栓を購入し、それからは安眠を手に入れました。



ハル大学研修を終えて

文教育学部 言語文化学科

1610284 若槻由衣

①研修参加の動機

私は大学で英文学を専攻している。お茶大の英文コースの授業には日本語は一切使わず英語だけで行われるものもあるが、これまでそうした授業を受ける中でしばしば自分の英語力のなさを痛感してきた。授業中に伝えたいこと、聞きたいことがあっても、すぐその場で適切な英語の表現を見つけることができず、結局そのままになってしまうことが度々あった。学部の4年間の集大成である卒業論文に向け、この先更に専門的な勉強を続けていくことになるのに、このままで良いのかという思いが常にあった。今回ハル大学の研修に参加することを決めたのは、一定期間英語しか通用しない環境に自分を放り込むことで、少しでも英語に対する苦手意識を克服したいと思ったからである。また、普段授業で触れている作品たちが生まれた地を一度は訪れてみたいという気持ちもあった。

②ハル大学での授業

6週間の滞在のうちの大部分を占めていた授業は、日本国内ではなかなか経験することのできない、とても密度の濃いものであった。大学での研究の下支えとなるアカデミックな英語運用能力を身につけることを目標としたコースに、私たちお茶大生が6週間だけ参加させてもらうという形であったが、私たちが参加する以前からこのコースで勉強していたクラスメイトたちの国籍は様々だった。異なるバックグラウンドを持った人たちが、英語を勉強するという同じ目的のもとに集まっているということが、何かとても不思議なことに思え、英語の世界共通言語としての役割に改めて気付かされた。クラスメイトたちの母国語を私は全く知らないが、英語を介してなら、拙いながらもなんとか意思の疎通ができる。それがとても嬉しくて、一言一言、どんなに些細な内容でも、相手にうまく届く度に、小さいけれど確かな感動があった。間違えることを恐れず積極的に発言するクラスメイトたちの姿には多くのことを教えてもらった。私は自分の考えを口に出すまでにいつも人より何倍も時間がかかってしまい、間違えたらどうしようという恐れや躊躇いを乗り越えるのにすごくエネルギーを使ってしまうのだが、クラスメイトや先生方は皆辛抱強く私のたどたどしい英語に耳を傾けてくれ、私も次第に肩の力を抜いて発言できるようになった。一緒に授業を受けることができたのはわずかな期間ではあったが、とても温かいクラスだったと思う。先生から学生への一方通行な単なる情報の伝達ではなく、双方向から働きかけ合って授業を作っている様子が印象的であり、普段の自分の受け身な授業の受け方とは真逆だった。自分はなぜ今大学で学んでいるのか。これから先受けていくお茶大の授業の中で、このことは絶えず自分に問いかけ続けようと思う。今回の研修で出会った人たちは皆、明確な意志を持って学問に向き合っていた。私も彼らのように、自らの学びたいという思いを裏切ることなく、学問に対し誠実でありたいと強く感じた。

③課外活動

大学の授業外の時間も、授業とは違った形で学びや気づきが沢山あった。その一つがタデム・パートナーとの交流である。日本語を学習している英語話者の学生とペアを組んで互いの言語学習を助け合うというプログラムである。パートナーに英語でメールを何度も送るうちに、使える表現の幅が少しずつ広がっていった。休日にはハルの港を案内してもらったり、パブで何時間もおしゃべりしたりした。パートナーの人にとっても英語は第二言語であったため、自分も実践したという効果的な英語学習法を覚えてもらうこともあった。特に心に残っているのは、将来の夢の話をしたことだ。将来の目標についてきらきらした目で語るパートナーの姿に背を押され、気がつくとも私も、誰にも面と向かって話したことの無い自分の夢について話し始めていた。遠い外国でそんなことを話しているのがとても不思議だった。イギリスを発つ前日、私たちはお互いに手紙を渡し合った。忘れられない出会いばかりの6週間であったし、私の滞在がこんなに素晴らしいものとなったのは彼らのおかげだと思う。

④イギリス滞在中の生活

寮に滞在中、部屋の暖房や電気がつかなくなったり洗濯機が壊れていたりとか何かしらのトラブルは頻繁に起こったが、気持ちが下を向きそうな時は「トラブルはチャンスだ」というトモコ先生言葉を思い出して気合を入れ直していた。実際、トラブルは自分の英語力を試す絶好の機会を提供してくれたと思う。寮の管理人さんはとても優しい方で、こちらが一生懸命困っていることを伝えるとすぐに対応してくださった。外国で生活する上でヘルプを求めるというのは大切な力なのだと学んだ。

⑤終わりに

この6週間で私の英語は格段に上達したわけではないが、一番根底にある英語を学びたいという思いは以前に比べ遥かに強くなった。この思いを消さずに学び続けることが、これから私が日本でやるべきことだ。最後に、この研修を成功させるため支えてくださった全ての方に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



左:大学図書館に偶然展示されていたヴァージニア・ウルフの姉ヴァネッサ・ベルの絵
右:ロンドンで見かけた赤い電話ボックス

研修参加者からのアドバイス（ハル大学）

1. 出発前に気を付けたほうがいいこと
 - ビザ取得にかかる時間は多めに見積もっておきましょう。
 - 留学期間は短いので、何をしたいか、どのようなスキルを身につけたいか考えて計画を立てておくべきです。
 - ビザの取得は面倒だし時間がかかるので、先生から情報をいただいたらすぐに取得に行く方がいいです。
 - 使いすぎ防止のためにクレジットカードの限度額を確認しておいた方がいいです。特に、留学直前に初めてクレジットカードを作った人は、クレジットカードの使い方など今一度確認しておくべきです。
 - 持っていけば良いと思うものを挙げます。折りたたみ傘（イギリスにおいて傘は必需品です。ただ、現地の方はほとんど差していません）、ウェットティッシュ（おしぼりありません）、シャンプー、リンス初日分（現地のは髪はきしみますが、泡立ちが日本から持っていくものよりましだと思います）、洗濯ネット、ハンガー数個、ショッピングバッグ（袋はもらえないか有料です）、クリアファイル（授業は基本的にプリントを使います）、スリッパ、カイロ（基本的には使いませんが、遠出するときにあると良いかもしれません。風がものすごく冷たいです）、お土産（お菓子やふりかけが持って行きやすいかな？）です。ドライヤーの電圧が現地対応のものか確認してください。事前にスーツケースの重さを確認しておきましょう。空港でみんなに迷惑をかけることになります。機内持ち込み、預け入れ荷物はいずれも2つまで大丈夫でした。帰りの方が確実に荷物が多くなるので、洋服は使い古したものを持って行って、現地で捨てるのも良いと思います。あるいは格安で服が買えるので、滞在中だけ着て、捨てて帰ってくるのもありだと思います。
 - 渡航先の気候をよく調べて衣服や防寒具等を選ぶこと。
 - スーツケースの重量に気をつけること。
 - パスポートやスマホのSIMカード等を忘れないように気をつけること。
 - 手土産（日本のお菓子等）を持っていくとよい。
 - かなり寒いのでカイロや防寒具をしっかり持っていくこと。タオルなどが洗濯で青くなってしまったので汚れてもいいものを持っていくこと。
 - 体調が悪くなった時のことを考えて薬などの用意は必須だと感じた。現地でも薬は手に入るが、自分の体に合うかわからないため、事前に日本で買っておいた方がいい。気候が日本とは違い3月に入ってもかなり寒

く、体調を崩しやすいので、寒さ対策は特に重要だと思う。

- イギリス英語のリスニングに慣れておくと良いです。
- イギリス英語とアメリカ英語の違いを少し知っておくと良いです。
- イギリスの文化について少し理解しておくべきだと思います。
- ハル出身の著名人を知っておくと話のネタになるかもしれません。
- 現地で、寮の近くにどんなお店があるのか把握する。
- 今年度滞在していた寮の近くにはショッピングモールが3つあり、現地で日用品を調達できるので、何から何まで日本から持っていく必要はないと思います。空港で預けられる荷物の重さは限られています。ですので、自分が本当に必要なものを吟味することが大切だと思います。
- 自分が何を学びにいくのか、何も目的にしていけるのかを明確にすると良いと思います。それを行動に移すにはどうすれば良いか、なども事前に検討していくと良いです。研修期間は長いようで短く、あっという間に終わっていた、という形ではもったいないからです。

2. 研修先の授業

- 留学生向けのプログラムなので、難しすぎず楽しめます。
- とにかく発言を求められますので、積極的に発言しましょう。
- ハル大学は宿題が多いです。常識ですが、「どの範囲を」「いつまでに」「どこに」「どの形式で」提出しなければいけないのかを、分からなければ先生に聞き直すようにしましょう。
- 最初は抵抗があるかもしれませんが、積極的に発言しないと損です。最初は授業内容がなかなか理解できずメンタルがやられますが、しばらくすると耳が自然と英語に慣れていきます。分からないことがあったときは質問すれば先生が優しく教えてくれます。お茶大生の他に中国、アラブ圏の学生も一緒に授業を受けました。ペアワークやグループディスカッションがたくさんありますが、日本人で固まらず、彼らとも交流の機会を持った方がせっかくの機会を生かせると思います。ライティングの授業では1500から2000字のエッセイの課題が出ました。何かしら英語の文献を読まなければなりませんし、書かなければならない分量が多いので早めの取り組みをお勧めします。自業自得ですが、深夜までエッセイに取り組むのは非常に良かったです。
- プリントがたくさん配られるため、クリアファイルを複数枚、余裕があればホッチキスを持っていくとよい。
- ほとんど毎日ディスカッションやグループワークをするので、積極的に発

言をしていくとよい。

- 希望すれば正規学生用の講義も聴講出来るので、活用するとよい。
- 現地の学生とディスカッションしたりします。あとは urbanization についてのエッセイを書きました。
- クラスの雰囲気はとても温かく、先生方はこちらのどんな質問にも丁寧に答えてくださるので、間違えることを恐れず積極的に参加することが一番大切だと感じた。
- Reading&Writing：グループエッセイの課題がありました。他国からの留学生とグループになることもあります。21 世紀における問題について自分たちでテーマを決めて書きました。
- Listening&Speaking：グループディスカッションがメインでした。ディスカッションでは言いたいことを明確にして積極的に発言することが求められます。日本人は文法は正確だけど、消極的だと何度も先生に言われました。
- Extended Writing：ミニマム 1500 語のロングエッセイが主な課題です。テーマは urbanisation でした。何について書きたいかを決め、図書館の資料やネット上の文献を集めて、自分の言葉にしてエッセイを書きます。正直かなり大変でしたが、やりがいのある授業でした。
- 積極的に発言するに越したことはありません。単語の少し少しでも自分の言葉を先生や友達に伝える努力を怠らないようにすることです。一見、簡単なように思えますが、それを 6 週間継続することは思ったよりも難しいです。ですが、継続した後は、自分の言葉で考えを伝えることへの大きな自信へとつながります。

3. ホームステイ

- 寮です。部屋は綺麗ですが、キッチン等の公共スペースはそうでもないです。でも 1 人部屋ですし、快適です。
- 洗濯機を一回目に使った時、なぜか青く染まってしまいました。お気に入りの服や白い服は持っていかないほうがいいです。
- 洗濯ネットは必須です。なぜなら洗濯が終わるとほかの人が勝手に出して使うからです。盗難防止のためにも多めに持っていきましょう。
- シャンプー・リンス各 100ml では足りませんでした。
- とんでもなく寒いイギリスなのに、部屋には薄い布団が 1 枚しかありませんでした。ひざ掛けなどの持っていきやすくてあったかい毛布をひとつ持って行くべきです。毛布がほしいと連絡しても、ないので買えませんでし

た。

- 洗濯室は寮の外にあり、忙しいこともあって、なかなか洗濯にいけないこともあります。ファブリーズなどあるとかなり重宝します。
- 私たちは寮に滞在しました。一人部屋でした。壁が薄いので、生活音が割と筒抜けです。Wi-Fi は飛んでいましたが、部屋によってはつながりにくかったようです。私の部屋には備え付けと移動式の2種類のヒーターがありました。部屋によっては備え付けしかありませんでした。移動式は暖かかったです。備え付けの方は夜の 12 時で切れました。夜に数回、爆音で火災報知器が鳴りました。洗濯は一度にたくさん洗えるので、2、3人で回していました。縮み、色移りが怖かったので、セーター、ズボンは全く洗濯しませんでした。洗濯ネットは必需品です。乾燥機があるので、服を干すということもありませんでした。洗剤、柔軟剤も現地で調達できます。
- 暖房が使えるかどうかは真っ先に確認すること（今回は約半数の部屋の暖房が壊れていたらしい）。
- スリッパは必須。安いのを買って、使い終わったら捨ててくる人も多かった。
- 洗濯機が少なく、また壊れていたこともあったので、もしもの時のため手洗い用の洗剤もあると便利。
- 部屋にはハンガーをかけられるところが少ないので、洗濯紐があると便利。
- スーツケースを金庫代わりにして、留守の際はそれに貴重品を入れておくと安全。
- 共用のキッチンに物を置くときは名前を書くといい。
- キッチンペーパーがすごく便利なので常備して置くのをお勧めする。
- 皆で使うもの（洗剤、柔軟剤など）は大抵大きいサイズしか売ってないので、割り勘で買うといい。
- 食器用洗剤やトイレトペーパーなどは放置しておくると他の入居者に使われてしまうので注意。
- 寮でもハル大学の学生とコミュニケーションをとりました。何か不満があった時に伝えやすいので、普段から話すことをオススメします。
- 部屋により暖房の効き具合に差があり、寒さで眠れない日も何日かあったが、そこで我慢するのではなく、困っていることがあれば管理人の方に自分から相談する姿勢が必要だと感じた。トラブルは起こって当たり前だという心構えでいると、何か実際に起こった時も冷静に対処できた。
- キッチン、トイレ、バスルーム、ランドリーは共有です。キッチン用品は共有ではないので、フライパンや鍋は購入しました（ジャパニーズソサエ

ティが購入してくれました)。部屋は一人一部屋でした。暖房設備が弱く、寒い日も多かったです。管理人さんと交渉をすれば点検をしてくれたり、ヒーターを貸してくれたりします。同じ寮に住んでいる人たちはハル大学の学生が多かったです。挨拶をしたり、立ち話をしたりすることもありました。無料で使えるジムもありましたが、使っている人はあまりいませんでした。

- 寮生活でしたが、1人部屋だったため、程よくプライベートが保たれ、且つ、フラットメイトとも仲良くできました。ただ、今年はお茶大生が全員同じフラットだったため、どうしても日本人同士で話してしまいがちでした。もちろん、今まで話したことのないお茶大生とはかなり仲良くなれたのですが、せっかく現地の学生も同じフラットにいるので、もっと話しかければよかったなと思います。

4. 食事について

- それなりの金額を出せば美味しいご飯が食べられます。
- イギリスはすごく味が薄いので、自炊するときは焼肉のタレやドレッシングを持っていった方がいいかもしれません。
- 楽しみのひとつでもあるアフタヌーン・ティーですが、ハルのカフェではほとんどが要予約でした。
- 自炊しようと思っている方は、日本からスポンジと洗剤、必要ならゴム手袋を持っていった方がいいです。質が違います。
- 寮の共同キッチンはまだきれいではなかったため、料理は全くしませんでした。朝はシリアル、昼は大学か周辺のお店、夜は外食かソサエティメンバーの家でという感じでした。食器類はプラスチック製のものがショッピングセンターに売っていたので、それを買って使い捨てでした。大学内にはビュッフェやパブもありましたが、ずっとだと飽きるし、せっかくだから美味しいものを食べたいということで、昼休みは外に出ることが多かったです。大学の近くに Newland Avenue という通りがあり、そこには美味しいお店がたくさんありました。野菜は少ないです。量が多いので友達とのシェアでちょうど良いくらいです。アフタヌーンティーは是非体験してみてください。クロテッドクリームをつけて食べるスコーンは絶品です。
- お店に入ればそこそこ美味しいものが食べられる。
- 野菜不足になりがちなので、小さいドレッシングを日本から持ってくるのをおすすめする。イギリスでも買えるが種類がない。

- 早い時間に閉まってしまう飲食店やスーパーが多いので、営業時間をよく確認すること。
- スーパーにあるチンして食べるタイプの惣菜は当たり外れが大きい。
- 年齢確認が厳しく同伴者もチェックされることがあるので、同席している人のうち 1 人でもお酒を飲みたい人がいたら、全員が身分証明証を持っておくと安心。
- 基本的にレストランの野菜がまずいのでテスコでサラダを買って食べていました。ヨークシャプディングが学食だと美味しかったです。大学のパブの食べ物は大抵美味しいです。
- 物価は全体的に高いが、食品は日本より多めの量で売られているので、それを利用すれば食費が抑えられるかもしれない。野菜が不足するため、時々大学内のサラダバーを利用していた。
- 朝はシリアルのような軽めのもの、昼は大学の食堂 or 周辺のレストランやパブ、夜は外食 or 自炊 or スーパーで買った出来合いのもの、という感じでした。ちゃんとしたレストランやパブでの外食は 8～15 ポンドくらいでした。食費を抑えたいのであれば出来合いの安めのものを買うか、自炊をするかだと思います。私は味にあまりこだわりがないので大丈夫でしたが、初めのうちは食事が口に合わずあまり食べられないという人もいました。日本から簡単に作れるインスタントのものを持っていくのも手だと思います。
- 食事は外食が日本に比べ、値段が全体的に高い印象を受けました。材料や調味料を一から揃える必要があり、結局は外食する方が多かったです。
- 私は日本食が恋しくなることはありませんでしたが、中にはチャイニーズショップ等で日本食を買い揃えているお茶大生もいました。
- 近くにテスコという大型スーパーがあったのでそこで食料を買い揃えていました。安いですが量が多く（日本でいうとコストコのような感じでした）1 人では消費しきれないため、買ったものを友達と共有していました。

5. 現地学生・地域住民との交流

- プログラムに含まれています。私の場合、毎日のようにあちらの学生と話す機会を設けていました。
- 金曜日と土曜日の夜は町中のパブでパーティーがあるようなので、夜はかなり騒がしくなります。酔っ払いも多いので、夜は 1 人で歩かないようにしましょう。
- 正しい英語で話すことよりも相手に自分の意見を伝えることが大切だと思

います。スピーキングの上達は実際に英語で話すことでしか達成できないと思います。失敗を恐れず積極的に交流してください！授業で聞く英語よりも日常会話で聞く英語の方が聞き取りにくいと思います。なまりがある場合もあります。会話で分からないところがあったらそのときにすぐ質問すべきです。分かったようなフリをしてそのまま続けることが一番失礼です。私も何度も聞き返すことがありましたが、皆その都度内容を言い換えたりかみ砕いたりして、私に説明してくれました。6週間という短い期間なので、ようやく仲良くなり始めた頃にお別れという感じです。最初から積極的にいかないともったいないです。

- 会話中に電子辞書を引いている暇はないので、間違いを気にせず、あの手この手で自分の言いたいことを表現するとよい。
- 英語についての質問やエッセイの添削など快く受けてくれるので、遠慮せずに頼むとよい。
- 何を言ってるか理解できなかつたら素直にそういうと言い方を変えて伝えてくれます。SNS等でメッセージを交換するのも勉強になります。スーパーやバスで話しかけてくる人もいますが、みんな基本的に好意的です。
- Japanese Society の人たちが最初から最後までサポートしてくださり、様々な交流の機会を作ってくれた。
- ハル大学にはジャパニーズソサエティという団体があります。初日の買い出しや週末の一日旅行は彼らが計画してくれました。イギリスにいていちばん関わることが多かったのは彼らだと思います。平日にもホームパーティーを企画してくれたり、アミューズメント施設に連れて行ってってくれたりしました。後述するタンデムパートナーも彼らとなることが多いです。
- ドロップインセッションは火曜日と水曜日に行っていました。ハル大学で日本語を学んでいる学生やソサエティのメンバーが来てくれて、談笑したり勉強を教えたりしました。逆に、私たちの課題を見てもらったこともあります。
- タンデムパートナーは一人につき4、5人ついてくれます。彼らとは授業外の時間に会ってお茶をしたり、SNSで連絡を取り合ったりしました。彼らとどれくらい関わるかは本当に自分次第だと思います。タンデムパートナーはイギリスで英語を学んでいる留学生であることもあるし、英語のネイティブであることもあります。どちらにせよ、彼らと関わることは英語力の向上にとっても良いと思います。
- 現地の学生との交流は、Japanese Society、Langage Exchange Partner、寮のフラットメイトとの交流にほとんど限られていました。そ

のほか、お店等で店員さんと話す機会もありますが、自分から積極的に行動しなければ、日本人同士で仲良くなって終わってしまいます。自分の行動次第では先述の内容以外にも現地の方と交流する機会があると思います。

6. 経済面

- 大抵のものに関して日本より物価は高いです。現金は最低額で済みます。向こうはキャッシュレス社会です。
- 日本でポンドに替えられると思いますが、日本円も少し多めに持っていった方がいいと思います。もし足りなくなった時にイギリスで両替することができます。しかしイギリスも土日は銀行が開いてませんので注意が必要です。
- イギリスではほとんどクレジットカードが使えますが、割り勘の時などにそなえてポンドもすこし持っておいた方が安心です。
- 現金4万円、クレジットカード、キャッシュパスポートというプリペイド式クレジットカードに30万円チャージして持って行きました。生活費、旅行費合わせて20万ちょっと使いました。基本的にはクレジットカードで支払いを済ませていたのですが、利用可能限度額を超えてしまい、途中で使えなくなりました。出発前に限度額は確認しておくべきです。必要であれば限度額の一時的な増額をすると良いと思います。あるいは、しっかり管理するという条件の下、複数枚持っていくのもひとつの手です。ご飯を割り勘することが結構あったので、現金は必要です。以上のことを踏まえると、キャッシュパスポートが一番便利だと思います。プリペイド式なのでチャージした分は確実に使えますし、ATMで現地の通貨を引き出すことができるので、現金がもし足りなくなった場合も対処できます。また、日本にいる両親にお金を入金してもらうこともできます。ハルの物価は安いです。
- 大体どんなお店でもカードが使える上に、ATMも色んなところがあるので、現金は気持ち少なめでもよい。
- どんな時にチップが必要なのか、相場はどれくらいかなどをリサーチしておくとうい。
- お釣りは毎回きちんと確認すること。
- 駅の券売機には、お釣りが出ないタイプもあるので気をつけること。
- キャッシュパスポートはカードが使えるお店なら使えたので安心してよいと思う。
- クレジットカードを2枚持って、現金を多めに換金して現金から使ってい

きました。気づかぬ間に限度額に達して困っている子もいたので、注意するべき点だと思います。もしもの時のためにある程度日本円があると現地でポンドにできていいと思いますが、少し損をするので最初に多めに变えておくといいです。

- ほとんど買い物はクレジットカードで済ませ、現金を使うのは割り勘の時などに限られた。週末に遠出することが多く、交通費が思ったよりかかった。
- 私の場合、いちばんかかったのは食費です。食費は抑えようと思えば抑えられます。一緒に食事をする、というのも現地の人と関わりの中では大切なことだと思うので、寮での食事を工夫すれば大丈夫だと思います。
- 週末は旅行に行くことが多かったので、電車代や旅先での買い物、食事などは割とかかりました。旅行に行くか行かないか、買い物をするかしないかも自分次第なので、お金をかけない選択肢ももちろんあります。せっかくなのでいろんなところに行って今までにない経験をしておくのもとても勉強になると思います。
- 事前に 10 万円分、両替していきました。現金はこれで十分でした。
- 文化的にクレジットカードを使う機会が多いので、もう少し少なくてもいいくらいでした。レストラン等で友達と食べて個別会計を行うとき、クレジットカードしか使えないことも多いので、クレジットカードは必須です。
- 公共交通機関のチケットをネットで購入するときもクレジットカードが必要になります。

7. その他

- 水が違うのでシャンプーや洗剤は、向こうのものを使わないと、日本のものでは泡立ちが悪いです。
- イギリスは寒いといえは寒いですが、日中行動している時は慣れてきます。なので日本で日常的に使っていない方であればカイロはあんまり持っていないかなくていいと思います。
- 必要なものはすべてTesco (Tesco) というショッピングセンターに行けば揃います。駅の隣にあるのでとても便利です。格安で衣料品を買いたいときはPrimark (Primark) です。Tescoは基本的に 24 時間営業していますが、そのほかの店は閉店時間が非常に早いです。6 時には閉まります。レシートは言わないともらえないことがあります。大学までの移動はバスです。チケットはアプリで買うことができます。その場合はクレジットカード決済です。旅行時の電車のチケットもネットで買いました。金

曜日の夜は酔っ払っている人が通りにたくさんいるので、複数人で行動するようにしてください。ロンドンの地下鉄も人がものすごい数いるので注意が必要です。スマホはSIMカードを現地対応のものにして自分のものを持って行きました。モバイルデータ通信なしの契約にしましたが、寮、大学、バス内はWi-Fiが使えますし、Wi-Fiが使えるお店も多かったので、なんとかやっていけました。ただ、もしもの時が心配だったので、モバイルデータが使える誰かと一緒に行動するようにはしていません。

- 貴重品の保管には十分気をつけること。
- 公共交通機関の時刻表は時々あてにならない。
- バスや飲食店など、大体どこでもWi-Fiが使えるので、スマホを契約する際はあまり大きい容量でなくてもよいと思う。
- ハル市内はともかく、ロンドンなど大きい街に行くときは、最低2人行動をした方がよい。
- 飲食店で匂いがつくことがあるのでファブリーズ等をイギリスで買うことをオススメします。日本食を多めに持って行くと安心でした。
- レンタルスマホがうまく繋がらない状況で、一人で道に迷ってしまいひやりとしたことがあったので、非常時の連絡手段についてよく考えておくことが必要だと感じた。
- 今年度は人間関係で少しトラブルがあったので、行く前に話し合いをして決まり事はちゃんと決めておくといいと思います。現地で人間関係の問題が起きるとかなり面倒です（それを解決するのも勉強のうちかもしれませんが）。
- 私は研修を通じてもっと積極的に人と関わればよかったと思っています。周りに日本人がいるので他人に頼ってしまうことも多かったです。周りが全て英語、という環境で勉強できるのは留学以外ではほとんどないことだと思うので、一日一日を大切に、有意義な時間を過ごしていただければと思います。そしてなによりも、楽しんで学ぶことが大切だと思います。ありがとうございました。
- 日本語が現地の方もいらっしゃるので日常生活で困った時にとっても有り難いのですが、人の助けばかりに頼っては勿体無いと思います。せっかくの短い期間ですので、自分から行動し、自分から問題解決に取り組み、時には友達と助け合うことが重要になってくると思います。これらのことを行動に移すのは思ったよりも難しく、勇気と忍耐力が必要です。ですが、それを達成できた時には他の何物にも代えがたい自信につながると思います。応援しています。



McGill



マギル大学（カナダ）

研修期間：2018年2月17日（土）～3月18日（日）

滞在：ホームステイ

参加費：約51万円

研修内容：フランス語・ケベック州文化短期研修

マギル大学フランス語研修報告書

文教育学部 言語文化学科

1610230 小林華子

① 大学の授業に関して

授業では基本的な文法の学習や、短いプレゼンテーションを行った。ときどき習熟度別に分かれて違う内容を学習することもあったが、これまでフランス語を勉強したことがないメンバーも数人いたため、全体としてはフランス語の学習に空白がある人や初級者でもついていける内容だと思う。先生はとても優しく、こちらのフランス語がたどたどしくても言いたいことを察して丁寧に説明して下さった。

発音の授業もあり、そこで先生がメールで発音の勉強用のサイトを送ってくださるので、日本でも継続して発音の勉強をすることができる。

最終週には英語を母語とする現地の小学生向けにフランス語でプレゼンテーションを行った。かなり不安だったが、生徒さんや学校の方が好意的に迎えてくださったこともあり、良い経験になった。

② 課外活動に関して

放課後はマギル大学のモニターの方とモンリオールの観光地を散策することが多かった。モニターの方はとても優しく、拙いフランス語で話してもこちらの意図を読み取ろうとしてくれる。ずっとモニターの方とお話できるわけではないため、フランス語(英語)能力の向上のためには自分から積極的に話しかけるなど能動的に動く必要がある。課外活動の内容は、ノートルダム大聖堂に行ったりカントリースキーをしたりと、カナダらしいアクティビティを体験できて楽しかった。土曜日にはクラス全体でオタワやケベックに行き、モンリオールとはまた違った街の空気を感じることができて面白かった。



③ 生活面に関して

まず気候に関して、今回は異次元的な寒さを感じることはなく、北海道や東北に行く感覚で十分だった。ただ、去年はもっと寒かったらしい。天気予報などを確認してその時々に応じて防寒着を調整すると良い。課外活動のスキーのアクティビティの際に分厚めのコート、手袋、帽子、マフラーが必要だった。

ホストファミリーのお家の事情は家庭によって様々で、私がお世話になったファミリーは、お仕事や娘さん(9歳)の送迎などで忙しそうにしていることが多かった。時間があるときは一緒に映画などを見て過ごした。ファミリーの生活リズムの関係で私は基本1人で食事をとっていたが、他の研修生の話によると逆に家族揃って食事をする家庭もあった。あまり話す時間がなくても、何か手伝えることがないか聞くなど、積極的にコミュニケーションをとったほうが良い。

食生活もファミリーによって様々で、野菜をあまり食べないお家や、逆にとても健康志向なお家もあった。マギル大学周辺は飲食店が多いため、栄養バランスは外食で調整することができる。

現地の治安は、あまり夜遅くに歩出ななかつたこともあつてか、比較的良いように感じられた。交通網も慣れないうちは少し難しく感じられるが、東京と比べるとシンプルだ。ただ、交通・お店の表記がモンリオールでは基本的にフランス語なので、簡単な単語は覚えてから行ったほうが良い。母語も出身国もバラバラな人々が一緒に生活している光景はあまり日本では見られないので面白かった。

カナダへの入国の際、湿布などの医療品やお土産など取り上げられたら困るものはスーツケースに入れておいたほうが無難。また、現地で体調を崩した場合に備えて、風邪薬などを日本から持って行ったほうが良い。



最終日に日本人学生・モニターの学生さんと

McGill, Montréal での1ヶ月

文教育学部 人文科学科

1610154 道本千尋

① はじめに

私は第二外国語としてフランス語を2年間履修していましたが、文法・読解中心で実際に運用する力が付いてないと感じていました。せっかく学んできたフランス語を、単位のためだけでなく一つのコミュニケーションツールとして使えるようになりたいと思い研修に参加しました。また文化の多様性について関心があったので、たくさんの文化が共存しているモントリオールという町そのものに魅力を感じました。



② 大学での授業

クラスでの授業は午前中のみで2人の先生に教わりました。9時～11時は実用的なフレーズを繰り返し使いながら基礎的な文法と単語を学びました。例えば、家族の紹介、食べ物、趣味、天気などの表現だったり、オタワやベーグルといったカナダ文化に関するものもありました。その後1時間はパソコン教材を用いながらフランス語の発音を基礎から細かく指導してもらいました。難しいから...となんとなくで済ませてきた発音を一から見直す良いきっかけになり、フランス語を喋ることへの自信にも直結しました。

最終週は4人×2グループに分かれてモントリオール市内の小学校でプレゼンをしました。内容は「日本の食習慣」と「代替エネルギー」についてで、2週間ほどかけて準備をしました。1ヶ月の集大成のような場で成長を自分でも感じることができました。

授業は基本的にすべてフランス語で行われましたが、先生方は簡単な言葉を選んでいましたし、わからないところは何度も言葉を変えながら説明してくれました。また学生どうしで教えあうことも多くあり、とても良い雰囲気の中で学ぶことができました。

③ 課外活動に関して

授業の後13:30～16:30は4人のモニター(マギル大学の学生)が交代制でモントリオールの各地を案内してくれました。ノートルダム大聖堂や美術館、バイオドームなどを訪れたり、名物料理のベーグル、poutine、メープル料理を食べたりとモントリオールを堪能しました。私たちの希望を聞いてアイススケートや美味しいレストランに連れていってくれることもありました。モニターはどの方も優しくフランクに接してくれるので、一緒にいる時間がとにかく楽しかったです。授業で習ったばかりの表現や質問を実際に使って会話をする機会にもなりました。

④ モントリオールでの生活

大学までメロを乗り継いで 25 分ほどにある、両親と妹さんの 3 人の家庭にホームステイをしました。家庭内の言葉がフランス語で、初心者の中には普段の会話を聞き取ることが出来ませんでした。私と話す時にはゆっくりと簡単に、たまに英語を使ってくれたので十分にコミュニケーションをとることができました。毎日、家に帰るとまず「どんな 1 日だった？何を勉強したの？」と聞いてくれるので、授業で習ったばかりのフランス語を使ってみたり、写真を見せながら会話を楽しみました。ホストマザーの料理はとても美味しくて、かつ健康志向でバランスも良く、毎晩家に帰るのが楽しみでした。朝食と昼食は自分で用意し、基本トーストや前日に作っておいたサンドイッチとサラダを食べていました。滞在中に妹さんの 18 歳(カナダの成人)の誕生日パーティーがあり、たくさんの親戚や友人に挨拶をしたり、一緒に歌を歌ったりしたことは、大事な思い出の 1 つです。他にも手巻き寿司や味噌汁などの日本料理と一緒に作ったり、ヨガ教室と一緒にいたり、ドライブにいたり、寮生活では決して体験できなかったことをたくさんさせてもらって、ホームステイのプログラムを選んで本当に良かったです。



毎日 17 時前に課外活動が終わった後は、1 時間ほど友人とカフェや市場などに足を伸ばしてから家に帰っていました。メロ・バス共通の交通系 IC カードは大学から配布され、東京に比べるとシンプルなので交通機関で困ることはありませんでした。

⑤ 最後に

町を歩く人々を良く見てみると生まれのルーツも喋る言語も様々です。地区によってユダヤ系、アジア系、イタリア系の人々が生活圏を築いていたり、モントリオールでは多くの人々が自身の文化を維持しながらも、融合・共存しながら生活しています。こうした日本との大きな違いを味わいながら町を歩くことはとても楽しくて、モントリオールを大好きになった理由の一つです。治安も良いので、思わず将来ここで暮らしたいと思ってしまうほどです。

とにかく盛り沢山のプログラムで、充実した日々を過ごすことができました。授業自体は初心者向けで、フランス語で簡単な会話ができる人にとっては少し物足りないかもしれません。ただそれ以上に日本語が通じない場所でコミュニケーションをとるために努力したり、多様性に富む町を味わえたり、また会いたい大好きな人たちが出来たり、研修に参加することでしかできない経験がたくさんあるので、ぜひすべての人にお勧めしたいプログラムです。そして、そう思えるようになったのは、研修でお世話になったすべての人たちのおかげで、彼らには感謝の気持ちでいっぱいです。

マギル大学・フランス語研修

理学部 生物学科

1520422 福田彩華

<授業内容>

カナダのモントリオールにあるマギル大学にて 4 週間のフランス語研修に参加しました。私たちは今回お茶大から 3 人、日本女子大から 5 人の計 8 人で研修に参加したので、みんな同じ 1 クラスで授業を受けました。9 時から最初の 2 時間が会話を中心とした授業で、休憩後 1 時間発音の練習をアルファベットから始めました。どちらの授業も書くことより、たくさん話すこと、聞くことに重きを置いており、難しい発音も先生がしっかり正してくれました。手鏡を持って口の形を自分で確認しながら発音の練習をしたり、少人数での授業だったのでアットホームで一人一人が発言しやすかったり、受け身のままで終わらない濃い授業時間を過ごせたと感じます。

宿題はホストファミリーの紹介やインタビューをして食べ物の好き嫌いを授業で簡単に発表するものから、最終週にはグループに分かれて小学校でプレゼンを行いました。プレゼンのパワーポイントを作ったり、発音を先生が教えてくれた URL をたどって練習をしたりすることから、パソコンを持っていくととても便利でした。

<課外活動について>

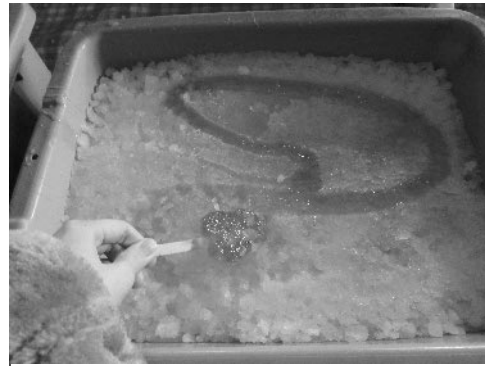
午後は月曜日から金曜日まで毎日、モニターと呼ばれるマギル大学の学生とアクティビティに出かけます。大学のキャンパス案内から始まり、モントリオールの観光名所の教会や植物園などに連れて行ってもらいました。モニターの方々は英語もフランス語も話すことができ、モントリオールを一緒に楽しく観光できるだけでなく、同時にフランス語で話す機会、学べる機会がたくさんあったため、常にフランス語に触れていることができました。仲良くなれますし、これは大きな上達のきっかけの一つだと思います。土曜には学校からバスでオタワやケベックシティにも連れて行ってもらえて毎日充実していました。



小学校でのプレゼンを終えて、指導して下さった先生方と



平地でのスキー体験



メープルシロップを氷の上で

<生活面について>

滞在形式はホームステイでした。ホストファミリーとはたくさんお話することができ、フランス語超ビギナーの私にもたくさんフランス語を教えていただくことができ、とてもよかったです。私がフランス語未履修であったため最初は英語でしか会話できませんでしたが、こちらからも積極的にちょっとした朝の挨拶からわからないことをどんどんフランス語ではなんというのか教えてもらいつつ、習ったことを毎日の生活の中で使っていきました。簡単なフレーズではありましたが、徐々に話すフランス語を増やし、すぐに使えて、フランス語で会話が成り立ったときは嬉しかったです。ファミリーの中では主にホストマザーとの交流がメインでしたが、娘のようによく面倒を見てくれて、本当にお世話になりました。食べ物も名物のベーグルをはじめ、おいしいものが多かったです。私のステイ先は、ヘルシーな食事が出たため渡航前よりもむしろ健康的になって日本へ帰ることができました。モンリオールはカフェもドラッグストアも充実しているため足りないものは補うこともできます。また、カナダの2月~3月はとても寒いです。週に何度も雪は降り、ブーツは必須でした。建物の中は暖かく、脱ぎ着をして調節することで過ごせました。

3年生の終わりから1からフランス語を勉強することに心配はありましたが、参考書を読みつつ積極的に授業に参加していくことで毎日たくさんのごことを得て吸収できました。今回マギル大学フランス語研修に参加できたことは私にとって貴重な体験となり、支えて下さった皆様に感謝しています。

研修参加者からのアドバイス（マギル大学）

1. 出発前に気を付けたほうがいいこと
 - モントリオールの冬はとても寒いので、防寒対策はしっかりしていくように。手袋、帽子（フード付き上着でも）、マフラー、ブーツは必須です。ウルトラダウンがあると暖かくてよかったです。
 - 服や日用品は学校の周りにお店があるため、必要なものだけ持っていても問題ないです。あまりたくさん持っていくと、帰りの荷物が多くて重量に気をつけなければいけません。
 - カイロはトロントの空港の荷物検査で回収されてしまう場合があります。

2. 研修先の授業
 - ほとんど全てフランス語で行われ、どうしても通じない時のみ英語が使われていました。
 - 最初は何を言っているか全くわからなかったけれど、徐々に慣れていきます。
 - とにかくたくさん聞いて、間違えてもいいので積極的に話していきましょう。間違いや、発音もただしてくれます。

3. ホームステイ
 - バイリンガルの家庭でのホームステイでした。家でもマザーは優しくフランス語を教えてくれました。
 - 夕飯の配膳など家にもよるかもしれませんが、積極的にお手伝いしましょう。

4. 食事について
 - 野菜があまり出ない家庭、野菜が多めの家庭と様々です。いろいろな料理を作ってくれる家もあるかもしれませんが、私のステイ先は冷凍食品が多かったです。しかし冷凍食品も発達していて、キッシュやパテなどおいしいものばかりでした。
 - カフェも街中によくあるので、甘いものを食べにいけました。

5. 現地学生・地域住民との交流
 - 現地の学生とは仲良くなれます。

6. 経済面

- クレジットカードが便利です。友人と割り勘する時や、小さなお店での買い物のために現金も少しは用意しておきましょう。
- 私はクレジットカードをメインに使っていたら、持って行く現金は 100～150 ドルほどで大丈夫かと思います。

7. その他

- 語学力に不安があれば参考書を一つ持っていくと安心です。電子辞書は重宝しました。



MONASH College



モナシュ大学（オーストラリア）

研修期間：2018年2月17日（土）～3月18日（日）

滞在：ホームステイ

参加費：約57万円

研修内容：英語・日本語補習校アシスタント短期研修

モナシュ大学研修報告書

理学部 化学科
1720303 阿部友希

① 大学での授業について

大学での授業において、日本との違いを様々な点で発見することができた。個人的に一番大きな違いだと感じた点は、オーストラリアでは常にパソコンを使用し、全員に発言する機会が毎時間与えられていた点である。日本の授業は、学生は着席したままで、ペンとノートを手先生に先生の講義を聴くだけというスタイルが一般的であるが、オーストラリアでは、ペンとノートを使用する時間はごくわずかで、学生はパソコンを使用し、何よりも先生やクラスメイトに対して自分の意見を述べるのが重要視されていたように思う。日本でのように、ペンとノートを用いて、板書を写したりメモを取ったりしようとすると、授業に置いて行かれるように感じた。常に色々な人の発言に耳を傾け、自分の考えをまとめていたので、実際は日本より長い 120 分という授業時間も短く感じた。また、授業の内容に関しては、1 週間ごとにテーマが掲げられており、1 日ごとの授業の構成も Moodle に示されていたため、自分が学ぶ内容が理解しやすい環境であった。オーストラリアに関する内容から、世界全体についてまでテーマが広がっていたので、広い視野をもつことができるようになったと感じた。グループでの話し合いなどでも、常に英語を使用しなければならなかったもので、初めはとても大変に感じたが、日を追うごとにその環境にも慣れることができ、自分の言いたいことを英語で表現できるようになっていった。個人やペアワーク、チームでの発表の機会も多数あり、授業の環境や現地の先生方だけではなく、同じ日本からきている学生たちから刺激を受けることも多かった。

② 課外活動に関して

1 週目に開催されたフィールドトリップでは、他大学の友人との交流や大学の先生方との交流の機会が多くあったように思う。基本的に、事前に日本で答えた希望先に行くことになるので、フィールドトリップ後に、別の場所へ行っていた友人と互いの話をするのも楽しかった。フィールドトリップのそれぞれの行き先で体験できることは、日本ではなかなか体験することのできないことも多いので、とても貴重な経験ができた。私は、チョコレート工場と動物園を訪れたが、どちらもすごく魅力的だった。チョコレート工場では、店員の方がチョコレートについて説明してくれ、その後、実際にチョコレートを購入することができる時間があった。また、オーストラリアの自然



を感じながら、スコーンやアイスチョコレートなどをいただくこともできた。動物園では、コアラやカンガルーといった動物を間近で見ることができたり、迫力のバードショーを観覧できた。オーストラリアの、動物を大切にするという方針を感じることもできたように思う。2 週目には植林に関するボランティアが開催された。そこでは、オーストラリアの乾燥した気候が生み出す環境問題について身をもって学ぶことができた。植林のボランティアを行う前に、担当者の方からこの植林が必要な理由について説明を受けた。日本とは異なった環境問題を抱えているオーストラリアで、今までの自分とは違った視点から環境問題を考えることができたのはとても貴重な経験だった。

③ 生活面について

私は海外へ行くこと自体が初めてであったので、個人的に生活に一番大きな不安を抱えていた。しかし、結果的に、生活面から学んだことが最も多かった。今回の滞在はホームステイであった。大学では休み時間に友人たちと日本語で会話をするのができて、家に帰れば英語で話すしかないという環境だった。初



めは、孤独や不安に襲われることもあったが、毎日英語を聞き、英語で話していると、いつしかホストファミリーと楽しく会話ができるようになっていた。自分の英語に自信が持てなくても、どうにか伝えようとする姿勢や自分の力で乗り越えようとする姿勢を育むことができるのはホームステイだからこそだと感じた。また、ホームステイでは現地の生活を身をもって経験できると改めて強く感じた。例えば、就寝時間。日本では午後 12 時前後まで起きている人が多いと思うが、オーストラリアでは午後 10 時ぐらいに寝るのが一般的。私のホームステイ先に限ったことではなく、友人たちもみな驚いていた。食事においても、日本食を口にするのはもちろんなく、オーストラリアで食べられている食事を口にする毎日だったので、それも現地の生活を知るひとつの方法であった。私のホームステイ先では、魚が出ることは稀で、野菜などよりも肉が中心の料理だった。米も出たが、日本のものとは明らかに違うものだった。日本食が恋しいと思うことは少なく、とてもいい経験ができているなど感じていた。さらに、日本では体験できない「多民族国家」という現状を体験できた。私にとってはこの経験が自分の中で最も意義があったように思う。友人たちと、それぞれのホストファミリーが作ってくれたランチを比較してみると、たくさんの国の料理を目にすることができた。また、通学に使用していたバスや電車の中でも、様々な国の人々を毎日目にし、日本では教科書でしか学べないような「多民族国家」というものを、今回初めてきちんと理解できたように思う。

モナシュ大学短期研修

文教育学部 言語文化学科
1610240 塩谷美咲

春季短期語学研修として、オーストラリアのモナシュ大学に4週間滞在しました。私は英語力の向上はもちろんですが、コミュニケーションツールとして英語を使うこと、異文化に触れることを目的としてこのプログラムに参加しました。

授業内容

クラスでは17人の日本人学生と一緒に勉強しました。日本全国の大学から来ていたので、新しい友達がたくさん出来、その地方での話なども聞くことが出来ました。日本人クラスだったので日本語を使ってしまうのではと思いましたが、授業は全て英語だったので、たくさん英語を話すことが出来ました。授業は環境問題、多文化主義、グローバル化など各週異なるテーマに沿って行われ、オーストラリアと日本を比較しながら深く考えました。グループまたは個人でのプレゼン、ディスカッション、エッセイなどが多く課され、様々な方向からアプローチできたので、英語力の向上とそれぞれのタスクに必要なスキルも磨くことが出来たように思います。自由におしゃべりする時間などもあり、とてもアットホームな雰囲気で行われたので、発表の際に緊張や不安を感じることはあまりありませんでした。



課外活動

大学側が様々なイベントを企画してくれ、楽しむことが出来ました。フィールドトリップでは3つのコースから選ぶことができ、私は動物園とチョコレート工場のコースを選択しました。動物園ではオーストラリアならではの、日本ではめったに見る事の出来ない動物達をたくさん見て、チョコレート工場では色んな種類のチョコの試食とお土産を買う事が出来ました。また Social Media Challenge という、色んなお題に沿って写真を撮り、ユニークさとポイントをクラスごとに競うという企画があったのですが、これのおかげでクラスの仲が深まったとともに、様々な場所に出かけるきっかけとなりました。

授業はほとんど午前中に終わるので、シティやビーチ、休日には少し遠出してフィ

リップ島などたくさんの観光名所に出かけました。特に私はビーチが好きで何度も行きました。中でも **Chelsea Beach** がお気に入り、透き通ったライトブルーの海と空がとても気持ち良かったです。また休日に行った **Great Ocean Road** はまるで絵画の中に入ったような眺めでとても感動しました。

生活面

私のホストファミリーはスリランカ出身の女性とインド出身の女性でした。それぞれの国で英語に訛があり聞き取るのが難しく、最初はとても戸惑ったのですが、気さくに話しかけてくれたのでその日の出来事や休日の予定などとても楽しく会話することが出来ました。夕食はスリランカ出身の女性が作ってくれたのですが、どれもとても辛くて、辛い物が得意ではない私は何杯も水を飲ながら食べました。味はとても美味しかったので、辛すぎると伝え、少し辛さをマイルドしてもらいました。1つの家に日本も含め 3 つの文化が同居するというのは初めての体験だったのでとても新鮮であり、お互いの文化について話したり聞いたりするのが楽しかったです。これは多文化が混在するオーストラリアならではのことだったのではないかと思います。



また私は日本語クラブには入っていませんでしたので現地の友達とはあまり出来なかったのですが、友達になった日本語を学んでいる学生とのやり取りを通して、英語を学べただけではなく現地で使われている若者のスラングなども知ることが出来ました。また私は日本語教育についても学んでいるので、日本語を教える良い機会となりました。

最後に

今回の短期研修を通して、英語力の向上だけではなく、語学や勉強に対するモチベーションも上がりました。一緒に過ごした他の大学の友達は熱心で一生懸命な子が多く、刺激になりました。また英語をコミュニケーションのために使ったことで、様々な国から来た人と意思疎通が出来たのがとても楽しく、日本でも積極的に英語を使っていきたいと思うようになりました。異文化とたくさん触れ合えたのも貴重な体験でした。

オーストラリアで 4 週間過ごして、もっと多くの新しいものに出会いたい、もっと語学力を伸ばしたいという気持ちが強まりました。また、消極的だった自分を少しでも変えられたように思うので、今回の研修で得たものをこれからも大切にして過ごしたいと思います。

モナシュ大学研修を終えて

生活科学学部 食物栄養学科

1730137 吉弘美砂

① 大学での授業に関して

生徒は日本人のみですが、授業は現地の先生によってすべて英語で進められました。週ごとにテーマが決まっており、環境問題や多文化社会、グローバル化など、オーストラリアの生活と深く結びついた内容について学ぶことができました。オーストラリアの授業の特徴として、質問や発言をして反応をみせない授業に参加しているとみなされないと聞いていたため、研修中は積極的に発言するよう心掛けました。17人と小人数での授業だったこともあり、実際日本の大学に比べて発言しやすい環境だったと思います。しかし比較的短い文でしか話さなかったり、問いかけに対して単語だけで答えたりすることも多く、拙い英語でも長い文章で話して自ら伝えようとする努力をもっとすればよかったと後悔しています。

課題は週ごとにプレゼンやディベート準備、エッセイなどが与えられました。その中で最も印象に残っているのが **survey** の課題です。大学内の学生に英語で話しかけてインタビューをしてまわるのはとても勇気のいることでしたが次第に楽しさを感じる事ができ非常に貴重な経験となりました。

他にもサウジアラビア出身の学生や日本語を学ぶ学生と交流する授業もあり、オーストラリア以外の国の教育事情なども知ることができてとても興味深かったです。

② 課外活動に関して

第1週目の日曜日に **Japanese Festival** でラッフル券販売のボランティアをしました。この **Japanese Festival** では現地在住の日本人の方々ともお話する機会があり、日本人の多さに驚きました。また、1週目に行われた **Field Trip** では **Puffing Billy** という、足を外に出しながら乗る汽車に乗りました。天気はあいにくの曇りでしたが、のどかな風景を眺めながら森の中を走るのはとても気持ち良かったです。



③ 生活面に関して

・ホームステイ

ホームステイ先はスペイン出身のファザー、マザーと、インドネシア出身のルームメイトの3人でした。出発前夜のみ別のファミリーと一緒に食事に連れて行ってもらいましたが、普段は外食はせず、マザーやファザーが用意してくれたものを食べていまし

た。どれもとてもおいしかったです。

ファザーとマザーはなまりが少し強くはじめはなかなか聞き取れず困惑しましたが、思っていたよりもすぐに慣れることができました。ホストファミリーとの接し方で大切なことは、よくわからない時は聞き返し、聞き取った内容が正しいか自信のないときはもう一度自分の言葉で話して確認することだと思います。初日はよくわからなくてもつい OK や Yes などと言ってしまっていました。ファミリーは私が話すのを優しく待っていてくれるし拙い英語でも理解しようと一生懸命聞いてくれるので躊躇わずに自分からたくさんファミリーと話すことで上手くコミュニケーションが取れると思います。

・放課後や休日の過ごし方



授業は基本的に午前中で終わるため、放課後は1週目に行われた Amazing Race で出会った学生にシティーを案内してもらったり、行きつけのバーガーショップに連れて行ってもらったりと、メルボルンを満喫していました。またメルボルンだけでもきれいなビーチがいくつもあるので天気の良い日には多くの方がビーチに行っていました。

3 連休にはシドニー旅行に出かけました。メルボルンのシティーと街の雰囲気は似ているものの少し違っているところもあり興味深かったです。他にも Amazing Race で出会った学生や担任の先生を招待してクラス全体でバーベキューをしたり、先生のレクチャーを受けながらクリケットをしたりもしました。大学内のコートを予約すればテニスなども楽しめるのでおすすめです。晴れ渡った青い空の下でするスポーツはとても気持ちがよく楽しかったです。

④ 最後に

この研修では授業やホームステイを通してオーストラリアの多文化性に触れたり、様々なバックグラウンドを持つ学生と交流したりすることができます。また観光を楽しむ時間もたくさんあるのでとても充実した 1 か月を過ごすことができました。一方もともと私がこの研修に参加したのは語学力を向上させるだけでなく自発性や積極性を高めるのが目的で、研修前に比べると研修中は確かに積極的、自発的に慣れた気がしますが、正直もっと頑張れたのではないかと感じています。留学がどれだけ実りあるものになるかは全て自分次第だと思うので、留学を考えている皆さんはぜひ自分から積極的に行動してみてほしいと思います。

3月の夏休み

理学部 物理学科
1620213 原田沙恵

私にとって、今回の短期留学が、初南半球、初オーストラリアだった。もともと語学に大変興味があり、現在学部2年ということで、来年からは専門の勉強や就職活動、大学院試験の勉強などが忙しくなることを考えると、今回の春休みにどこか英語圏へ短期留学したいと考えていた。長い春休みや夏休みを利用して、生活の拠点を短期間でも海外に移せるのは、大学生の特権だと思う。昨年の夏に北京外国語大学の2週間の語学研修に参加したが、それがとても楽しかったこともあり、出発前に慣れない海外生活を思っただけでナーバスになることもなく、期待いっぱいでの留学に参加した。

今回のモナシュ大学の研修は、幾つかの日本の国立大学共催の特別プログラムであり、クラスには日本人しかいない。現地の学生たちのクラスに参加する形の方が「留学らしい」と考えていた私は唯一この点が留学前のネックであったが、実際はとても充実した毎日を送ることができた。渡航前のクラス分けテストの結果、私は一番上のクラスに入れてもらったのだが、日本の大学生活とはまた一味違った素敵な出会いが沢山あった。クラスメイトたちはみんなアクティブで、英語を話すことが大好きだった。好きなだけでなく、英語やコミュニケーションのスキル、プレゼンやライティングのスキルの長けている人たちばかりで、互いに刺激しあい高め合うとはまさにこのことだなあと感じながら1か月間過ごすことができた。特に私が、このクラスすごい！と感じたのは第1週目のプレゼンの授業である。もちろん皆のプレゼンの内容自体も大変興味深いものだったが、私が驚いたのはそこではなく、プレゼン後の質問タイムだ。発表者が誰か質問はないかと尋ねると、皆が満遍なく手を挙げ質問をした。日本では、高校の時も大学でも、質問する人が固定するか誰も手を挙げないか、ということが多かったが、モナシュのクラスでは違った。これこそが、「留学らしさ」なのだと感じられた。学びにも遊びにも積極的で全力なクラスメイトたちとの出会いは、私にとってこの留学を通して得ることができたとても大切な宝物である。



授業以外の課外活動も大変充実していた。プログラム内に組み込まれているフィールドトリップや会話セッション、ボランティアセッションでは他クラスの人たちとも仲良くなることができたし、何より、クラスの人たちとはほとんど毎日、メルボルンのありとあらゆるところに出かけた。慣れないバスや電車の乗り換えもグーグルマップに頼りながら、毎日冒険のような気分でもワクワクしていたのを覚えている。セントキルダビーチで見た、とても綺麗な夕焼けは、まぶたの裏に焼きついて忘れることができない。最初の週末、ジャパニーズフェスティバルに参加するためにシティへ向かおうとしたら電車が途中で止まり、訳も分からずバスに振替輸送させられ、何もわからないままとりあえず周りの人にシティに行きたいとだけ伝えてなんとかたどり着いたなんてこともあったが、3週間後には口ごもった車内アナウンスを聞き取り、振替輸送も完璧に使いこなせるようになるわけだから、人間いくらでも逞しくなれる。そんな可能性を感じた(笑)。



最後に、私がこのように充実した1ヶ月を送ることができたのは、とても温かいホストファミリーのおかげである。彼らは私がやりたいことを一番に尊重してくれた。彼らのサポートのおかげで行きたいところには全部行けたし、やりたいことは全部できた。もちろん、何でもかんでも、というわけではないが、私が私の意志や気持ちを話すとき、彼らは私のつたない英語に真摯に耳を傾けてくれた。私も、彼らの言うことをちゃんと理解しようと努め、聞き取れないところは曖昧なままにできなかった。積極的に英語で会話をし、コミュニケーションをたくさん取れて本当に良かったと思う。ホストファミリーだけでなく、街中で出会った人たちとの関わりの中でもコミュニケーションの重要性をひしひしと感じた。私たちが外国に行く時、流暢じゃなくてもいいから、その国の言語をなるべく話すように心がけることはとても重要なことだ。日本で観光客が日本語を頑張って使おうとしてくれたら嬉しいのと同じである。そうやって互いの国へのリスペクトを持って世界中の国の人たちと交流を持つことができたらどんなに素敵なことだろう。これからは英語や他の言語の勉強を頑張っていきたい。世界中に友達を作ることが私のささやかな夢である。

されど1ヶ月

文教育学部 言語文化学科

1610227 高坂千尋

「たかが1ヶ月で何ができるのか？」。

このプログラムに大きく期待する一方で、研修参加中も、その問いはずっと心にありました。たしかに1ヶ月という時間はあまりに短く限られたものであり、十分であるとは思いません。しかしこの1ヶ月で、私はたくさんの人と出会い、話し、たくさんの物を見聞きして、学びを得ることができました。それらは決して無駄ではなく、今後の自分に影響を及ぼすものでした。与えられた時間を100パーセント活かしきれたわけではないですが、満足のいく1ヶ月を送ることができたと思います。1ヶ月を有効に使えるよう尽力してくれたモナシュ大学のみなさん、ホストファミリー、そして一緒に頑張ってくれたクラスメイトたちには心から感謝しています。

① 大学での授業に関して

日本人のみのプログラムで、クラスはAからGの7クラスありました。私のクラスは17人(女子7人、男子10人)からなっていました。授業はすべて英語で行われ、授業中は生徒同士のコミュニケーションも英語でとるように求められました。パワーポイントを使って講義形式で進められることもありましたが、それがずっと続くということはなく、生徒同士のグループワークやディスカッションなどが多く盛り込まれていました。生徒の積極的な参加が強く求められていたように思います。1週間毎に授業のテーマが決まっており、それを深めていく形で主に授業が行われました。また、大きな課題が毎週あり(ペアで調査とプレゼン、ディベート、ポスター発表とエッセイ、個人でのプレゼン)、それに加えて小さな課題が課されることもありました。



授業中に日本語を使っていると先生に注意されるということもあり、できるだけ英語でコミュニケーションを取ろうという雰囲気がクラスの中で出来上がっていました。英語のレベルはそれぞれでしたが、積極的に発言をし、真面目に課題をやる人ばかりだったので、自分のやる気も自然と上がりました。課題の準備には時間

を要しましたが、頑張れたのはクラスメイトのおかげです。

② 課外活動に関して

学校側がいくつもの課外活動を用意してくれていました。その中でも特に印象的だ

ったのは以下の2つです。

・フィールドトリップ:1週目の金曜日、3グループに分かれてフィールドトリップに行きました。私はショコラトリーと自然保護動物園に行くグループでした。ショコラトリーではチョコレートの味見をした後自由に買い物する時間がもらえ、さらにスコーンと飲み物のサービスもありました。動物園ではオーストラリア固有の動物を見ましたが、園内が広すぎて迷ってしまうほどでした。いずれもガイドブックに載っていたりツアーに組み込まれていたりするような人気の場所だったので、行けてよかったです。クラスメイトと仲良くなるきっかけにもなりました。

・メルボルンジャパンフェスティバル:メルボルンに住む日本人の方たちが主催する祭りで、都市部の中心地で行われました。私は盆踊りのボランティアとして参加しました。仕事内容は、盆踊りの輪に周りの人々を引き入れたり、輪を整備したりするという簡単なものでした。日本が好きな人たちがたくさんおり、日本語で話しかけられることもありました。偶然出会った子がモナシュ大学の学生で、友達になることができたのも嬉しかったです。

③ 生活面に関して

恵まれたホームステイができたと思います。私がお世話になったのは、50代の女性2人が住んでいる家でした。お互いに自分の時間や空間を大切にしており、行く前に抱いていた、「家ではずっと同じ空間にいななければいけないのではないか」という不安は杞憂に終わりました。また、2人ともとても親切で、度々スーパーマーケットや散歩に連れて行ってもらったりしました。特に、滞在最終日の朝に海沿いを一緒に歩いたのはいい思い出です。



基本的に、食事は朝:自分で用意、昼:ホストマザーお手製のサンドイッチ、夜:ホストマザーの手作りご飯でした。放課後出かけたときには、夜ご飯を外で食べてくることもありました。ホストマザーの帰ってくる時間が日によって違ったので、夕食を家で食べる際には、用意してくれていたものを1人で食べることの方が多かったです。ホストマザーはエスニック料理が好きだったので、夕食ではいろいろな国の料理を楽しむことが出来ました。野菜もたっぷり使ってくれたので、とてもありがたかったです。夕飯を食べた後は一緒にテレビを見ながら話すことが多かったのですが、その際にデザートを食べたりお酒を飲んだりすることもありました。話せる時間はそこまで多くなかったため、そういった時間を大切にするようにしていました。

モナシュ大学短期留学

生活科学部 食物栄養学科
1730118 佐藤佑美子

大学での授業に関して

大学での授業はネイティブ教師によるすべて英語による授業でした。出身大学がバラバラになるように7つにクラス分けされ授業を受けていました。事前に説明されていた通り、クラス分けは成績順ではなかったため英語力には個人差がありました。そのため英語力が劣っていた私にとっては、クラスメイトから刺激を受けることも多々ありました。授業ではその都度ペアやグループを作って作業をすることが多く、1人で作業をすることは少なかったです。授業はスライドなどを使って進められることが多かったです。ただ配られる資料や授業で使ったスライドは moodle ですべて共有されていたため、復習などもやりやすかったです。また毎週成績に関係する課題を提出する必要がありました。課題はプレゼンやディベート、エッセイなど多種多様でそれらの課題を提出した後は必ずフィードバックシートが返され、自分の課題のよかった点、そして改善すべき点を知ることができました。教師の方々がとてもやさしく勉強に関する相談に乗ってくれたり、生活面に関する相談にも親身になってくれました。

課外活動に関して

短期研修のプログラムの一環として、1週目の金曜日にフィールドトリップ、2週目の金曜日にボランティアに参加しました。1週目の課外活動は3つのグループに分かれそれぞれ別の場所を観光しました。どの場所も公共交通機関が少なく留学生が一人で行くのは難しい観光地だったので大学のプログラムの一環として行けたのは貴重な経験になりました。2週目のボランティアでは雑草を抜く、腐葉土をまくなど環境を保全する活動をしました。オーストラリアならではの自然を目の当たりにし、またその自然を保護する活動ができ環境保全の大切さ、ボランティアの大変さ、身をもって学びました。



ホームステイに関して

ホストファミリーはとてもやさしく親切でした。また留学生の受け入れをよく行っているご家庭だったので、私以外にも留学生がいました。私がホームステイしている間に

ホストシスターが婚約されることが決まり、engagement party をすることになりました。家族ではないただの留学生の私もパーティーに出席させていただけることになり、なかなかない経験をすることができました。私のホストファミリーはスリランカ出身で家では英語だけでなくほかの言語が飛び交っていることもありましたが、ただほとんどは英語で会話をしていたので疎外感を感じたりということはありませんでした。食事は基本的に3食作ってくれました。また洋服も1週間に1回でしたが洗ってくれました。食事の後の皿洗い、洋服をたたむ以外は特に家事を手伝うようにいわれたことはありませんでした。オーストラリアは水が貴重なのでお風呂はシャワーのみ5分まででした。日本の生活と比べると不便だなと思うことや日本の方がいいなと思うこともありましたが、それ以上にホストファミリーがやさしくまた私にとってホームステイは2回目だったこともあり日本と違うルールの中での生活もとても過ごしやすかったです。



モナシュ大学短期研修報告書

理学部 化学科
1720320 松澤 佳南

①大学での授業に関して

B クラスに所属し、月曜日から金曜日の午前中はクラス単位の授業を受け、午後は会話クラスやイベントに参加した。毎週テーマが決まっており、それについてディスカッションや調査、プレゼンなどをした。

1 週目のテーマはメルボルンの紹介で、モナシュ大学の学生やホームステイファミリーにインタビューをした。調査を通じてメルボルンと日本との生活の違いを学んだ。

2 週目のテーマは環境と持続可能性についてで、大学構内の環境問題に取り組んでいるものを探し、クラスの前で発表した。また、環境問題についての議題に対し賛成反対の2グループに分かれてディベートをした。

3 週目のテーマは多文化主義のオーストラリアについてで、サウジアラビア人と交流をした。日本とは違い宗教的に厳しい人々との交流は緊張もしたが新たな発見もあり充実していた。授業ではアボリジニ文化について学び、特有のデザインを描く体験をした。そして多文化主義のメリットとデメリットを考え、エッセイを書いた。

4 週目のテーマはグローバル化について学んだ。クラスを半分ずつに分けて、それぞれ違う文化の民族のロールプレイをするというのが興味深かった。それによって自分自身の持つ文化がどのようなものなのか捉えることができた。また、オーストラリアの各州の環境問題とその解決策について調べ、ポスター発表をした。最後に、それぞれが興味を持ったテーマについて調べ、口頭発表をした。

②課外活動に関して

2 週目には環境問題に関連して、オーストラリアの植林活動のボランティア活動に参加した。直接木を植えるということはしなかったが、草や木を守るために、土を掘って運んだり、雑草を抜いたりした。

3 週目にはポットラックディナーが開かれた。ホストファミリーを招待して、様々な国の料理や日本文化を楽しんでもらおうという企画だった。日本の抹茶や書道を楽しみながら、オーストラリアのラミントンというお菓子を食べた。他のホストファミリーとも交流ができ、オーストラリアが多文化主義を受け入れている国だということが実感できた。

日本語クラスに訪問するビジターセッションでは、モナシュの学生2人と交流した。日本語と英語の混じった会話は新鮮に感じた。2人とも日本語が上手だったので、私も英語を頑張ろうというモチベーションが向上した。

毎週土曜日には、日本語学校のボランティア活動に参加した。数学と国語の授業で教師のアシスタントをした。現地の子供たちと触れ合うことができ、良い経験となっ

た。

③生活面に関して

4 人家族の家庭にホームステイをした。1 歳の子供の誕生日だったので、パーティーに参加させてもらった。日本とは違い、親戚や友人を集めた大きなパーティーだった。同世代のオーストラリア人と会話のできたので、とても楽しかった。若者には日本の漫画は人気があり、日本語を話せる人も多いと感じた。



授業でディベートをしている様子。賛成派と反対派が対面するように座っていて、中央に司会役と先生が座っている。

机や椅子は移動できるようになっており、

毎日座る位置を変えていた



日本語学校でのボランティア活動の打ち合わせの様子。教師やボランティアが休憩時間に集まれるスペースがあり、お昼を食べながら交流していた。他のモナシュ大学からのボランティアや見学でいらしていた教師の方との懇談会もあった。



ホームステイ先でのパーティーの様子。料理やスイーツの載ったテーブルをたくさん用意した。また、この日のために子供用の大きな遊具もレンタルしていた。ホストマザーの姪たちや義姉が手伝って家全体に飾り付けをした

モナシュ大学研修報告

生活科学部 人間生活学科

1630410 大原瑞希

○授業について

モナシュ大学での授業は、日本の国立 8 大学の学生が集まるプログラムで行われます。私のクラスは 17 人で、毎日 8:30 から 15 分の休憩を挟んで 12:30 までクラスで授業を受けました。週ごとに多文化主義・グローバリゼーションといったテーマと、エッセイ・プレゼンテーション・ディベートといった課題が決められており、金曜に発表や提出をするという形でした。クラスメイトとポスターやスライドを作成したり、テーマについて意見交換をしたりとグループワークが多かったです。午後は、クラスをまたいだメンバーでの会話練習の授業や、日本語を学んでいる現地の学生に日本について話す交流会などがあるほか、オプションで講義を聴講することもできました。クラスメイトとはすぐに仲良くなることができ、毎日楽しかったです。授業も日本の大学でのレベルと同じくらいなので心配することはありませんが、クラス内でもとにかく英語で多く発言するようにしないと効果が薄くなってしまうと思い、気をつけていました。

○課外活動

プログラムに含まれる課外活動としては、Field Trip や Pot Luck Dinner がありました。私は Field Trip ではショコラトリーや動物園に行きました。公共のバスや電車では行きづらい観光地なので、みんなで行けてよかったです。Pot Luck Dinner では、一緒に参加したお茶大生とダンスを披露しました。ホストファミリーに自分の新たな一面を知ってもらえる良い機会だったと思います。

放課後時間がある日は、クラスのメンバーと海や美術館によく出かけました。また、**Monash Japanese Club** というサークルに入りモナシュ大学の学生と友達になることができました。クラスは日本人ばかりなので、現地の学生と交流できる貴重な場でした。日本に興味のある学生ばかりなので、話も弾みました。ここで仲良くなった人と週末に出かけることもありました。



○現地での生活

私の滞在した家はホストマザー 1 人に留学生 3 人という構成で、私の他に中国人の男の子と女の子がひとりずつホームステイしていました。ホストマザーは色々と気にか

けてくれて優しい人でしたが、ギリシャの出身で発音がかなり違うこともあってなかなか相手の英語が聞き取れず、最初は不安と同時に気まずく感じてしまったこともありました。しかし中国人の英語は私にとっては比較的聞き取りやすく、ハウスメイトの女の子がバスの乗り方や門限などを詳しく教えてくれたので助かりました。ハウスメイトの2人もモナシュに通っていたので、一緒に通学したりショッピングセンターに行ったりしました。家では全員が集まるのは晩御飯の時ぐらいで、食べ終わるとホストマザーに自由時間だよと言われて各自部屋にすることが多かったです。ですが、通学路やご飯の時に色々な話をして仲良くなることができました。

食事については、朝は各自でシリアル、昼はサンドイッチ、夜はパスタや芋・タイ米・野菜・肉をワンプレートに盛ってグレービーソースをかけたものが多かったです。ホストマザーは庭でトマトなどを育てていたのとれたての野菜を出してくれることもありました。また、果物も常に家にあってランチにも持たされるのでよく食べていました。普段一人暮らしの私にとっては、ご飯が出てくる環境がとても嬉しかったです。モナシュには色々な飲食店が入っているのでそこでお昼ご飯を買うのも楽しいですが、物価が高いのでランチを持たせてくれるのはありがたかったです。その他生活については、洗濯が週1回で服の数がギリギリだったぐらいで、快適に過ごすことができました。



○まとめ

私はずっと語学に苦手意識がありましたが、海外で1ヶ月というまとまった期

間生活するチャンスはそうそうないだろうと思い、今回の研修に参加しました。正直、英語力については自分の勉強不足を感じる場面が多々ありましたし、もっと英語ができればもっとこの人と仲良くなれたのと思うこともありました。しかし、出会った人たちは皆親切で、拙い英語でも熱心に話を聞いてくれましたし、専攻も生まれも様々な人たちと話すのはとても面白かったです。英語は世界を広げるためのツールと考えて、もっと練習して行きたいと思いました。

オーストラリア研修

生活科学部 食物栄養学科

1730126 藤谷麻由

大学での授業は、講義は少なく、自分たちでアクティブに活動するものがほとんどでした。ペアやグループで話し合いをすることが多く、積極的に話すことが苦手な私は、初めは戸惑いましたが、回数を重ねるうちに意見を言えるようになりました。一番大変だったことはディベートです。日本語でも意見に対して反論するのは難しいのに、それを英語でするのは至難の業でした。困っている時は先生やクラスメイトが助け舟を出してくれました。特にクラスメイトには何度も助けてもらって感謝しています。オーストラリアについて英語で学習できたのはとても興味深かったです。まず 1 週目でオーストラリアの生活やマナーについて学んだので買い物や公共交通機関に乗るといった日常生活に役立ちました。3 週目のテーマの多文化主義では、単一民族の日本では気づけないことを多く学びました。1 時間だけ現地の学生に日本語を教えるという時間がありました。私が担当した子の一人は韓国出身でしたが流ちょうな日本語を話していました。自分ももっときれいな英語を話したいと思わせてくれました。連絡先を交換したので今でも彼女の宿題を手伝ったり、日本やオーストラリアについての情報を交換しています。普段のクラスは日本人だけのクラスでしたが、大学も学部も年齢も異なる人で構成されていたので普段の大学生活の話や地元の話をしてクラス全員と仲良くなることができました。

Field trip で私は Puffing Billy に行きました。森の中を走る蒸気機関車に乗ったのですが、この電車では窓から足を出して座ることができるので皆そうしていました。蒸気機関車に乗れるというだけでわくわくしていましたが、思っていたよりもスピードが速くてスリル感も味わえました。



橋を渡るときは靴やスマホが落ちてしまわないか心配でした。今までこのような電車には乗ったことがなかったので貴重な体験になりました。天気があまり良くなかったのが残念でしたが、木々に囲まれた中を進むのは最高に気持ちよかったです。途中で野生の動物も見られました。この電車に乗る前に、オーストラリア伝統のスコーンを食べ

ました。ジャムとクリームがのっけていてかなり甘かったですが、スコーン自体は素朴な味だったので美味しく食べることができました。一緒に出されたコーヒーがインスタントなのに驚くほど濃くて美味しかったです。

放課後は友達とビーチやシティに行ったり、ホストファミリーと買い物に行ったりしました。クラス全員で公園でバーベキューと鬼ごっこをしたのはいい思い出です。外は8時過ぎまで明るいのに多くのお店が5時には閉まってしまうことに驚きました。ホストフ



ァザーとマーケットに行ったときに、野菜や果物が山積みになっていて全て量り売りだったのは衝撃的でした。ホストファザーによるとスーパーで買うよりマーケットで買う方が断然安いそうです。日本では見たことのないような、崩れ落ちそうなくらいの量が山積みになっていま

した。買い物の仕方でもワイルドでりんごを10個以上買ったり、ぶどうも少なくとも5房は買っていました。この日は他にもたくさんの種類の果物や野菜を買いました。その日以来毎食りんごが出てきました。オーストラリアの食事では「細かく切る」ということがあまりされていませんでした。果物は丸かじりで、魚は1匹ごと、肉はかたまりで出されました。果物で唯一カットされていたのはメロンとスイカだけでした。お弁当にも毎日りんごやなしやももが丸ごと1個入っていました。3連休を利用してシドニーへ行き観光もしました。初めはホストファミリーとコミュニケーションをとるのがとても難しく不安なことが多くありましたが、テレビを見たり、散歩をしたりして一緒に過ごすうちに互いの性格や考え方が分かってきて意思疎通が図れるようになりました。大変お世話になったホストファザーとはこれからも連絡を取り続け、またいつか会いたいです。

オーストラリア・モナシュ研修を終えて

文教育学部 芸術・表現行動学科

1610558 平野有紗

授業内容

クラスは 17 人＋現地の先生という構成で、お茶大の他にも九州・大阪・名古屋・一橋・東工・学芸・埼玉の学生がいました。初めはクラスにお茶大生が自分だけでとても不安だったのですが、クラスメート達と仲良くなれ、とても楽しい日々を送ることができました。授業内容は **Australia, Multicultural, Sustainability, Globalization** など日本では深く学んでいなかったものでとても勉強になりました。とにかく私の苦手としていた、プレゼンテーションや発言が多く求められましたが、先生からアドバイスをもらいながら数をこなすうちに苦手意識も自然となくなりました。その点が一番成長できたと感じています。また課題が毎週出されました。中には現地の人に **Survey** を行うなど大変なものもありましたが、英語力・コミュニケーション力ともに上達できたと感じています。



(Class F !)



(Filip island)



(放課後も楽しい)

課外活動

・Filip island

クラスの友達と現地のツアーを予約して **Filip island** というメルボルン市内から 2 時間くらいの所に行きました。午前中はコアラ、カンガルー、ワラビー、ディンゴなど **Australia** の動物たちを間近で見ることができ、とても楽しかったです。午後は野生のフェアリーペンギンが海から陸へ上がるのを見るために砂浜に行きました。雄大な自然の中で必死に生きるフェアリーペンギンを間近で見ると涙が出そうでした。日本では見ることでできない絶景だったと思います。

・Sydney

幸運にも三連休があったので、自分たちで飛行機やホテルを予約して二泊三日で友人とシドニーに行きました。シドニーはメルボルンから飛行機で 1 時間半の所にあります。人が多く、メルボルンとはまた違った良さがありましたがここでも多文化主義を様々な場面で感じる事ができました。オペラハウスやブルーマウンテンにも行き、とても楽しい時間を過ごすことができました。



(Sydney で)



(field trip)



(ハンバーガー)

生活面

ホストファミリーはマザー、5歳のシスター、中国からのインターナショナルスチューデントが2人でした。マザーの料理は毎日とても美味しかったので、ランチもディナーも楽しみでした。朝ごはんは自分でパンを焼いて食べ、フルーツをたくさん大学に持っていっていました。家は大学までバスで15分ほどで、初めはトランスポートーションを使うのがとても不安でしたが、グーグルマップに助けられました。

朝は6時に起き、夜は早い日は9時半くらいに寝てとても規則正しい生活を送ることができました。大学は大体お昼に終わるので、放課後は友人とシティに行ったり、ビーチに行ったり、1人でランニングをしたり、シスターと家で遊んだりしました。何をするにも雲ひとつない晴天とカラッとした暑さで気持ち良かったです。ホストファミリーは皆親切で、ディナーの時間には色々なことを話しました。私の拙い英語でも伝えられるようにメモに書いたり、ジェスチャーを加えたりと工夫をしました。

まとめ

多文化主義とは何かを考えながら様々な文化に触れ、大切な友人ができ、人生で一番楽しかった1か月となりました。初めは不安なことだらけでしたが、何事もやってみることが大切だなと実感しました。ここで学んだことを生かしていき、また必ずオーストラリアを訪れたいと感じた研修でした。

Monash University 短期語学研修を終えて

生活科学部 人間生活学科

1630433 高瀬楓子

① 大学での授業に関して

毎回の授業は、週ごとに決められたテーマである、オーストラリアの文化やグローバル化について学び、週の最後に survey、debate、essay、oral presentation と、それぞれ異なった課題が出されました。それ以外にも細かな課題がいくつか出て、楽ではありませんでした。計画的にやれば無理な分量ではなかったです。クラスも 17 人と小規模で、グループワークや授業中のゲームなどを通して、男女や大学も関係なく、仲がとても深まりました。私のクラスは全員がアクティブで、積極的で、非常に授業の質が高く、毎日が学びの連続で、とても刺激を受けました。授業に行くたびに、全員の英語が上達しているのがわかることが、自分を焦らせ、また意欲を持つきっかけになりました。先生もとても生徒思いで、お別れが本当に寂しかったです。お互いを高め合えるクラスで授業を受けられてとてもよかったと思っています。

② 課外活動に関して

私は毎週土曜日に、メルボルン国際日本語学校で、幼稚園のボランティアをしていました。専攻が発達臨床心理学ということもあり、海外での教育や保育を見てみたいと思って希望しましたが、毎週子どもに囲まれて過ごすのはとても幸せで、また専攻の勉強にいかせるような学びも多い時間でした。ただ、この学校は日本語のバックグラウンドを持つ子ども達が、日本語を学ぶためのものなので、自分が英語を学ぶという留学の目的は、あまり達成されないように思いました。子どもや教育に興味がある人には、ぜひおすすめしたい活動です。

また、たいていの授業は午前中で終わるので、たくさん場所に出かけました。メルボルンはアートの街で、オーストラリア自体も非常に多文化なので、いろいろな国の文化が混在した建物や、雰囲気の違い美しい光景が見られます。授業がない日や連休は少し遠くに出かけました。ビーチの綺麗さに感動したり、カンガルーを間近で見たり、山の上から一望したオーストラリアの自然に圧倒されたり、日本では絶対にできないような、自然に肌で触れるたくさんの経験ができました。city だけではなく、自然に触れる場所にも行けてよかったと思います。

オーストラリアは日の出が 7 時前、日の入りが 20 時前後で、交通機関も決して便利とはいえないので、出かける際には気をつけました。

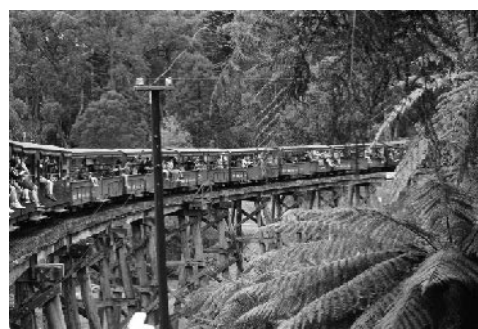
③ 生活面に関して

私のホームステイは、50代のホストマザーと2人暮らしでした。初めはいわゆる「ホストファミリー」を想像していたので、2人で暮らすということに不安もありましたが、とても快適な部屋と家、そして親切で教養深い素敵なマザーに恵まれました。毎日食事の時に、学校のことや放課後に行った場所について話したり、メルボルンのおすすめのスポットを教えてもらったり、映画や本を薦めてもらったり、時には日本やオーストラリアの教育のことや、multiculturalism について話したりなど、マザーとの毎日の会話から学んだことがたくさんありました。最後の課題である oral presentation についても、マザーに教えてもらったことがいかされました。私もマザーのように教養を深め、そして様々なことに対して肯定的な態度を持てる人になりたいと思っています。

④ 次の研修生に伝えたいこと

- ・朝晩は思っているより冷え込むので、上着がいくつかあった方がいいです。日中は日差しが強くて気温が上がるので、調節しやすい服がベストです。
- ・スマホのデータ通信料は、地図や帰りを調べるなどの最低限の使用におさえて使えば 2GB で十分です。Wi-Fi の有無は家庭によるので、プランは要検討。
- ・現地の人と関わる機会をたくさん持つと会話の勉強になります。ホストファミリー以外にも、現地で友達をつくととても助けになってくれます。
- ・帰る時は本当に喪失感におそわれるので、たくさん素敵な思い出をつくって、たくさん写真を撮って、人生で最高の夏休みを過ごしてください。

最後に、私は大学生活を通して「こんなことをした」と明確に言える思い出が欲しいと思って、この研修を希望しましたが、思ったよりもはるかに楽しかったです。研修に行く前は、留学に行ったという事実をひとつのステータスにしたいと思っていましたが、必要なのは行くことではなく、行ったという経験を今後どういかしていくかだと、研修を終えて思います。留学に行かなかったら、この研修を通して出会ったたくさんの人に会わなかったら、今見えている景色は見えていないかもしれないと思うと、大変なことも多くありましたが、行って本当によかったと思います。良い思い出になることは間違いないので、ぜひ一歩踏み出して欲しいです。



研修参加者からのアドバイス（モナシュ大学）

1. 出発前に気を付けたほうが良いこと。

- 渡航先の交通事情や気候などについて、できる限り情報を集めておく。
- ホームステイ先から大学への行き方をホストファミリーに聞いておく。
- ホストファミリーとメールなどを通じて、基礎的な情報交換をしておく。
- 体調管理、日用品を買う、電化製品の電圧などを確認する（私は空港でドライヤーを買いました）、両替をする。
- クレジットカードの機能がどうなっているのか確かめておきましょう。海外の ATM でも現金を引き出せた方が安全なので、その機能がないカードしかないのなら新しいカードを作った方がよいのではないかと思います。
- 大学の moodle を確認して必要なプリントを印刷又はダウンロードしておくこと。
- 追加授業の案内をきちんと確認すること。
- パスポート、VISA、クレジットカードなどの申請は余裕を持って早めに行う。
- キャリーケースは帰りのお土産のスペースを空けておくくらいの荷物量が良い。
- ムードルに予めスケジュールやクラス分けなど大量の情報がアップデートされるのでこまめにチェックした方がよい。向こうで何でも買えるので無理して荷物に詰めようとしなくてよかった。
- パスポートはなるべく早くとる。
- 衣服は夏服を基本として、羽織りものなども多めにもっていく（本当に気温がころころ変わります）。

2. 研修先の授業

- 自分のパソコンが必須。（授業はすべてパソコンを使用）
- Writing の課題も出るので、電子辞書は持っておくべき。
- 思っていたより課題が多かった、プレゼンの力がつく、周りが日本人なので意識して英語を話したほうが良い
- お茶大でいう ACT に似ていると感じました。自分がどれだけ参加意欲をもって取り組めるかが大事だと思います。積極的に発言をしたり先生に質問したりする姿勢が必要です。
- 先生によってやることが少しずつちがう。
- パソコン必須。

- パソコンが壊れた場合はスマホで代用。
- ネイティブの先生によりオールイングリッシュで行われるがわかりやすく話してくれるため語学力に自信がなくてもついていける。
- 日本人生徒だけのクラスであるため自分たちで日本語を使わないように工夫すると良い。
- 会話の授業が2回設けられており、スピーキング力をあげるのにとっても良い授業だった。
- 日本人クラスなのでつい日本語で話そうとしてしまうが、それでは意味がなくなってしまうので最低限授業中は英語だけにする。前日に課題が与えられることもあった。
- クラス全員がアクティブ、授業でのグループワークでも常に英語を使うことが求められるので、自分から積極的に。
- 午前中に授業、午後は遊んで、帰ってから課題、など割と大変なので頑張る。

3. ホームステイ

- 聞き取れないことやわからないことがあれば、必ずホストファミリーに聞くこと。(私はたくさん質問しましたが、快く答えてくれました。)
- シャンプーなどは、日本の製品も販売されていたりするので、こだわりがそこまで強くないのならば、現地で買うほうが荷物が軽くなってよい。
- 水不足により、洗濯できる日が決められていたりするので、気になるようであれば着替えなどは多めにもっていくべき。(でも、洗濯物が乾くのは早かったです。)
- 日本ほど、外と家の中での履物を区別しないので、スリッパなどを持って行っておくとよい。
- ご飯が美味しかった。
- シャワーを立ちながら浴びるのは最後まで慣れなかった。
- 他にも留学生がいてファミリーで遊びに行くような家庭ではなかったが、皆親切でいい家庭だった。
- 綺麗な部屋で快適だった。
- ホストマザーへの連絡はきちんとした方がいいです。私の連絡が遅くて心配させてしまったことが何度もあったので、日本にいるとき以上にまめな連絡を心がけることをおすすめします。
- ホームステイになれている方が多い。
- シャワーは5~10分が多かった。

- お昼ご飯は作ってくれる家と作ってくれない家がある。
- この留学において、ホストファミリーとの会話が最も語学力向上につながったと思う。できるだけ自分の部屋にこもらずホストファミリーとの会話を楽しむと良いと思う。
- 家庭によって食事や靴の着用、洗濯の回数など様々なのであらかじめ確認しておくが良い。
- 全く日本語は通じないし、学校と違ってネイティブの発音でないと聞き取ってもらえなかったのがつらかった。私の家では気を遣ってお寿司やラーメンも出してくれた。家事をやらされている友達もいた。
- とてもいい方でした。洗濯は週一と言われていましたが、マザーの裁量で決められていました。
- 私はマザーとの2人暮らしだったので、自分の時間もマザーとのコミュニケーションの時間も取れて、かなりよい環境でした。

4. 食事について

- 多民族国家なので、ホームステイ先によって出てくる食事内容は異なる。(私のところは肉がメインでしたが、友人のところは野菜がメインだったそうです。)
- ホストマザーに事前に伝えて、友人と一緒に夕食を外食で済ませたこともあった。
- ホストマザーが作ってくれた夕食で、チキンとポテトだけというような日本であまり食べないような内容の日もあった。
- 異文化について身をもって学ぶ良い機会だったと思う。
- ホストマザーの料理が毎日美味しかった。フルーツが食べ放題で嬉しかった。量が多かったので伝えたがあまり減らなかったのが頑張って食べた、最終的には胃が拡張しました。
- 外食や水は高かった。
- 毎日ホストマザーお手製のサンドウィッチを学校に持っていきました。中には自分で作るという人もいました。物価が高いので、節約したいのであればお弁当は持参した方がいいと思います。
- 水も一本で200円を超えてしまうので、ウォーターボトルを持って行っていました。日本で使っている物があれば持って行くと便利かも知れません。
- いろいろな国の料理が食べられます。寿司のお店も複数あるので、日本食が恋しくなったら行ってみるといいかもしれません。
- スリランカ系の家は辛いものを出す人が多い。

- 最初に辛いものが大丈夫かどうか聞かれる。
- コンビニのご飯は高め。
- 学食のご飯は高い。
- 辛い料理も多いため苦手な場合は早めに伝えることをおすすめする。私はメールで辛いものが苦手と伝えていたため始めは気にしてくれていたが、これくらいならまだいけるかなと思いおいしい！と食べていたらどんどん辛くなっていった。
- 果物が安くておいしい。
- 朝は自分で家にあるもの（シリアルやパン、ヨーグルト）を食べ、昼は前夜につくったサンドイッチを食べた。夜はホストマザーが用意してくれた。
- ホストが3食用意してくれていてありがたかった。物価が高いので食事するとなったら1000円はする。基本量が多い。日本食、中華料理、韓国料理、アジア料理と何でもあった。
- 本当にいろいろな国の文化が入って来ており、いざとなれば日本食もあるので、合わなくても食事に困ることはないと思います。(物価が高いので金銭面さえクリアすれば…)
- 基本的に外食は高いです。

5. 現地学生・地域住民との交流

- 大学の授業の一環で、現地の大学で日本語を学ぶ学生と交流する機会は全員にある。
- その他にも、現地の学生が大学のキャンパスを案内してくれる授業もあった。
- 大学で課題をしていると現地の学生が話しかけてくれたこともあった。
- 地域の人々も親切な人が多く、電車やバス、道が分からないとき、尋ねると優しく教えてくれた。
- 自ら行動しないとあまり交流はなかった。
- 街にいる人は大抵優しいので電車や道などよく聞きました。
- 日本語が話せる学生とは知り合う機会があり、何度か一緒に出かけたりしました。英語でコミュニケーションできる相手がほしいのなら、別のコミュニティを探しに自分で動く必要があると思います。
- 授業ではあまり関われない。
- 日本語クラブには行って友達を作っている人もいた。
- ホームステイ先に現地の学生がいるときはそこから友達を増やせる。
- 現地の人たちと交流する機会は少ない。じぶんから積極的に行動する必要

がある。例えばジャパニーズクラブといったサークルに所属していたり、現地のバスツアーに参加していた人は他の人に比べて交流する機会が多いように感じた。

- プログラムではあまり用意されていないので自分でサークルなどに積極的に参加しないと交流できない。SNS を交換しておくとも帰国後も気軽に連絡がとれる。
- クラスメイトの日本人と交流しがちなので、現地の人との交流が欲しかったら自分でサークルを探したりするなどの努力が必要。

6. 経済面

- 基本的に日本よりは物価は高い。
- 日本よりもクレジットカードの文化が強いので、基本的にはクレジットカードで買い物ができると思っていてよい。(自販機でもクレジットカードは使えた。) だが、お祭りの屋台などでは現金のみになるし、クレジットカードの種類によっては使えないこともあるので、現金も持っておくべき。
- メルボルンで公共交通機関を利用するには、myki というカードが必要になるので、現地に着くとカードを購入してチャージすることになる。
- 毎週末旅行に行ったのでかなりの額を使った。
- 5万円両替していき他はクレジットカードで払った。
- 旅行のホテル代などを割り勘で友人に現金で払ったので、割とすぐに現金はなくなった。
- 人によりますが、少なくとも6万円は越えている人が多い印象を受けました。10万円を超えるか超えないか位の人が私の周りには多かったです。
- スーパー以外は高い。
- 日本より物価が高い。
- 自販機などを含め、基本的にカードを使えるがたまにつかえないところがある。また、個別精算できないところや友達と割り勘をする際には現金が必要となるためある程度用意しておくとうい。
- 自動販売機でもコンビニでもクレジットカードが使えた。とにかく物価は高かった。特に水が高く、500mlのペットボトルは250円ほど。
- 現金は300ドル持って行って、2週目の途中からわりと豪快に使って使い切りました。基本的にはクレジットカードをつかいました。物価が高いのは本当ですが、そこまで無駄遣いをしなければそこまでお金がとぶことはないです。私は1ヶ月10万前後でした。

7. その他

- 私は、この研修が初めての海外渡航でとても不安でしたが、周りの人にも助けられて実り多い研修になりました。不安でも、現地に行って自分で考えて行動したり、周りの人に助けを求めたりしていくうちに、現地の生活にも慣れて楽しくなってきます。現地に行かなければわからないこと、留学でしか学べないことはたくさんあると実感しました。
- 本当に楽しい研修だった。オーストラリアの海は最高なので水着を持って行ったほうが良いです（私は忘れたので現地で買いました）。他大の友達がたくさんできて嬉しかった。ホテルを予約する際は説明をきちんと読みましょう。情報を見落としていたがために2度も失敗してしまいました。特に安いホテルに泊まる際は注意が必要です。Wi-Fiのある環境以外でもネットが使えるようにしておくことをおすすめします。公共交通機関の正確さが日本とは違うので、事前に調べておいたルートを変更せざるを得ない場合も多々あります。私はグーグルマップに何度も助けられました。シティを歩く場合には、地球の歩き方のマップなどがあれば何とかなると思います。
- 日本のものを大学内で買える。手ピカジェル、除菌シート、リセッシュは必須。気温は高くても湿度が低く寒いときがあるため長袖、上着は必須。トレーナーで過ごせる日もある。お土産でおりがみを持って行ったら喜んでもらえた。マイキーカードはシティに行く回数などによってパスが得な場合とマニーが得な場合があるため計算して自分に合う方を買うとよい。
- 大学のコートを借りてバドミントンやテニスができた。英語を話せなくても話そうとする積極性が大事だということが分かった。
- 土日を使って小旅行に出かけるなどの経験ができたりするので、オプションの予定は慎重に入れたほうが良いです。

編集後記

皆さんの報告書を読んで、自分が初めて海外に行った時の事を思い出しました。1人でしたが、不思議と何の不安もなく、見るものすべてが新鮮で、とにかく楽しかったような記憶がぼんやりと蘇ってきます。きっと多くの困難や、挫折、驚きなどに直面した時もあったのですが、辛い経験すら自らの糧として昇華することが出来るパワーは、若い時分に特有のものであったと思います。皆さんの報告書からは、お一人お一人の楽しい、辛かった、感動した、驚いた、という様々な気持ちが鮮明に伝わってきました。将来様々な場面で、この短期研修で得た「生きた経験」が活かされることと思います。

混迷を極める現代、日本もまたグローバル化の波に否応なく飲み込まれているのであり、実感として「世界」とは何であるのかと、自省の意味も込め、考えさせられる機会が増えているように感じます。現代を背負って生きる若い世代には、この「世界」に対する多面的な知識と、自由闊達な思考が求められるのではないのでしょうか。これまでの勉学によって身につけてきた知識を武器に、是非実体験として海外での経験を積んでほしいと切に願っております。海外での生活は、自分の中の当たり前を疑い、自分を変革する良い機会です。そんな一歩を踏み出す際のお手伝いが出来れば幸いです。

井上貴恵

2017年度春季 海外短期研修報告書

発行日 2018年9月
発行 お茶の水女子大学 国際教育センター
〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1
Tel. 03-5978-5913

研修・編集担当

国際教育センター
アソシエイトフェロー 井上 貴恵
アカデミックアシスタント 長塚 尚子

印刷・製本 よしみ工産株式会社